
傭兵と決闘者の協奏曲

デボエンペラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傭兵と決闘者の協奏曲

【Nコード】

N3100X

【作者名】

デボエンペラー

【あらすじ】

SEED事変から3年後のグラール太陽系、そこでは亜空間研究のほかにあるカードゲームが流行していた。だがそのカードゲームは旧文明から伝わる決闘の儀式でもあり、それを知っていた異能者の集団があった。一人の異能者が依頼で海底レリクスの調査を行っていた際、あるカードを手にした時物語は始まった。（転生者の募集を始めました。こいつはム力つく、と言うような奴を頼みます
11月9日現在）

傭兵と少女の邂逅

それは遙か遠いところのお話

母なる太陽と三つの惑星を持つグラール太陽系

そこに住む『ヒューマン』と彼らから生まれた『キャスト』『ニューマン』『ビースト』は、外宇宙から飛来した『SEED』による襲来を受け、滅亡の危機を迎えた。

しかし、四つの種族は心一つにして戦い、激しい攻防の末、これを封印した。

それから三年後。

近年グラールで流行しているカードゲーム『デュエルモンスターズ』や今まで自粛されていたスポーツや芸能関係の番組の再開等の影響もあり、グラールに活気が戻ってきつつあった。

しかしその影ではSEEDとの攻防の傷跡が未だに深く刻まれ、資源枯渇が深刻な問題になっていた。

外宇宙への移動を可能とする『亜空間航行理論』が提唱され、再興の道を外宇宙への大規模な移民計画に求めた。

政府・軍・三惑星中の企業は結束し、『亜空間航行』への実現化へ向けて動き出していた。

グラールの新しい未来を願って……

「……分かりました。ではしばらくお待ちください」

パルムに存在する高層ビルに訪れた私は受付嬢にそう言われてロビーのソファーに座ると、手の甲に装着させていたナノトランサーを起動させて旧文明について書かれた書物を手にしてページをなぞるようにして読み始めた。

「……」

旧文明の遺跡『レリクス』にそこに存在する機動兵器『スタリテ
イア』、そしてSEED事変最終決戦の地となったSEEDに汚染
されたレリクス『リュクロス』……リュクロスは完全な『合の時』
に消滅したものの、それでもレリクスは未だに数多く存在している。

「……やはり興味深いな」

今の子供たちがイーサン・ウェーバーの英雄譚に憧れるように、
私は現在のグラールで再現できない旧文明の技術の数々に心惹かれ
ている。

グラールに住むヒトの素となったヒューマンが他の三種族を作り
上げたと言うのに、レリクスが持つ封印装置などの技術は今の技術
を持つてしても再現できていないのだ。

近年流行しているカードゲームも、流行した切欠は旧文明が持つ
技術の再現に成功したからと言う理由であり、『それ』が無かった
時代は単なる知る人ぞ知る物にしか過ぎなかったのだ。

閑話休題。

「近年旧文明の技術も少しずつ解明されて来ている……出来るな
ら全て解明されるまで生きていたいかな……それに最近新たに」
「お待たせしました。社長がお会いになられるようです」

感嘆の声を上げる中で先程の受付嬢が声を上げると、私は読んで
いた本を閉じて腰を上げた。

「ありがとうございます」

そう言って私は足を進め、転送装置に乗ると係の者が装置を操作
すると私の周りの景色が消滅すると、次の瞬間には別の景色に変わ
っていた。その先には赤いラインが特徴的な扉があり、私は迷わず

声を上げた。

「私です。入ります」

その声に反応したのか扉のラインが緑色に変わって音を立てて開かれる。その最奥に高価なスーツを着た黒髪の男がおり、彼は窓からパルムの町並みを見下ろしていた。

「来たか」

彼の言葉を合図に私は礼をして頷く。その一方で彼は私に向かって声を上げた。

「海底レリクスが新たに発見されたのは知ってるな？」

その言葉を聞き私は頷く。その一方で彼は目つきを鋭くさせて私に向かい声を上げた。

「……一番新しいウオザーブルグ動乱とウオザーブルグ・レリクスの件は覚えているな？」

その件を聞き、私も思考を海底レリクスからウオザーブルグ・レリクスに変える。あそこではSEED事変を生き抜いた戦友が2人行方不明となってしまったからだ。

「ウオザーブルグ・レリクスで発見された『星屑の竜』と『無限獄の民』……それと似た様な“モノ”が存在する可能性はあると思うか？」

彼の問いに対して私は考える。確かに“無い”とは言い切れない

が、“在る”のならば既にS E E D事変で見つかっているはずだ。
だがしかし、万が一同じものが“在る”のならば

「……無いとは言い切れませんが、在るとも限りません。ですが
在った場合、即座に行動に移さなければなりません」

私が言う曖昧な言葉に対して彼は溜息をついたが、予想していた
のか落胆も大声を張り上げもしなかった。

「そう、だろうな……」

彼自身私と同じ事を思っていたのだろう。探せば在るのかもしれないが、態々彼自身が熱を上げる必要は無いのだ。

それに彼自身、グラールを代表する三大メーカーに今や亜空間研究で有名なインヘルト社には劣るがこの『M A W社』の代表であり、
今や自分達の所属する一族の長でもある。

私や彼は直接関わっていないが、一番新しいウォザールブルグ動乱は『舞台となった場所に偶然居合わせていただけ』の今までのものと違い、完全に『自分達の争いが元凶』なのだ。結果2人の戦友がそこに封印されていた“モノ”を使い殺しあってお互い行方不明になっってしまった。

その結果として当時の長は責任を取って隠居して一族の長は彼になり、物のついでに一族が経営していたM A W社の株価は一時期悲惨なものになってしまった。

まあ、私たちにとって会社の経営がまズくなつたと言うのが一番重要だった。私たちのスポンサーでもあった組織もスキャンダルやら組織の代表の交代（代表が2人のうち一方の師匠だった）でゴタゴタしていたのだ。

今でさえまズい状況だと言うのにもしココで新たに問題を起こしたらどうなるか？ そうなれば今度こそ一族崩壊、彼は名実共に先

代以上の無能の烙印を押される事だろう。

閑話休題。

「……まあ、今回の調査には私が向かいます。私個人レリクスに興味がありますし、調査ついでに在れば回収します」

その言葉に嘘は無い。今回の件にしたって“アレ”の事が無かったとしても私自身が立候補して向かうつもりだったのだ。

「……すまないな」

「気にしないでください兄上。私は荷物を纏め上げ、現地へ向かいます」

そう言っただけで私は彼の部屋を出てこの場を去った。扉を閉じた時、あの2人の顔が過ぎたが首を大きく横にふるってこの場を後にした。

そんな会話が あつたのが つい 2 ～ 3 日前。

私は今、新たに発見された海底レリクスに足を踏み入れていた。集められた傭兵の多くが単独行動を好むのか纏まろうともせず、広間にいる同業者を値踏みしているように見えた。

『これだけの人数と質のいい傭兵が集まっているって事は大手のスポンサーがついているようだな』

自分の隣にいたフルフェイスメットを被った男が周囲を見渡しなから声を上げる。だがその声は機械質で、合成音声に近いものを持つ。恐らく彼は『キャスト』と呼ばれる種族なのだろう。

私自身が話題を欲していたのか、見ず知らずのキャストに向かって声を上げた。

「大手のスポンサーがついているって事は儲けられそうだ、と言うところか？」

『ハハハ。どうやら台詞を取られてしまったようだな』

目の前のキャストはそんな声を上げると周囲を見渡しと言った。

『周囲の傭兵の輪に加わろうとしない事からフリーなんだろう？
大したものだな』

「昔チームを組んだ事があったがリーダーが死んだ上、残った仲間たちが行方不明になったりして自然消滅だ」

私は声を上げると、目の前のキャストは申し訳なさそうに声を上げた。

『………すまない。軽率だった』

流石に今回は嫌味に聞こえてしまったのだろうか、若干気まずい雰囲気の流れてしまう。だが、そんな気休めの言葉など私には煩わしいだけだ。

「気にしないでくれ、よくあった話だ」

SEED事変ではガーディアンズだろうが傭兵だろうが。メンバーが死んだりチームが解散したりするなどは吐いて捨てるほど良くあった話だ。

私たちの場合もウォザールブルグ事変は終わった後だったが、リーダーが死んだのはガーディアンズコロニーが落下した時の事だったから嘘ではない。

「それに私たちが悔やんだところで死んだ者が蘇えるわけでも在るまい……」

『君は仲間の死を簡単に受け止めているのか……？』

「そうしなければ、やってられなかったただけだ」

私はそう言うのと他のヒトを見渡す。キャストの男も気が滅入ったのか話題を変えてきた。

『まあ、海底レリクスの調査もあって腕利きを集めているのかもな』

「もしくは人海戦術を選んだか、だな」

私はそう言うのと手にしていた本を開いて呟いた。

「ま、私は興味があつて海底レリクスの調査に来たんだ。スポンサーの考えなんかどうでもいいさ」

『ほう、傭兵を辞めて学者になったのか？　だったらココは宝の山だぞ』

「別に辞めた訳でも学者になつた訳でもないが……あと『宝の山』とはどつという意味だ？」

彼の台詞に食指が働いたのか私は彼に向かって声を上げた。

『この海底レリクスはつい最近発見されたものだ。調査はまだ、殆どされていない……この意味は分かるか？』

「システムはまだ動いているからソフト面の解析が出来るし、お宝もまだ残っているから旧文明の技術の粋を集めたモノも手に入る……といったところかな？」

『ああ。あとこれは極秘情報なんだが……』

キャストの男は私に向かって耳打ちする。

『どうやらこの海底レリクスには何か異常なものが存在するらしい。何でも『デュエルモンスターのモンスターが突然現れた』と言う話が数件出ているらしいんだ』

その言葉を聞き、私の表情が強張ったのが自分でも分かった。自分がココに来た『本命』らしきものの情報が出てしまった以上、ココに留まる必要もない。

「興味深い情報をありがとう。では私はそろそろ奥に向かうよ」

『そうか。気をつけろよ、この辺りはまだ安全なようだが奥は正に『未開の地』って訳だからな』

「気をつけていくさ。お互い運があったら、また会えるかもしれないな」

さて、一応渡された地図を見ながら進むか。

そう思って奥へ進み始めた矢先

「帰ろう！！ 帰ろうって！！」

めんどくさそうにしていた短髪の男ビーストに向かって声を上げたヒューマンらしき金髪の少女　恐らくハーフか養子か何かだろう　の争いが眼に映った。

『……何だ、あの子供は？　腕利きの傭兵や学者のようにはとても見えないが……』

先程まで一緒だったキャストの男が怪訝そうな声を上げた。だが私にしてみたら興味が無い事だったので気にせず奥へと進む。

「……？」

だが何歩か進もうとした矢先

「……！！」

突然心臓が強く鼓動し、私の足を止めた。

（バカな……在り得ない……！！）

真っ先に思い浮かんだのは自分達の一族に伝わる、行方不明になった片割れが言うには『呪い』と呼べる代物だった。だがそれは一族の極僅かな“女性”にしか発現しないはずのものだ。

私は男であるから在り得ない。もちろん同一性障害ではない。押さえつけた心臓が熱い、まるで強い熱が心臓を焼き尽くさんばかりだ。

その熱さに耐え切れずに膝を折って蹲った瞬間、突然視界が揺れた。だが今は心臓の熱を鎮めるのが先決だがどうすればいいのか検討がつかない。

「う……ぐ……」

視界の揺れが治まるとようやく心臓を燃やさんとしていた熱は矛を収めた。触れてみても先程の熱さが嘘のように静まっていたのだ。

「何だっ たんだ……今のは……」

周囲を見渡すと、そこは先程まで人がいたのが嘘だったかのように誰も存在しなかった。先程の心臓の熱さに負けそうになっていたので気付かなかったが相当な揺れだったのだろう。

（……体の調子は異常が無い……私は男だから一族の呪いと言う話ではない……）

私は拳を握っては離したりを繰り返し、身体機能に異常が無い事を確認する。かすかにだが耳に奥の方から誰かが何かを叩く様な音が響き渡る。

（私がやるべき事は海底レリクスの調査……そして本命は海底レリクスに在る“モノ”の搜索……）

眼を瞑って自分のやるべき事を再確認する。その時に耳に誰かが叫ぶ声が聞こえた。

（最大の懸念は先程の一件だ……これが万が一原生生物やスタリティアとの戦闘中に出てしまったら不味いな……単独行動は控えるべきか……）

先程の件を考え、ここは救助を待つしかないかと考えた矢先

「……ちよつと」

（だが救助が来るかどうかも怪しくなってきた状況だ、どうしたものか……）

「ちよつと!! 無視しないであたしに声かけてよ!!」

甲高い怒り声が私の耳を貫き思考を吹き飛ばす。声のした方を振り向くと、そこには羽のついたヘッドフォンが特徴的な金髪の十代前半近くの少女がいた。

「……それは私に言ってるのか？」

「アンタ以外の誰に声をかけられるって言うのよ!! か弱い女の子が泣いてるんだよ? そこは優しく声をかけるものでしょ!？」

だが今の彼女を見ても泣いていた様には見えなかった。むしろこっちに怒りを向けてきたようにも見えたのだが……

「その割には元気そうだな」

「う……」

その言葉に対して彼女は気まずそうに顔をそらした。気のせいか冷や汗も流れているように見える。

「だ、だって『困った時の女の子の武器は涙だよ』ってチエルシーが言ってたから……」

「やはり嘘泣きだったか」

「さっきまではホントに泣いてたんですー……ってこんな話をしてる場合じゃないよね」

顔を若干動かすと彼女の奥のほうに在る扉の色は赤。つまり閉じられた状態だ。更に言えばその扉は私がココに来る際に入ってきた扉でもある。

「ああ、どうやら私たちは閉じ込められたようだな」

「うん。同じ境遇の人がいてもどうにかなるって訳じゃないし……ところで、何が起きたか分かる？」

彼女の問いに対して私は首を横に振るう。自分自身心臓が熱くなってそれどころではなかったし、視界が揺れた事と何か関係が在るのか？

「そうよね。あたしもいきなりで、それどころじゃなかったし……気がついたら皆いなくなってるし……どうしたらいいんだろ？」

彼女の問いに対して私は淡々と答えた。

「このまま救助が来るまでおとなしくするか、奥に進んで脱出するか、の二者択一だな」

「やっぱりそれしかないよね……大人しくするのって苦手なんだけどな……」

彼女が納得したかのような表情を見せるが私は奥に進む。その姿を見たのか慌てたかのような声を上げた。

「……って、まさか奥に進む気!？」

「そうだ……まあ、慎重に進むしかない。待っていても救助が来ないかもしれないしな」

先程起こった心臓の熱の件もあって奥に進むにしても慎重に事を進めなければならない。本当ならば彼女の力を借りたいところだが、その様子では借りられそうに無い。

「無理無理!! やだやだ!! 危ないって!! ココは未開のレリクスなんだよ? すっごい危ないんだよ!？」

「……嫌なら来なくてもいいぞ。ココは安全のようだからな」

私がそう言うのと奥へと進む。しばらくすると彼女が声を張り上げながらこっちへ向かって走ってくる音が響いた。

「行くから!! あたしも一緒に行く!!」

その言葉を聞いて私は小さく笑みを浮かべた。これで心臓が熱を持ってしまった時の保険は出来た。

「そうか……すまないが名前は何と言った？」

一応同行する事になるので、名前だけは聞いておこうかと思って聞いた。

「ふえ？ あたし？ あたしはエミリア。エミリア＝パーシヴァル」

エミリアはきょとした表情で自分の名前を答えたが、即座に表情を変えて聞いた。

「それでアンタはなんて名前なの？ あたしに名乗らせてアンタは名乗らないんじゃないわよ」

彼女の問いは尤もだ。私は心臓の熱を気にしながら声を上げた。

「そうだな……私の名前はギュスターヴ。ギュスターヴ＝ウィンストンだ」

私が自分の名前を名乗ると、エミリアが再び声を上げる。

「それじゃギュスターヴ……その……これからしばらく一緒だから……よ、よろしくね」

彼女がそう声を上げると私も声を上げた。

「了解した」

そう言ってしばらく先へ進んだ矢先、先程の広場より小さい部屋に行き着く。するとそこには二足歩行の鮫の様な原生生物が腕を振

り上げながら歩いていた。

「ああー、やっぱり原生生物がわんさかいる……見逃したりは

」

「してくれるんだったら傭兵など必要ない」

「だよねえ……」

エミリアの言葉を私は一刀両断する一方で、ナノトランサーを起動してツインハンドガンと自作のシャドウーグを取り出す。それは悪魔をデフォルメ化させ、右手に音叉を持たせたマスコットの様なものだった。

「あれ？ ドウーグとハンドガンを使い分けるの？ 近距離主体の人かなって思ったんだけど……」

「……そうだ。私の都合ですまないが今回は遠距離主体で行く」

あの発作が元凶で今回は遠距離主体の攻撃方法を取る事にした。だが私の様子を見てエミリアの様子がおかしくなる。確かにツインハンドガンとシャドウーグを同時に使うのは珍しいとは思うが、別に法律で禁じられているわけではない。

「あの……その……」

「何だ？」

「あのね……えっと、えっとね……直前で言うのもんだけど……」

……」

しどろもどろに言い出すエミリアだったが、意を決したのか声を上げた。

「あたし、武器は持っても実は戦闘経験なんて殆ど無いの」

その言葉に対して私は一瞬だけ眼を見張った。自信なさ気だった彼女は先程の言葉の影響か、活力に満ち溢れていた。

「……だから、頑張つて！！　あたしは応援してあげるから！！」

その言葉に対して私は大きく溜息を吐いた。

その時私は気付いていなかった。その溜息がSEEED事変の時、仲間たちの喧騒や見当はずれな発言に呆れていた時の物と同じだった事を。

傭兵と少女の邂逅（後書き）

さて皆さん、最低なチート系転生者が嫌いなことが判明してしまつた久々のデボエンペラーです。

リア友や皆様からの意見を元に執筆しなめました。まぶ錬などは気が向いたらリメイクしようと考えていますゆえご容赦を。

ところで皆さん、質問があります。

再修業していた際、私は瞬様のなのは小説を見て転生者のオリ主に
ついて深く考えさせられました。

そしてP s p o 2は実質オリ主様の物語でもあります。更に『オリ
主』の大半は『転生者』を指す事が多いです。

その中には「腐った運命を変えてやる!!」「ハーレム作るぜフハ
ハハハー!!」「なんでチートオリ主の僕様の方が優れてるのに、
何のとりえも無い原作主人公が勝ち組なんだ!! 許せないお!!」
「 はなんて傲慢な悪なんだ!! 」とほざく最低系転生者なんざ
吐いて捨てるほどあります。

本題に入りますが、そう言った「最低系オリ主」を敵に出していい
のかと言う考えになつてしまい、出した場合もうラスボス変更の可
能性（特にエピソード1）まで出てきてしまいました……それにP
s p o 2の原作なぞるだけって言うのもなんだし……

と言うわけで転生者をどうするかと言うアンケートをとります。

1・転生者お断り（大まかなストーリーやラスボスは原作どおりに
行きます）

2・転生者上等！（ストーリーやラスボスが変更される可能性あり）

どちらかに入れてください。

……まあ、遊戯王入れた時点で原作崩壊上等ですけど……あれマジで劇薬だわ

異能者（前書き）

ここでもうやく遊戯王と本格的にクロスします。
何かいろいろとんでもない事になってますが、遊戯王じゃ特に珍しくないよね!!

異能者

エミリアのカミングアウトから数十分後……

「行け！！ リゾネーター！！」

悪魔を模したシャドウーグが地面を射抜いて原生生物を転ばせ、私とその隙について左手の銃でその頭部を射抜く。続けて右手の銃で突進してきた浮遊型のスタリティアを撃ち落した。

「エミリア、1体そっちに行つたぞ！！」

私の声を合図にエミリアが手にした長柄の棒から炎を灯す。流石に応援するだけだと言うのは私も反感を覚えたので何が出来るかと問いただしたところ、炎と雷に回復系のテクニクが使えるし接近戦や射撃戦も基礎だけは出来るとの返事が返ってきたので、私が撃ち漏らしたのは彼女が担当すると言う事で決着がついた。

「ほいつと！！」

彼女が放った炎……炎系テクニクの初歩・フォイエがスタリティアを焦がしつくし、地面に落下したと同時に砕け散る。

「さて、次は……」

扉を開き細い通路が伸びているのを見ると、ナノトランサーを調整してバイザーを取り出すとそれを装備してから眼前を見た。

「やはりか……」

直後に右手のハンドガンで通路に向けて何度か発砲する。エミリアが驚いた表情を見せるが次の瞬間には私の行動を理解した。

「え……爆発した？　なんで畏があるって分かったの？」

「このバイザーはガーディアンズなどで支給されているゴーグルの改造品で、コイツを使って爆弾を見つけたと言う訳だ。ちなみにサーチした爆弾の数も数えてくれるぞ」

そう言いながらも撃ち続ける私だったが、ゴーグルのカウントが0になったのを合図に撃つのを止めた。

「ゴーグルって……重い、嵩張る、邪魔の三拍子が揃った不良在庫じゃなかったっけ？」

「昔の話だ。私のバイザーはMAW社の商品だし、今ではGRM社から性能がいいゴーグルがガーディアンズや同盟軍に支給されているって話だからな」

今もガーディアンズにいる仲間の一人が手紙で愚痴っていたのを思い出して言う。私の言葉に対してエミリアが感嘆の声を上げる。

「行くぞ……とは言えまだまだ続くか……いつになったら外に出られる事やら……」

徐々に奥に進んでいく私たち。再び広い空間に出て、周囲に危険が無い事を判断した時エミリアのほうからなにやら音が響いた。

「何があつた？」

私がそう言つて振り向いた時、彼女は腹部に手を当てて、ただ一

言言っただけだった。

「お腹空いた……」

彼女の赤くした表情と腹部を押さえた様子を見て私は溜息をつく。仕方ない、リゾネーターを警戒モードにセットしなおして私も腰を下ろした。

「さて、と……」

私は黄色い箱を取り出すとその中からカロリーメイトを取り出し、一本エミリアに渡した。

「食うか？ あとサバイバル用の缶詰もあるが……」

「……いただきます……」

彼女がそう言うつてすごい勢いでカロリーメイトと缶詰にあった物を食べると声を上げた。

「技術や知識、事前の用意まで隙が無い……さすが傭兵って感じ……」

彼女がそう言うつとようやく安心の声を上げた。満腹になったのか表情も明るい。

「……なんか、ちょっとホッとしたよ。あんたがいれば、安心ぽいっしさ」

「そうか」

私は黙々と缶詰や箱を仕舞う。レリクスの調査団が後でこれを見した時、何を言われるか分かったものではないからだ。

「あたしは軍事会社に登録されてるだけで、戦う気とかこれっぽちも無かったのに……だって言うのに、あのおっさん。あたしが働かないからって、無理やり連れ出してこんな危険なレリクスにほっぽって……」

徐々にエミリアの話は「おっさん」なる人物に対する愚痴にシフトされていった。と言うより先程とんでもない発言が出た気がするのだが……

「あー、なんかだんだんハラが立ってきた！！　こんなか弱い女の子を、一人にするなんてひどいと思わない！？」

「エミリア、お前は少し働いた方がいい」

先程のとんでもない発言に対して私が水を飲みながら意見を言うと、エミリアは更にふて腐れたような声を上げる。

「ぶー！！　なによグスタヴ！！　アンタもおっさんの味方！？」

「少なくとも働かない奴に拒否権は無いだけだ。何も過労死するまで働けというわけでもない」

「いいいいいよ。けっきょく皆そうなんだから。あたしの言う事なんて誰も本気で聞いてなんかくれないんだ……まあ、とにかくあんたがいれば無事に帰れるような気もするし、おっさんには後で文句言いまくってやる！！」

エミリアの言葉に私は相槌をうつただけで済ませる。よくよく考えれば仲間の一人の愚痴も良くこうやって聞き手に回っていたなと思いついた。

「『SEEDはもう存在しないからレリクスは安全だ』とか言い張ってあたしの言う事信じてくれないしさ……」

「それが一般的な解釈だからな。そもそも原因が完全消滅したのではレリクスも起動しなくもなる」

私は一般的な解釈を述べてエミリアに反論する。だが私の言葉が切欠になったのか彼女の表情は真剣なものになる。

「そりゃ、今まで発見されたレリクスはSEED襲来があったときばかりに機能を覚醒させていたよ。でも、全部が全部そうだったかって言うтそう言うわけじゃなかったんだよね」

突然真剣な表情になった彼女の言葉に私は息を呑んだ。今までの自堕落な彼女とは打って変わったかのような雰囲気には私は圧されていた。

「一説によるとSEEDの散布する素粒子に反応して起動しているみたい。だけど同時に磁場の乱れも観測できるから、どうもそれだけじゃないんだよね」

「だが、何故お前はレリクスは危険だと言えるんだ？ 磁場の乱れとか素粒子云々は関係ないのでは？」

「うん、でもSEEDは3年前に一掃されているはずなのに、こうしてレリクスは起動しているわけでしょ？ それにSEEDが居たにも拘らず起動しなかったレリクスも存在しているのよね」

その言葉に私は息を呑んだ。レリクスやスタリティアの存在意義はSEEDの消滅と共に全て意味が無いものになっていくはずだ。それに私は起動しなかったレリクスについて1つ思い当る節が在る。そう、ウォザーブルグ・レリクスだ。

それにこの海底レリクスではSEEDが存在しないにも拘らずス

タリティアは今もお起動している。それに対してウォザーブルグ・レリクスはSEED事変の際には微塵も反応しなかったが、今回のウォザーブルグ動乱に関しては起動していた。

「レリクスがプログラム管理である以上、トリガーになるものもそれに準じたものになるのよ。それにウォザーブルグ・レリクスはSEED以外のものが原因となって起動しているわけだし……」

しかしそこでエミリアの説明が止まって表情も元のエミリアに戻る。その表情はまるで赤点のテストを隠そうとする子供のように見えた。

「……あ、え……ええ……と……」

「……やけに詳しいな……」

彼女の話は非常に興味深かった。私もレリクスに関しては思い当たる節があったが、推論だけの机上の空論どまりだったのだ。しかし彼女の話は何らかの条件を組み込んだ非常に興味深い話になっている。

「あ、いや……こ、このぐらい常識でしょ？」

「私もレリクスには興味を持っていたからその話を仲間たちにした事はあったが分かっていなかったぞ」

昔こういった話を生き残った仲間たち（ウォザーブルグ動乱の主役とガーディアンズに居るキャスト、後は逃亡・行方不明・死亡が1人ずつ）にしてみたが、あの2人は曖昧な表情を浮かべて残った1体は完全にわかっていなかった。

「だったらその仲間たちに問題があったんじゃないの!? 常識

！！ 常識だつて！！ 傭兵なら誰だつて知つてて当然なの！！」

あまりに真剣な表情で彼女は私に向かって声を荒げた。

「いい、今の説明は流して！！ アンタは結構知ってるみたいだけど、どうせあたしが言つたところで誰も信じてくれないんだし！！」

「少なくとも私は興味を持ったぞ。後で詳しく話してくれ」

純粹に彼女の解釈に私は興味を持った。何故今もレリクスが起動しているのか、ウォザールブルグ・レリクスは何故SEED事変の時に起動せずに問題が起きた時ばかりに起動していたのか、その謎が解けるかもしれないのだ。

「詳しくつて……当ても無い推論なんだけど……もしかして、信じてくれるの？」

「私のほうも当ても無い推論だったからな。推論も2つ同じ結論が出たら確信に変わるかも知れないからな」

「確かにそうだけど……」

次の瞬間には彼女は立ち上がって手にロッドを持って先へ進み始めた。

「何処へ行く、エミリア！！」

「出口探すんでしょ！！ 休憩もいいから先に進もう！！」

彼女が先へと進み、私も立ち上がる。先程までと立場が逆転してると苦笑しつつ、彼女の後を追った。

奥に進むと先程の鮫の様な原生生物が従来の緑色の奴と紫色の奴の2種類が姿を現し、その奥には四足歩行型のスタリティアが鎮座していたりしたので、私たちはそれを排除しながら奥へ進む。

「うえええ……夢に見そう……なんなのよ、あの気持ち悪いスタリティアは……」

「そうか？ 私としてはヒトがS E E Dフォームになる姿を見せられる方がひどいと思うが……」

アレはトラウマものだった。ヒトの体の変質していつたり爆ぜたりしてS E E Dフォームに変貌していく光景を間近で見た事も在るのだ。

「……流石にそれと比べちゃまずいと思うけどな……」

彼女の言葉も尤もだと思いつつも私たちは足を進める。センサーを飛び越えたり分岐路を右に行ったり無数の原生生物を撃ち貫いたりしているうちに、一際大きな扉の前に出た。

「ずいぶん奥まったところまで来たけど、まだ出口見つからないの？」

「それは私が知りたいぐらいだ……」

いつ発作が起こるか分からないせいか、今すぐ外に出たい気持ち
が強い。扉には翼や心臓を握った手に足および尾を持った赤い蛇…
いや、頭部が龍に似た形をしていたから龍なのだろう、その形を
した刻印が刻まれていた。

「ふむ……」

周りに彫られた文字や絵も興味深い。何かを拝むヒトの絵を見る
からにココは何かを祭る施設だったのだろうか、後で兄に依頼して
調査団を結成して調べてもらおうと思う。

「あ、扉も開くみたい。入ってみよ」

エミリアがそう言うと同時に刻印が鈍く輝き、扉が開く。先に入
って周囲を見渡したエミリアは何かに怯える様な声で私に向かって
言った。

「うわ……ここにあるのって全部、大型の自律機動兵器だよ」

彼女の言うとおり周りは何かを護るかのように彼女の言う大型の
兵器……キャストが居なかった頃の名残だろう二手二足の直立歩行
型のスタリティアで囲まれている。そして、その周りに囲まれて在
るものを見据えた時、私は心臓が高鳴るのを感じた。

「ん？ あそこにあるのを見てるの……？」

エミリアが私の視線に気付いたのか目線をそちらに向ける。それ
を見た彼女は怪訝そうな表情をした。

「うーん……他のと比べて黒くて紅い装飾が施されてるみたい。

それがどうかしたの？」

「あ、ああ……あれが気になってな……」

高鳴る鼓動を抑えながらエミリアが言う『紅い装飾が施された黒のスタリティア』を見据える。恐らく自分が求めているものは、あれをどうにかしない限り手に入らないだろう。

「ふーん……ま、この部屋で行き止まりみたいだし別の道に行きましょう。確かさっきの通路を右に曲がったから左の方に行ってみよう？」

私はエミリアの言葉に我に返る。もう既にマッピングは済ませてあるから、後は兄の下へ戻るだけだ。

（あわよくばここで回収と行きたかったが……）

どうせまた来る事になるのだから慌てる必要も無いだろう。何せこの所在を知っているのは私と彼女のみだ。

問題は彼女の言う『おっさん』と言う人物に言っただけで彼女らの組織と争奪戦になる可能性があるかもしれないと言う事だが、そうなら仕方が無い。正直にウォザーブルグ動乱の件を話すか金で解決するかどちらかだ。

“それ”の見た目は無害そうなので『“それ”は危険だ』などと言う言い訳は通用せず、強硬手段に出るのはこれ以上問題を起こしたくないので論外。それにこちら側の話を信用してくれなかったらおしまいだが、金で解決できるならそれに越した事はない。

彼女と行動しているのは緊急事態であるためなので、彼女の属している組織との接点も無いので今後の事についての相談も出来ない。今回は諦めるしかない。

「そう、だな……」

「ギユスターヴ……今のアンタ、ウルスラさんに禁酒令出されて目の前にお酒があるのに飲む事が出来ないおっさんの雰囲気似てただけ？」

その例えはどうかと思うが、ある意味的を得ているので反論できない。

「アンタが何を欲しがってるのか知らないけどさ……ただでさえこつちを見てて怖いのに、もし動き出したらって思うと……ねえ、早く戻ろっよ」

彼女の言葉に頷きつつ、引き返そうとする。欲に目が眩んでスタリティアを起動させてしまったのでは話にならない。そう考えた矢先のことだった。

「……」

一瞬だけ、最初の広間の時以上の発作が自分の身を襲い

『…………我が眠リヲ…………妨ゲタノハ主ヲカ…………』
その刹那、黒と紅のスタリティアが起動した。

「ちょ！？　スタリティアが喋った！？　今までこんな事って無かったのに…………！！　大体、言った側から動き出さないでよ！！」

エミリアが驚愕の表情を浮かべたが、私は2つの事を考えていた。スタリティアが喋った原因は“あれ”が原因だと言う事だと言う事と、“あれ”を入手するためには目の前のスタリティアを倒さなければならぬということだ。

（恐らく戦うしかないか…………だがこれで“あれ”を堂々と手に入れることが出来る！！）

動いた事による驚愕よりも、“あれ”を手に入れることが出来るという歓喜に支配されながらも私はエミリアに向かって叫んだ。

「エミリア！！ 脱出できるか！？」

「……だめ！！ ロックが掛かってて出られない！！」

彼女がそう叫ぶと私もG R M製のAグレードの中でも最高峰のツインハンドガンを取り出し、今にも襲い掛かりそうなスタリティアを目前にして彼女に向かって言う。

「戦うしかないな。エミリア、私の援護を頼む……無理に戦わなくてもいい」

歓喜に包まれながらも、私はエミリアを庇う事を忘れない。もし“あれ”にかまけて彼女を死なせてしまったら、報告書の解釈次第で彼女の属している組織と全面抗争だ。兄も躊躇い無く私を切り捨てるだろう。

「や、やっぱそうだよね……」

「部屋から出られない、隠れる場所も無い、周りのスタリティアも動かないとは限らない……生きて出るには、目の前の敵を何とかしなければならぬぞ」

私の目的のためにもな、と心で呟いてからシャドウグを取り出す。後はG R M製のシールドが1つにとM A W製のセイバー2本が私が持ってきた全装備だ。

『汝ら……炎魔ノ竜ヲ担ウニ相応シイカ……確カメサセテモラオウ』

「……向こうもやる気満々だし……うー、うっうーっ！！」

スタリティアの台詞に対してエミリアも覚悟を決めたのかロッドを取り出し振るい、私の目線の先……スタリティアに向けた。

「……わかったよ、あたしも覚悟決める！！ あんたの実力……
信じてるからね！！」

「……任された。それでは……」

その言葉を合図に私は銃口を頭部に向けて放ち、声を上げて叫んだ。

「戦闘、開始！！」

それを合図にエミリアも私から遠ざかりフォイエや雷系テクニク・ゾンテを放つ。彼女のマドウーグもそれに続いた。

『ホウ……二手二分カレタカ……』

私が銃を相手の間接や頭部に向けて放ち続ける。あの手のタイプは頭部か間接を破壊する事で無力化するタイプだ。まずはそこを狙う。

『小癪ナ！！』

だが相手も狙いが分かっているのか手にした武器を振るって銃弾を防ぐ。しかしこれで

「ほいとー！！」

エミリアの叫びに呼応してロッドから炎、彼女の側に浮いていたマドウーグから雷がスタリティアの背後に直撃する。

『ナッ！！』

「はあっ!!」

動きが止まった隙に再び銃撃、シャドウグの援護も忘れない。敵に遠距離攻撃は無いが武器を振り上げ、こっちに向かって跳んできた。

「くっ!？」

咄嗟に跳んで避けたが、シャドウグが攻撃に巻き込まれて粉々になってしまう。何とか立ち上がって斧状の武器を射抜く。斧は柄が二つに分かれ、刃がついてない方の柄が地面に転がった。

「やった!! これであの斧の攻撃は無くなった!! と言うわけです景気付けにもう一発!!」

エミリアが喜ぶと再びフォイエを放って頭部に直撃させる。すると頭部が直撃した影響でぐらつき、地面に転がった。

「……倒せたの？」

流石のエミリアも怪訝そうだが、私は息を呑んだ。スタリティアが徐々に罅割れていき、中から炎の渦が吹き溢れて来たのだ!!

『……フン、所詮1万年近クノ骨董品力……ホンノ少シノ攻撃デ首が落ちルトハナ……』

罅割れた身体からまず悪魔の様な翼が生え、腕の装甲が砕け散ると一部が紅く染まった黒竜の腕が現れる。脚も同様で腰部からは黒き尾が姿を現し、頭部があった場所からは悪魔の角を持った竜の首が生える。

己が解放された歓喜の咆哮を上げ、スタリティアの装甲を完全に吹き飛ばす。脚を一步前へと進めて転がった頭部を踏み碎き、炎を伴い姿を現したその姿は正に

「炎魔竜……レッド・デーモンズ・ドラゴン……」

禍々しさとする種の神々しさを兼ね備えた炎魔竜が姿を現す。私がかつて星屑の竜を報告書で見た事はあったが、それとは別の……否、私にとって星屑の竜以上の美しさを持ち合わせていた。嗚呼認めよう。私はその存在に心を奪われ魅了された。豊富な資産を全て投げ打ってまで手に入れたと思ったのは生まれて初めてだった。

「あんたの顔……滅茶苦茶すごいんですけど!？」

エミリアも私の顔を見て引いていた。それを聞き、私は現実に戻って気を引き締めた。とは言え、やはり興奮は隠せない。

「炎魔竜の力……貰い受けるぞ!!」

私はそう叫ぶと同時に銃を炎魔竜に向けて放つが、竜が腕を振るうとフォトンの弾丸を消し飛ばしてしまう。生半可な攻撃では攻撃は通らないという事か。

『次ハ我ノ攻撃ダ!!』

腕に炎を灯す炎魔竜だったが、すかさず鋭い爪と共に腕を私に向けて振り下ろす。

『アブソリユート・パワーフォース!!』

その叫びと共に私はツインハンドガンで爪が触れる直前に交差させて防ぐ。しかしシールドではないとは言え攻撃の余波が私を襲い吹き飛ばす。

「!!」

壁に叩きつけられ、握っていたものを見ると驚愕した。ツインハンドガンの砲身が曲がっていたり装甲が罅割れていたりしていたのだ。フォトン溜め込むフォトンリアクターも損傷しジャンクパーツにも使えなくなったそれを放り捨てた代わりにセイバーを2本取り出す。セイバーは青い2枚刃の刀身を持つMAW製の試作武器『イグザム』の二刀流……言うなれば『イグニス』だ。

「炎は効きそうにないし、今度は氷!!」

背後でエミリアが氷系テクニックの初歩・バータを発動させて竜を襲うが、その竜の炎に阻まれて瞬く間に蒸発してしまう。

「やはり生半可な攻撃では通用しないか……その上守備も通用しない……」

「笑いながら言うなー!!」

エミリアの叫びに耳を貸さずに私は己の考えに没頭する。彼女の様に氷属性で戦うというのも悪くないが、それも強くないと炎によって溶けてしまうというおまけつきだ。

「だが……」

それでも口元に笑みが浮かぶ。最初からこの程度で倒れるはずが無いと確信していたからだ、それを乗り越えずにして炎魔竜の力を得ようなど甘いを通り越して愚かとしか言いようが無いからだ。

相手は1体であり街に押し寄せてきたSEEDの大群の様な数の暴力はない。相手はディ・ラガンと同様の竜型原生生物のような形をしており落下してくるGコロニーの様な人間ではどうしようもない理不尽な存在でもない。

まだ勝機は十分にある。

「それが分かっただけで、十分だ」

イグニスを振るって炎魔竜に襲い掛かる。まずは左のセイバーで縦に竜の右腕を斬りつけ、続けて右で同じようにして斬る。

止めはセイバーを交差させて突進、右腕を斬りつける。小型の敵には滅多に当たらないが、これだけ巨大な敵ならば当たる場所は好きだけある。

『ホウ……少しハヤルヨウダナ』

だがこれでも不十分。炎魔竜の身体は硬く、十文字の傷をつけるだけに留まった。それでも今の自分の武器の中でも最強の武器なのだが炎魔竜に通用しない事が分かってしまった。

シャドウーグやツインハンドガンは壊され、シールドはツインハンドガンの例を見て役をなさない。手持ちの武器では倒す事は出来ないだろう。

ならば考えられる手は1つ。自分の持つ異能を解放させるのみだ。

「使うしかない、か……」

私はそう決意すると懷から“ある物”をハンドガンやセイバーの時以上に慣れた手つきで取り出す。“それ”を見た炎魔竜はニタリと笑い攻撃を一時中断した。

「え？ なに？ なんで攻撃を止めてるの……？」

エミリアは呆然としながらもテクニックを放ち続けたが、2、3発放った後に攻撃をやめて私の方へ向かった。

「何をしようって言うの……？」

「エミリア。私はこれから自分の異能を使わせてもらう」

エミリアが首をかしげる中、私は“あるもの”……カードの束から2枚取り出すと、まずは1枚目を振るう。

「いでよ、ビッグ・ピース・ゴーレム……！」

私の声を合図にカードが輝くと、地面から巨大な手足を持った岩石兵が姿を現した。そう、これこそが我が一族に伝わる“異能”。カードに纏われた意思や歴史を読み取り、それを具現化させる能力だ。それを用いる力を持った集団こそが我が一族である。

「え？ ええ！？ でゆ、デュエルモンスターのカードが実体化したあ！？」

エミリアも呆然とするが、私は続けてもう1枚のカードを振るう。

「続けてフレア・リゾネーターを召喚する！！」

そう言つて姿を現したのは先程破壊されたシャドウグのモチーフとなった悪魔の背に炎を宿したモンスターだ。そして私は一族が持つ異能の中でも最強の術を発動させる。

「レベル5のビッグ・ピース・ゴーレムにレベル3のフレア・リゾネーターをチューニング！！」

その声を合図にフレア・リゾネーターが3つの輪に、ビッグ・ピース・ゴーレムが5つの星となる。輪が私を飲み込み星が身体に入り込み、星と自分の意識を同調させた。シンクロ

「王者の決断、今赤く滾る炎を宿す真紅の刃となる！ 熱き波濤を超え、現れよ！」

同調を高めるため、私は祝詞のように声を紡ぐ。その刹那、炎が身体を飲み込み自分を新たな姿に作り変える。

「我が身に纏え炎の鬼神、クリムゾン・ブリーダー……！」

一瞬だけ炎が紅い鎧を纏い双振りの刃を持った騎士の姿が映し出され、私は鎧に纏われ剣は私の腕に握られる。

「な、なに！？ 何が起こったって言うのよ！？ デュエルモンスターズの実体化に、それを用いた融合！？ 何が何だかわからないわよ！？」

エミリアが驚愕の声を上げるが、私達の耳にはそれは届かない。互いの姿しか見えない、互いの声しか届かない。
クリムゾン・フレッド・デーモンズ・ドラゴン
紅騎士と炎魔竜。今この場に2つの赤の名を持つ存在が姿を現した。

「ホウ……同調力……ソレガ貴様ノカト言ウワケカ……懐力シイナ……ダガ容赦シナイゾ！！」

炎魔竜（彼）は笑うと口に炎を溜め込む。それは正に地獄^{ヘル}の業火^{フレア}を思わせる炎の弾丸だった。

「ああ、これで決着をつけようか。お前を倒し、その力を貰い受ける！！」

紅騎士（私）もつられて笑うと剣に炎を宿す。炎を宿した剣、何度か炎属性のツインセイバーを振るった事はあったが、これに勝るものは無かった。

「……」

エミリアは呆然としながらも既に私の後ろに居る。後は敵の攻撃を防ぎ、相手を切り伏せるのみだ。

『行クゾ……クリムゾン・ヘル・フレア!!』

炎魔竜の口から炎が濁流のように吹き荒れ、私と背後に居たエミリアを襲う。私は背後に居るエミリアが巻き添えを食らわないように剣を炎にかざし、それを受け止める。

「ぐぐぐ……」

だが徐々に炎が私の腕を侵食していく。鮮やかだった鎧が赤黒く染まっていく中で、私は剣に込める力を強くする。

「ここで終わるわけには行かない!!」

そう、私はかつて一族が誇ったチームの最後のメンバーとしてのプライドがある。プライドを無くした傭兵や政治家は、己の生業を淡々とこなす始末屋と政治屋に成り下がる。故に私は一回もプライドを捨てた事は無い。

だからこそ、ここで終わるわけにはいかない。私の名に……私の矜持に賭けて、全てを断ち切るわけには行かない!! ここで終わったら、私は彼らの名を汚す事になるからだ!!

故に炎の奔流ごときで屈するわけには行かない……そう思った刹那、心臓が強く脈打つ。だがその鼓動は今までのものと違って自分に力を貸すような鼓動だった。

「はあああつ!!」

その鼓動に乗って腕を振るう。剣に纏わりついた炎は縦に両断さ

れ、両側の壁に叩きつけられた。

『!!』

「これで止めだ!!」

私は手にした双剣で炎魔竜を縦に切り裂き、続けざまに剣を交差させて突進する。先程のアーツと同じ構え……だが今回は剣に宿した炎で相手を切り裂く!!

「燃え滾れ、レッドマーダー!!」

私の叫びを合図に交差させた剣を振るい、十文字の傷を胴体に斬りつける。それと同時に私の身体に宿っていた紅騎士の鎧と剣も消滅した。

『……………見事ダ……………』

炎魔竜はただそれだけを言うと十文字の傷跡からあるものが姿を現す。その直後、炎が炎魔竜を飲み込み、それが消えたときには炎魔竜も姿を消していた。

「……………え？」

エミリアは呆然とする。恐らく彼女は信じられないものを見る様な眼で目の前のものを見ているのだらう。

無理も無い、彼女を怯えさせた存在の正体らしき物は……………1枚のカードなのだから。

『汝、我ガ力ヲ振ルウニ値スル。我ガ力、存分ニ振ルエ』

消えたはずの炎魔竜の声が響き、私は姿を現したカードに近づくと王から剣を受け取る騎士のようにそれを手に取った。

「分かった。炎魔竜……………レッド・デーモンズ・ドラゴンの力、しかと受け取った」

異能者（後書き）

さて、ようやくレモンを手に入れたギュースターヴですが本来のプロットではここでギュー死亡 ミカ登場となったわけですが、まだ転生者についてまだ悩んでいます。

そもそも現時点でアンケートに協力してくれたのが1人と言う有様なのです……と言うわけで延長します。

後なんでレリクスにカードが在るんだよ、と思った方に言います。

遺跡にカードなんて遊戯王じゃ珍しくないんです。

謎の襲撃者（前書き）

投票者一名でしたが、彼の意見の元小説を書いていたのもう出来てしまいました。

よってこれからはこの方針で行く事にします。

謎の襲撃者

先程の部屋を出て、分岐路の所に戻った私達。そこを左に曲がったところで私達が見たものは……

「……」

「……階段？」

どう見ても下に下りる階段だった。それを見たエミリアが盛大に溜息を吐いた。

「……これ以上奥へ行ったら遭難するわよ。出口も見当たらないみたいだし、そろそろ戻らない？」

エミリアの言葉に私は頷く。望みの品は既に手に入っている以上、ここに居る理由はもう存在しないし、後は調査団の護衛などで再び来る事になるだろう。

「そうだな」

「それじゃ戻りましょ。一応マッピングはしてたんでしょ？」

私は携帯型マップを参考にして戻る事にする。幸い罫とかは既に解除ないし排除していたので行きと比べてスムーズに進行した。

「フーン、アンタの一族ってそう言う一族なのね……」

その道中、私たちは話しながら進んでいた。エミリアに見せた以上隠す必要は無いため、私は素直に自分の力について話した。

「デュエルモンスターズに描かれたモンスターや魔法を実体化させる事の出来る一族か……遊戯皇とかでよくある能力だけど、まさか実在してたなんてね……」

「ああ、確かサイコ決闘者だったな？」

遊戯皇とはグラールで大人気のデュエルモンスターズ販促アニメであり、様々なシリーズで放映されている。サイコ決闘者と言うのはその中でもカードを実体化させて自分の手足のように操る事出来る我々異能者に似た設定の事だ。

「そうそれ。後はカードの精霊云々ね。まあ、眉唾だと思ってたけどそれもあるかもしれないわね……」

「ああ、存在するが？ 少なくとも私の一族では何人か見る事が出来たからな」

私の言葉に驚くエミリア。続けて私はあることを話す。

「一応話しておくが、私の本来の目的はレリクスに存在しているカードの入手もしくは確認だ。あるかないかまでは分からないからな」

「あー、そうでしたか……今更驚く事じゃ無いですけどねー」

ウォザールブルグ動乱の件については追々話すとして、これだけは言っておきたかった。

「あと我々は異能者であることはなるべく隠していきたい。デュエルモンスターズがこのグラールを生きる人々の支えになっている以上、表に出て脅かすわけには行かないんだ。すまないが……」

「あんた達の事は内緒にして欲しいって事でしょ？ 分かっているわよ」

エミリアの顔には『義理』と言うより『付き合いきれない』と言う感情の方が強かったが、むしろ後者の反応の方がうれしい位だ。義理感情で巻き込んでしまったらどうしようもない。

「ま、アンタが普通の武器使ってる時点で、内緒にしたかったつてのもあるんでしょ？」

「すまないな……」

私が礼を言うとエミリアも笑いながら言う。

「ま、あんたが居なきゃあたしも無事じゃなかったんだしいわよ。これで貸し借りはなして事で」

にこやかに笑うエミリアに私も口元で笑みを浮かべる。そして腹ごしらえをしていた広間に差し掛かったとき、私は眉間に皺を寄せた。

「……！？」

眼前に殺気が吹き荒れているのだ。しかも明らかに私だけに向けられているのにエミリアの身体も硬直する程の物だ。

『……コノ感覚……マサカ奴ラカ！？ 気ヲツケロ！』

「奴らだと？ 一体どういうことだ……？」

炎魔竜の声が響き、私は奥の方に目を向けると同時に1人の男が姿を現す。耳の長さから言ってヒューマンだろう。SEEDフォームでもない以上、警戒する様子は無いと思うのだが……

「ようやく見つけたぜ……ロリシヨタキャストがいたし地震も起きたからテメエらを探していたんだが迷ってしまつてなあ……あのクソキャスト、態々残ろうとしたオレの邪魔しやがつてよお……しっかし『原作』と道も違つてるしどうなつてんだよ……？」

美の女神にわがまま言つたのではないかと思わせるほどの整つた顔立ちに紫色の髪、黒い鎧の様なものを纏つた上には赤いコートの様なものを羽織つた青年がそこに居た。だがその眼は今も私を見据え、射殺す様な雰囲気を持っている。

「お前は何者だ？ 何故私をそのような眼で睨む？ 私とお前は初対面のはずだが？」

「ああ初対面だぜ。でもよ、よりにもよつてテメエファンタシースターポータブル2系の主人公の座にちやつかり収まつてるんじゃないか。ポータブル1とかユニバースとかだったら百歩譲つて許してやったけど、よりにもよつてポータブル2だろ？ 温厚なオレでも力チンと来ましたよお、テメエがそこに居たんじゃオレの目的が果たせないじゃねえか」

『ファンタシースターポータブル2系』？ 『ポータブル1』？ 『ユニバース』？ 私が居たら彼の目的が果たせなくなる？ 先程言つていた『原作』と言う言葉といい、さっぱり訳が分からないな。

「で、あたし達になんかよう？ 出口教えてくれるの？」

「教えたいたのは山々だがなあ、俺が知つてる海底レリクスと道が違つてるんだからこつちが知れてえよ、ツーかここで鉢合わせだしミカからテイの花の匂いがしたからそれを追つてきたから良かったけどよ……」

また知らない単語が出てきた。『ミカ』はヒトの名前だと思われる名称だからいいとしても、『テティ』と言う花の名前は聞いた事が無い。私が考え事をしていると、エミリアが眼を鋭くさせながら声を上げた。

「ミカ？ 誰の事言ってるの？」

エミリアの疑問も尤もだが、目の前の男はエミリアの答えに対して子供でもわかる様な問題に答えられないモノを見る様な顔つきで呆然としている。何がおかしいのだろうか？

「はあ？ 何を言ってるんだ、自分の事なのに……ああ悪い悪い、今はまだ見えてなかったんだよな！！ 見えてないものを認めろって言いきたわオレ！！」

すると男は勝手に自己完結して答えをはぐらかす。すると彼は話をするのにも飽きたのか私に向かって声を上げた。

「ああ、エミリアは俺が責任を持って連れて帰る。だからテメエはココでのた打ち回ってる、安心しな殺しはしねえって」

私を物でも見るかのような眼で腕を上げると無数の武器が姿を現す。武器を見ただけでも分かる、あれは強大な武器だという事に！！

「さあて、このチート宝具『王の財宝』の力を見せてやるよ！！」

男が指を弾く音が響くと同時に武器が弾丸となって私に襲い掛かってきた。私は手にしたイグニスでそれを捌くが、しばらくするとイグニスの方にも限界が訪れたのか刃を形成しているフォトンが消えうせてしまう。

「イグニスのリアクターまで！？　よりによってこんなところで！？」

「ヒヤッハア！！　武器が釈迦になっちまったようだな！！　オレの宝具はまだまだ弾切れにや程遠いぜ！！」

男がそのようなことを言って私に向かって武器の弾丸を投げつけて私を壁の方へ吹き飛ばし、ついでに剣が弾丸となって私の両腕を縫い付ける。

「ぐっ！！」

「ギユスターヴ！？」

エミリアがパニックになるが男は私に近づき、左腕に刺さった剣で私の傷口を抉ってくる。

「！！」

「はいおしまいっと、テメエ殺したらあのスタリティアと同じ目に遭っちまうからこの辺で勘弁してやるよ。良かったな、オレが優しすぎる奴だよ？」

今もなお傷口を抉るお前が優しいだと？　これで優しかったら『優しい』と言う概念自体が疑われるのがオチだ。

「ま、これでオレがこの物語の主人公になるって訳だ。エミリアもナギサも女連中はオレが幸せにしてやるから、ここで一生過ごしてな。運がよければ誰か来るって、多分な」

もう興味を失ったのか、奴は私に後ろを向ける。私が武器を失ったからといって後ろを向くとはなんて愚かな行動を取ったのだろう。私は即座に右腕のナノトランサーからカードを1枚取り出す。そ

のカードを見た私は小さく声を紡ぐだけにとどめた。

「出る、ダーク・リゾネーター」

そう言つて姿を現したのは私が子供の頃から愛用しているカードであり、私在使用していたシャドウグのモチーフとなったモンスターだった。暇な時には周囲の目が無い時にこのカードを実体化させ、実体化や同調の練習にも付き合わせた程だ。

私が右腕を見てからリゾネーターに目を向けると、即座にリゾネーターは頷いて右腕に刺さった剣を引き抜こうと躍起になって汗を出しながら行動した。

剣が抜け落ちて右腕が自由になると、即座に右腕で左腕に刺さった剣を引き抜く。挟まれた痛みからか激痛が走るが音が響いたのか男はこちらを見て驚いていた。

「テメエ！！ どうやって剣を抜いたんだ！？」

「勝手に抜け落ちたんだろう？ 私のせいにするな！！」

リゾネーターは剣に押しつぶされていたが抜けた時点で消しているため、姿は見えていないだろう。私は抜いた剣を握り締め、男に襲い掛かった。

「おい！！ 勝手に人の宝具を使つてんじゃねえぞ卑怯者！！」

「だったら人を突き刺す道具にしなければいいだけだろ？ 私のせいにするな！！」

片手で持てる細剣の様な剣だったのが幸いしたが、もしこれが両手剣だったらずかつた。今私の左腕は傷口を挟られていてまともに動かしたり握ったりできる状態ではない。

「くそっ！！ なんだって言うんだよ！？ エミリアにはニコポもナデポも通用しねえし、なのはやネギませ口魔は転生できないっ

て言われて、しゃあねえからココにきたら既に主人公の座は埋まってるし！！　ココで負けたら転生した意味なんかねえじゃねえか！！」

喚きながら剣や槍の弾丸を放つ男。しかしエミリアが横からフォイエを男に放つと、それを避けれずバランスを崩す。

「なっ………テメ………なんでオレを攻撃したんだよ………！？」

「いきなりあたしを口説こうとしたアンタより、ギユスターヴの方が信用できただけよ！！　そもそもあんな状況でにこやかに笑ってくる奴なんか信用できるか！！」

エミリアが作ったチャンスが無駄にはしない。私はすかさず男に接近し、突き刺そうとした。

「甘いんだよ！！」

だが男は両手剣を取り出すと私に向かって振り下ろすが私はそれを横に避ける。そうなれば後は互いに細剣を振るうだけの間合いだった。

「はっ！！　たあっ！！」

私は一族の中でも本家に近い出身だったため、嗜みとしてのフェンシングに心得はある。異能がメインであるため基礎しかやらなかったため、あれほどの武器を雨のように放った人間には叶わないだろうとも思っていた。

「くっ！！　くそっ！！」

だが蓋を開けてみれば男は力もあつて動く速度も速いが、細剣を持つ構えや残心が素人のそれに近い。まるで強い武器があれば達人に勝てると思っている節もあったし、気のせいかこちらを見下しているという雰囲気にも思える。私は相手の剣先をいなし、起動を逸らして

「これで止めだ!!」

更に一步踏み込んで剣先で心臓を貫く。男が仰向けになつて倒れると、私は男が手にしていた剣と男が撒き散らした武器の山を拾つてナノトランサーに収納する。当然自分が使つていた細剣も収容しようとしたが既に許容量を超えてしまったので溜息をついた。

「い、いいの?」

追いはぎもしくは火事場泥棒同然の私の行動にエミリアが責める様な声で言い出す。とは言え最近ではフォトンの量も減少傾向だし、従来のフォトン溜め込むカートリッジの製造が禁じられたため、このような実剣の需要は高まっているのだ。闇市で売つてもよし、自分で使つてもよし、多くて困る事は今の様な歪曲空間に収容できる限界量だけだ。

「資源枯渇の影響で、武器とかも無駄遣いできないんだ。イグニスが壊されたのは痛かったぞ」

炎魔竜との攻防で破壊されたツインハンドガンやシャドウグは必要経費だと割り切るが、目の前の男に破壊されたイグニスは予想外の出費になる。幸いデータは無事だから後でMAW社に提出しておこう。

「そ、そう言うもの……？ まさかSEED事変とかでもやってたんじゃ……」

「やってたが？」

そもそも死人に金銭や武具は必要あるまい。それが大金や強い武器なら尚更だ。事後処理などで提出するものとはかく、それ以外のものは物々交換で交渉する道具にもなる。

「……本当にアンタって傭兵なんだね……」

「生きていくためだから……」

私たちはスポンサーが居たからまだマシだったが……と心の中で呟く。ここに居ても意味は無いので脱出させてもらおう。

だがそう思った矢先の事、私は信じられないものを見た。エミリアも私の雰囲気気付いたのか、私が見ている方を見ると同じ様な表情を浮かべる。

「え……うそ？」

彼女の言葉も頷ける、何せあの男が立ち上がっているのだから。私はあの時確かに心臓を貫いたのだから生きているはずは無い。だが目の前の男は怒りを露にした表情でこちらを見据えていた。

「あークソツ！！ テメエ、オレの宝具何勝手にかつぱらってんだよ！！」

「何故だ！？ SEEDフォームですら致命傷を負わせたら消滅した！！ なのに何故お前は生きているんだ！？」

男の怒りも聞こえず私は狼狽していた。当然だ、心臓を貫かれて生きている生命体は存在しないし、キャストですら中枢部を射抜か

れたらそこでおしまいだ。なのに目の前の男は生きている、どういうことだ！？

「バツカじゃねえの！？ 誰がんなこと教えるか！！ オレから主人公の座だけじゃなく宝具まで奪おうたぁいい度胸してんじゃねえか！！ オレを本気にさせたこと、後悔するんだな！！」

そう言つて男は再び武器の弾丸を放つ。私はエミリアを投げ飛ばしたものの、今度は腕を縫い付けるだけに留まらず武器の弾丸は私を飲み込んだ。

「……！！」

不意に地面に倒れこむ。左腕と両足の感覚が無い。視界が紅く染まる。上手く呼吸が出来ない。誰が何を言っているのか聞こえない。

（私は……死ぬのか……）

意識が朦朧とする中、私はそんな事を思っていた。せつかく炎魔竜のカードを手に入れたというのに、ここから出る事も叶わず終わりを迎える事になるのか？ 一度も炎魔竜の使わずに私はここで朽ちる事になるのか？

（ふざ、けるな……）

そう思った瞬間、心臓が激しく脈打つ。自然と私の腕は何枚かのカードを探り当てていた。幸い奴は私に興味を失ったのか、エミリアの方に近づきなにもやら話し込んでいるが、当の彼女は怯えたままだ。

奴の目線が私から離れている以上、好機は今しかない。

(……バイス・ドラゴンを特殊召喚し……ダーク・リゾネーター
を召喚する……)

私は探り当てたカードに描かれた魔物を召喚し、千切れかけた右
腕を高く掲げる。

（レベル5の……バイス・ドラゴンに……レベル3……ダーク・リゾネーターをチューニング……）

それは先程私が紅騎士を宿すのに用いた異能の中でも最強の術でもある同調。だが今から召喚するのはそれではない。その証拠にあるのは緑色の星と輪だったものが、今回は赤い火の玉と火の輪となっている。火の気配を感じ取ったのか男が驚いた表情でこちらを見据えるがもう遅い。

『王者ノ鼓動、今ココニ列ヲ成ス……天地鳴動ノカヲ見ルガイイ……』

私以外の存在の声が唯一感じ取る事が出来る魂に響く。恐らく炎魔竜のものだろう声と同時に炎の玉と輪が私の身体を飲み込む。

『我、今ココニ復活セリ！！ 炎魔竜レッド・デーモンズ・ドラゴン！！』

炎が吹き荒れると同時に私の身体も変質していく。肉体が炎魔竜

の身体となり、爪も鋭く伸びる。米神から角が生え、背中から悪魔の様な翼も生える。エミリアの驚愕する顔と男の癩癧を起こした顔が見える。特に男はありえないものを見ているかのような表情となっている。

「な、何で250円竜が、遊戯王のカードがファンタシースターの世界にあるんだよ!? しかもなんで融合してんだよ!? あれか!? 遊戯王じゃよくある事だって言いたいのか!? だったら融合なんかしねえでハーレム要員のブラマジガールや霊使いをだしやいいじゃねえか!」

人間サイズに縮小された炎魔竜と化した『私』はかつて炎魔竜が行った様な腕に力を込める動作をする。男の背後から武器が再び姿を現す。

だが遅い。

『アブソリュート・パワーフォース!』

武器が出される前に私は腕を振るい、男を掴み上げる。そして男を放り投げて柱に叩きつけると、歪曲していた空間も消滅して武器は地面に落ちる。

(エミリアは……ああ、無事か。それに眠くなってきた……兄上には悪いが私はここまでか……それでも、あいつのせいで死ぬよりかは、いい結末だな……)

自分の近くで驚愕の表情を浮かべるエミリアを見据え、彼女の無事を確認したところで安堵した時、私の中の“ナニカ”が切れ

あたしは先程の戦いを呆然と見据えていた。自分を庇ったギューヴに致命傷を与えた男が、何事も無かったかのように笑顔を浮かべながら自分の頭をなでようとした時、ギューヴの身体が炎に包まれると以前戦った炎魔竜の姿となって男を襲う。

男は武器の弾丸を放とうとしたがそれよりも早くギューヴ……いや、炎魔竜が男の顔を掴み上げ柱に向けて投げつける。それで戦いは終わり。ギューヴは元の姿に戻って地面に倒れこんだ。両足は無く、左腕は肩から千切れている。右腕も倒れた衝撃で肘から先が完全に千切れ、身体から離れている。

貴族の様な服も黒地に赤いのか赤地が黒いのか分からないくらい変色しており、金髪も紅く染まったりしている。

明らかにギューヴは息絶えていた。

「ねえ、起きて……起きてっばー!!」

声をかけているが身動きも言葉も出さず、声が虚しく響くだけ。
いや、後ろの方で誰かが立った様な音がした。

「なんで……？ 何で皆あたしをおいてっちゃうの……？ あたしを一人にしないでよ！！」

しかしそんな事よりギョスターヴの惨状のせいであたしは涙で滲んで目の前が見えない。後ろから無数の武器の弾丸が迫る音が響く。

「誰か！！ 誰でもいいから……」

武器の弾丸があたし達を飲み込まんとした時

「助けてよおおお！！」

そしてあたしは目の前が真っ暗になった。

太陽の様な黄金の輝きが武器を包み、構成を分解していく。発生源となったエミリアから幾何学模様のような痣が浮かび上がり、背には太陽の様な光輪が姿を現す。

その光輪から放たれた光は周囲を飲み込み、自分達の周囲にいた存在を消滅させる。そしてエミリアは……否、エミリアの姿をした『ナニカ』は彼女の口を借りて囁いた。

『あなたを……死なせはしません……!!』

その言葉と同時に“彼女”は腕をかざし、ギュースターヴを黄金の光に包ませた

「……クソッ!! どうなってやがる!!」

俺は脇腹を手で押さえながら通路に座り込んでいた。俺の傍らには緊急チームのメンバーになったバスクとか言うキャストの治療を受けながら吠える。

『この治療が終わり次第、俺は奴の後を追う。アイツは危険だからな』

バスクも無事じゃすまねえ状態だがな。とは言え奴の狙いはあのバカ……いや、家の会社の乗っ取りだって事は知っている。本音を言っちゃえば今こうしている時間も惜しいぐらいだ。

『……すまない、一刻も早く追いたいのはお前の方だったな』
「んな面すんじゃないやねえよ……」

奴のせいで俺の過去を知っちゃまったバスクがすまなさそうに顔を逸らして言っと、溜息を吐くしかなかった。

事の始まりは俺が……いや、タダ飯喰らいのバカを含めた俺たち

が海底レリクスの調査の依頼を受けてランク別の依頼を調達しに依頼者の元へ向かっていた時からだ。

俺は奥深くにある“レリクスの遺物”の回収、あのバカには初心者にも出来るレリクスの生態系の調査を受けさせようとした時に地震が起こった。意外と大きく、俺も思わずバランスを崩しちまったもんだ。

昨日の酒が残ってたのかと考えていたんだが、今はそんなことはどうでもいい。今は依頼の調達が優先だ……そう思った矢先、後ろの方からドタバタと走る音が響いて振り向いたら逃げるヒトの群れがあった。俺を押しつけて一斉に喋りだすから五月蠅いの何の。

で、要約すると地震があつてレリクスが起動、扉が閉まりそうになったから一斉に走り出した……と言うわけだそうだ。その結果、何人かがキャンセルだなんだとかで騒ぎ出してココから離れちゃった。

そんな時は『ギャラが増えるゼラツキー』程度だったが、傭兵の数が少なくなるに連れて俺はあのバカがいないことに気付いた。近くにいたキャストの男……バスクにあのバカの特徴を話した上で聞くと、そいつもパニックつたような声を上げた。

更に聞いてみれば取り残されたのはあのバカだけじゃないって事だ。依頼者にその事を話すと、急遽救助チームが組まれる事になった。つつても残ってるのはバスクともう1人……ヒトを見下した様な面をする紫色の髪に古臭いゲームに出てくる様な黒い鎧と赤いマントを着たブチギレそうな野郎とチームを組む事になった。

どうやらあのバカどもは何故か奥に進みやがったみたいで、俺ら

も奥へ向かって行った。奥に行っても奥に行っても追いつく気配がまるで無い。

「あのバカ、何処ほつつき歩いてやがる！！勝手にウロチヨロしやがって！！」

俺はそう叫ぶと同時に死骸を蹴りつける。スタリティアの残骸や原生生物の死骸、罾が破壊された跡を頼りに行動しても追いつきやしねえ。

『だが2人の実力は高いようだな。こうまで奥に進めるとは並大抵の傭兵では出来ない事だ』

俺は……何故か隣にいた奴もバスクの言葉を聞くと笑っちゃった。何せあのバカは碌に働きやしねえロクデナシだ、となるとこの惨状を作ったのはもう一方の方になる。

『そうか……では奥に進むとしよう。ココで休んでいる暇は無い……』

バスクがそう言うのと奥に進む。ああ、その矢先だったんだよ。

「あーもう！！ほんつとに使えねえのんだくれのおっさんに口リシヨタキヤストだなあ！！だからオレの事放っておけって言ったのによー！！」

指を弾くと同時に俺とバスクは奴に攻撃されちゃったって訳だ。そいつはナノトランサーを複数使ってたのかって叫びたくなるほどの武器の雨を降らせやがった。

しかもアイツは俺の思い出したくもねえ過去を知っていやがった。

その話を話しながら奴は俺に攻撃しやがったし、エミリアたちを自分の物にするってほざきやがったから、ナノブラストを暴走させてまでして奴と戦ったが、あいつは武器をとつかえひつかえしまくるわ、頭を砕いてもすぐに復活するわでキリがねえ。最後にや俺らをぶった切ってから奥の方へ逃げやがったってわけだ。

「つつつてもよ……奴は何者なんだ？」

俺はそんな事を言いながら立ち上がる。傷は痛むがそんな事なんざどうでもいい。それ以上に俺はいやな事を思い出させやがった奴が気に入らなかった。

『その事を誰かに話したことは？』

「あるわきゃねえだろ！！ ウルスラとチエルシーにしか言つてねえし、言いふらす様な奴じゃねえ！！」

声を荒げる。一刻も早く追わなきゃならねえって言うのに、アイツが最後に使いやがった黄色の槍のせいで傷が治りやしねえ。

「行くぜ……」

一歩ずつ足を進めていく。傷口が疼き、回復薬を飲みながら前に

進む。そんなことの繰り返しだった。別の広間で蹲って最後の薬を飲んだ時、俺は目を瞬かせた。

「……は？」

全くもって信じられなかった。傷口が徐々にふさがり、痛みが引いてきたのだ。しかも手足の感覚も元に戻っている。

『どうした？』

「……傷が治ってやがる……どうなってんだ？」

俺自身何が起きたかなんてどうでもいい。今は一刻も早く追うだけだ。即座に走るがあのかのバカたちの行動が幸いして障害は何もなかった。俺らが別の広間にたどり着くと、そこにはぶっ倒れているあのかのバカ……エミリアとその近くで倒れている金髪の男、そして

『どうなっているんだ？ 何故奴が倒れている？』

俺らをコケにしゃがんだ野郎が白目を剥いてぶっ倒れていやがった。何が起きたのかわかりやしねえがざまあみやがれて言うのが本音だ。一発殴ってやりたかったが、こうなりゃ後は知ったことじやねえ。奴が起きあがらねえ内に俺はエミリアを、バスケットは金髪の男を担いで逃げ出した。

謎の襲撃者（後書き）

本文のようにこれから敵としてチート転生者が跳梁跋扈します。

後転生者さんがブツちやけてくれたせいでクラウチの過去をバスケット先生が知ってしまいます。

前回登場できなかったミカさんを登場させました。次はようくりトルウイングにご招待です。

ようこそリトルウイングへ（前書き）

リトルウイングにご招待~~~~なお話です。
後主人公の過去らしきものも載せておきました。

ようこそリトルウイングへ

懐かしい光景を見ていた……

それはまだS E E D事変が起こる前日の事……

「ガーディアンズだと？ お前がか？」

私を含めた3人と1体が食事をしている中、私は青色がかったボディを持つキャストに向かって声を上げた。その一方では黒髪と白髪、2人のヒューマンが一族の異能に必要な不可欠な知る人ぞ知るカードゲームを行っていたが。

『ああ。ま、家って結構協会の上層部と関係深いって話じゃない？で、協会とガーディアンズとの技術交換がてら俺と姉御が行くってさ』

目の前のキャストがキャスト用の栄養ドリンクを飲みながら声を上げる。

「カードを1枚伏せてターンエンド……っと。姉御って……あの人が……エンドフェイズ時にリビングデッドの呼び声！？ しかも対象はメカニカル・ハウンド！？」

黒髪のとけない表情の青年が小さく苦笑いして相手の一手に驚愕する中、残った白髪の青年が声を上げた。

「カードを1枚セット、ハンドレス状態のメカニカル・ハウンドでロード・ランナーに攻撃……レオン、テメエ大丈夫なのか？ 組

織に入るって事は命令に従えって事だぜ？ 今までの様な自由行動は出来ねえぞ……ガード・ブロックか……しくじったな……」

『テムエに比べりゃ俺はまだマシな方だったの！！ 当主には反抗的、協会のお偉いさんとも折り合いが悪い、周囲とも溶け込もうとしない三拍子揃った誰かさんに比べたらよ！！』

私も彼が放った白髪のコールドマンに対する酷評に納得がいったので浅く頷いた。確かに彼の行動は目に余るからだ。それを見たのかレオンと呼ばれたキャストは身体を乗り出して声を上げる。

『だろお？ ギュスは話分かるじゃん！！』

「僕のターン、ドロ……レオンさん、ギュスターヴさん、飛鳥だって悪気があったわけじゃないし……カードを1枚伏せてターンエンドっ」と

「カール、レオンとアスカの問題だし言い出したのはアスカの方だぞ」

カールと呼ばれた黒髪の青年を嗜める私だったが、ある事を思い出してレオンと呼ばれたキャストに向かって声を上げた。

「とは言えお前、キャストなのに計算苦手だったではないか。アスカの台詞ではないが大丈夫か？」

『あー。まあ、人には向き不向きがあるって事で』

レオンが顔をそらすとカールが突然頭を抱えて項垂れる、どうやらアスカに軍配が上がったようだ。そんな時、別の方向から声がした。

「あ、ココにいたんだ。皆」

その声を聞いた途端、私とカールは姿勢を正すがアスカとレオンは正そうともしなかった。

「飛鳥！？ レオンさん！？」

カールがそんな2人を嗜める一方で奥から3人の人間が姿を現した。淡い紫色の髪を靡かせる女性ビーストに、ポケットに手をつ突っ込んでこちらへ向かう男性ニューマン、そして茶色の長髪を靡かせた柔和な笑みを持ったヒューマンが姿を現した。

「今更だよカール。ボクは気にしてないし、こういう反応見せてくれるヒトが欲しかったからさ」

『さすがボス！！ 話分かってるう！！』

「確かにそうですね。レオっちやアーちゃんはその持ち味ですから」

レオンとニューマンの男がそう言うのと、女性ビーストが声を上げた。

「少なくともレオンは少し気を引き締めないとダメだろう。あたしとレオンはガーディアンズに行くんだからね」

そう言っ て目つきを鋭くさせる彼女に対して『ボス』と呼ばれた男は優しく言う。

「ま、そうだね。君の言いたい事もわかるよミサキ」

彼がそう言っ てミサキが顔を赤らめる中、私は皆を代表して声を上げる。

「それで用件はなんでしょうか？」

「あ、そうそう。一週間後に同盟締結100周年記念式典が行われるからコロニーに行く支度してね。仕事とかは開けておくように」

「ああ、お偉いさんとのパーティーか。俺はいつもどおりパスするぜ、そんなもんに出てる暇なんざねえよ」

アスカがそう言う中、ニューマンの男が眠たげに声を上げた。

「ダメですよアーちゃん。今回は全員強制召集されてるんです」

「そそ、ゾディアの言うとおりさ。あの子もその話聞いてすごく張り切ってるんだからさ、君が彼女のために遊ぶ時間も眠る時間も惜しんでる事は知ってるけど……」

コイツ先程までカールとカードゲームで遊んでました、レオンはそう言いたげだったが私の視線を受けて口を閉ざした。基本的に飛鳥がデュエルモンスターズを行うのは誰かに挑まれた時のみなのだ。

「ま、パーティーは美味しいものがたくさんだ！！ 日頃のタチの悪い異能者狩りも今日はお休み！！ それじゃ皆、コロニーに行く準備ヨロシク！！」

それでこの場の会話は終わり、私たちは各々コロニーへ向かう準備を始めた……

懐かしい記憶も徐々に色あせ、暗闇に慣れた私の目にとって眩い光が差し込んでくる。

「ぐ……む……」

私は思わず右腕で目元を押さえ、上半身を起こそうとする……だがそこで1つ疑問点が起き上がった。私の服はMAW社製のスーツ『エスプレンドスカラー』だったはずだ。それが質素なインナースーツになっている。

とは言え上半身を起こした時に見た両足と左腕の存在によって全て吹き飛んでしまったが。あの時私は明らかにその3つの感覚を失っていたはず。特に左腕にいたっては千切れ飛ぶ光景が目映っていたのだ。

思わず右腕に目を向けるが武器で射抜かれた傷も存在しない。ただただ倦怠感だけが体に残っているだけだ。これは一体……

『オウ、気がついたネー!!』

耳に響く甲高い合成音。キャストのものだろうが、ニュアンスから女性のものであることが分かる。

『始めまシテお客サン。ワタシ、チエルシー。ヨロシクネ』

「……こちらこそよろしく頼む」

周囲を見回すとそこは医務室か何かなのかベッドが周りにいくつが存在し、私は声の主であるチエルシーと名乗ったキャストの方を見据える。

黄緑色の髪をした水商売系の服を模したパーツを着込んでいたが、

私の視線に気付いたのかわざとらしく両腕で胸元を隠して身体を捻りながら声を上げた。

『お客サン……見てもいいケド、がつつイテ見るのは感心しないヨ―？』

「……すまない……ところでココは何処なんだ？」

私の声に対して彼女は優しく説明するかのように声を上げた。

『リラックスしててイイノヨ、ココはボツタクリの店じゃないからネ』

そう言う意味で聞いたのではないのだが……

『お客サンがレリクスで着てた服、ボロボロだったカラ脱がせちやったノヨ。見かけによらずいい身体つきだったカラお姉さんビツクリヨ』

「少し待ってくれ……服がボロボロだっただけか？ 腕とか千切れていなかったのか？」

左腕と両足が千切れ飛んだと言うのに、服だけがボロボロになったのかと言う疑問に対して彼女はやりわりと答えるのみ。

『五体満足大丈夫だったネ。一応CUBIC STAR製の最新ジャケットを用意したケドサイズは大丈夫？ コレはお姉さんからの特別サービスヨ、気にしないで受け取ってネ』

ホラそこと指を指された先には青みがかったジャケットが畳まれてあった。インナーで歩き回る趣味はないし私はそれを手にしてカーテンで彼女の視界を遮ってからズボンを履き、シャツとジャケット

トに袖を通す。

着替え終わってからカーテンを開けると、チエルシーは商売用のスマイルらしきものを浮かべて声を上げた。

『似合ってるわよお客サン、ワタシ少しクラクラ〜つときたヨー。それじゃシャツチヨサンガ呼んでるネ。歩けルカシラ?』

ベッドから足を下ろして腰を上げるが、まだ新たに生えただろう両足に慣れていなかったのか思わず膝を震わせてしまい、思わず尻餅をついてしまう。

『ホントに大丈夫? ユツクリでイイノヨ、お姉さんが教えてア・ゲ・ル』

「……そこまで……心配してもらう必要は……無い……」

男として歩くくらいで甘えるわけには行かないので、無理矢理にでも腰を上げる。そして生まれたての小鹿の様な足取りで私は医務室から出て行った。

何度か転びかけてチエルシーに心配されながらようやくオフィスらしき扉にたどり着くと、1人の男性の声が聞こえた。

「おう、俺だ俺。今すぐ俺んトコまで来い……ああ? イヤだあ

？ 甘えてんじゃねえぞ！！」

どうやら彼の通信相手は機嫌が悪いのか来たがらないようだ。その様子にチエルシーは苦笑いし、私は少し溜息をつく。

近づくにつれて酒の臭いが漂ってくる。酒場にはよく出向いていたがこの臭いにはいまだに慣れないなど心の中で愚痴る。更に水着の女性がモニターに映し出されており、仕事をしていたのかとさえ感じられるほどだ。

「……つと、来たか。その顔だとココが何処だか分かってるようだな？」

髪と髭で顔の大半を隠したビーストが声を上げると私は頷く。チエルシーからある程度の説明…… M A W社のライバル会社の1つである『スカイクラッド社』が持つリゾート型コロニー『クラッド6』……私はあの海底レリクスからココまで運ばれてきたと言うのだ。まさかライバル会社の人間に命を救われる事になるとは……私は溜息を吐くしかなかった。

「んなしけた顔してんじゃねえ。テメエの素性は聞いてるよギユスターヴ、M A W社代表取締役グラディウスⅡウィンストンの弟さんだろ？」

『エエー！？ 家のノウハウを盗むタメニやってきたスパイだつて言うノ〜〜〜！？ 大胆な手で潜入するなんて信じられナイ』

彼の言葉に私は息を呑む。一方でチエルシーは驚いた表情で的外れな言葉を出す。それを彼が制した。

「……お前は知ってるはずだろ。M A W社トップの弟の看護を頼むってウルスラからも言われたわけだしな」

『お約束ネシャツチョサン』

「……ああそうかい」

2人の漫才に思わず咳を出して話を促す。態々コレを見せるために連れて来られたのならばここににいる意味は無い。

「クレームが来ちまったな。俺はクラウチィミューラー、軍事会社『リトルウイング』を取り仕切ってるモンだ」

「リトルウイング……来るもの拒まず経歴問わずで有名な傭兵集団……ですか」

異能者の集団といえども表の情報はある程度仕入れている。以前行方不明になった仲間の情報を求め、こういった集団まで調べた事があったのだが結果は不発に終わった出来事を思い出していた。クラウチはそんな私の考えなどどうでもいいかのように言葉を紡ぐ。

「無理して敬語使わなくてもいいぜ。それとお前さんの知ってるリトルウイングで間違いねえぜ。ま、軍事会社といっても肩書きだけでな……やってる事はそこの便利屋と対して変わらねえよ。要人警護に廃棄プラントの調査とかシヨボいもんばかりさ」

基本的に大規模な軍事会社や同盟軍、そしてガーディアンズ等と言った有名所に大規模な仕事を持って行かれてしまっているのが現状だ。それにGコロニーが落下してから、私とウォザールブルグ動乱で行方不明になった2人で自警団の様なものを結成していた時期もあったから、それを大きくした様なものと自己完結していた。

「で、この前あった海底レリクスの調査にも偶々参加してたって訳だ……」

そこでクラウチの表情が見る見るうちに不機嫌そうになっていき、チエルシーは慌てて声を上げる。

『デモ、そこでトラブルがあつたのよネ！突然地震が起こってレリクスの中に閉じ込められたうっかりサンがいたのヨ！。デ、任務もうっかりサン救出作戦に変更って訳ネ』

「ああ、そのレリクス内に閉じ込められたバ力なうっかりさんがお前さんって訳だ……」

やはり不機嫌そうな表情を隠さない中、彼が声を上げて瓶を手にして一気に中の液体を飲み込んだ。

「とは言え地震のせいで逃げやがった連中が出るわ、その上急遽組まれたチームの中にクソ野郎が一匹混じっていやがったわ、そのクソ野郎のせいで俺ともう1人が大怪我までしたわで大変な苦勞をしたんだがなあ……拳句の果てによやく帰って来たらスポンサーまでトンズラと来たモンだ！！」

酒瓶を叩きつけ砕け散った破片が宙を舞う中で怒鳴るクラウチ。どうやら実入り無しの状態で自分を救助してくれたわけだ。

『無理しちゃダメよシャッチョさん。またボスに怒られるわヨ……』

優しくクラウチを嗜めるチエルシーだったが、私は嫌な予感しかしなかった。

「……さて、話を戻すが……お前、俺たちが『お金なんて要らない、君たちの笑顔があればそれで満足さ』とか言う正義の味方に見えるか？」

「いや全く見えないが……」

私は見た感じ正直に言うが、クラウチは若干顔を引きつらせた顔を近づける。正直言うが子供が泣きそうなくらいに迫力があってやはり酒臭い。

「いい度胸してんじゃねえか、正直な感想をありがとよ……予想通り俺らは常日頃から金がいる傭兵集団だ。スポンサーがいなくなっちゃった以上、誰が俺らに報酬払えばいいのかねえ……？」

クラウチの目は私を見据えている以上、矛先は私しかおるまい。まあ、私が集めた武器を売り払えばいいか……

「ココまでの運搬代金に目覚めるまでの護衛代金……しかもチエルシーの看護まで含めるとなると100万メセタ……おっと忘れてた、俺らの治療費や奴らが俺ら以外の傭兵の報酬にスポンサーがトングラした違約金を含めて500億メセタになっちゃうな……おお怖い怖い」

その報酬と言うには天文学的な値段に私は眩暈を覚えた。武器を売ってどうにかなる金額でもないからだ。ウオザーブルグ動乱以来、不要なカードや調度品をいくらか売って漸く一族が慎ましく暮らせる様になったのだ。もしココで私が断ったらどうなる事が……

「ま、俺らも鬼じゃない。こんなバカ高い金をお前が払えない事は分かってる……だからコイツをMAW社に請求するさ」

「ま、待ってくれ！！ 流石にそれは不味い！！」

思わず身を乗り出して大声を上げるが、周りにいた面々はただ笑うだけで誰もクラウチを窘めようとはしない。確かに自分は金で解

決できれば御の字だという考えを持つが、それでも限度がある！！
明らかにMAW社は……自分たちが運営している異能者集団は経営難に陥ってしまう！！

「ほう……じゃどうするんだ？ お前さんが家で働いて借金払うって言うのか？」

『田舎のお兄さんも苦勞するわヨ、ココは素直に頷いた方が身の為ネ』

以前カールがテレビで見ていた、古代ニューデイズをモチーフにした時代劇に出てくる悪代官よろしくの表情を浮かべるクラウチと、彼に寄りかかって負けず劣らずのあくどい表情を浮かべるチエルシ！。その顔を見て怒りを覚えたが答えは一つしかない

「……そうするしか、ないだろ……クラウチ……」

「よっしゃ決まりだな！！ 言質取ったぜ！！」

諦め半分捨て鉢半分で声を振り絞って答えるとクラウチはあくどい雰囲気消し去って拍手を打つ。それを合図に他の面々も笑うのを止めて元の位置に戻って行った。

「実はお前の兄貴との交渉は既に済ませてんだ、流石に俺たちもMAW社と全面戦争する気はねえよ。報酬の方はMAW社がスポンサーになったって事で貰ってある。元スポンサー様にはキチンとお礼参りするつもりだがそれは俺の仕事じゃねえ……後、コレを渡してくれって頼まれてんだ」

その言葉に私は思わず脱力するが、兄の書状を受け取りそれを見据える。それにはこう書いてあった。

>>しばらくお前に仕事を言い渡せないからリトルウィングで世話になるように。一応クラウド氏には仲介屋を通して仕事を依頼するので、仲介屋経由だったらMAW社からの依頼だと思ってくれ。
グラディウスⅡウィンストン<<

恐らく異能を悪用する連中や以前属していた“協会”が残した不始末の処理で忙しくなるのだろう。そこで私を救助したリトルウィングに白羽の矢が立った……そう思う事にして自分自身を納得させた。

「ま、本当は入社試験があるんだが、そこはMAW社から推薦状代わりにお前の経歴を見させてもらったぜ。Gコロニー落下事件までMAW社の私兵集団に所属、その事件でリーダーが死んでから残った仲間と一緒に自警団を結成……戦闘要員僅か3名の超少数精鋭でチーム名ともなった『三騎士』とか言う経歴があるんだ……テーマエラ一応グラールの一部じゃ都市伝説みたいな事になってんだぜ？」

一応試験はあるのか……そう思った矢先、クラウドが言葉を進めた。

「当然試験なんざ必要ねえ即戦力だ、更に今ならいなりマシ程度の自分色に染められるパートナーつき！！いい条件だろ？」

彼がそう言った矢先、扉が開く音がする。開いた扉から入ってきたのは、あの海底レリクスで行動した少女・エミリアだった。

「……あのさ、おっさん。今日ぐらいカンベンしてよ……あたしがどういう状況だったか知ってるでしょ？」

そんな彼女もやる気も無い仕草でこちらに向かってくる。表情は

暗く目の下には隈が出来ていた。

「知らねえし興味もねえからカンベンしねえよ。んな事よりお前、客の前でそんなツラするんじゃない」

クラウチの声に対してエミリアは私の方を向く。最初こそ始めましてと言った彼女だったが、しばらくして私の顔に見覚えがあったのか驚愕の表情を浮かべ

「え……ええ！？ ええええええ！？」

正に幽霊でも見たかの様な声を張り上げた。まあ、私自身も驚いているわけだが……

「い……生き……てる……？ ……なんで、生きつ……生きてるの！？ 何で？ どういう事！？ ギュスターヴにおっさん！？」

「私にも分かん」

「勝手に人を殺してんじゃないよ……お前、ホント適当な事しか言わねえな。お前、ヘマしたらとんでもねえ事になったぞ」

私達からの攻撃に思わず沈むエミリアだったが、彼女はとんでもない事を言う。

「生きてたこと教えてくれなかったおっさんには頭にきたけど……でもよかった……よかったあ……あたしも気を失ってて、気がついたらココの医務室にいたしさ……」

彼女は私が“生きていた”事に安堵したのか、とんでもない事を口走り始めた。

「あそこで起こった事って、全部夢だったんだ……そうだよ、心臓刺されても死ななかったり、モンスターが実体化したり人と融合したりするなんて夢に決まってるよね……最近遊戯皇見てないんだけどな……」

その言葉を聞き私とクラウチは思わずエミリアをにらみ付けた。彼女の中では『夢の中の出来事』だと自己完結しているが、それでも私達の秘密を堂々と話されてはたまった物ではない。

「夢の話は後にしておけ!! それはともかく、お前らやつぱり知り合いだったか……よしよし、思った通りエミリアも懐いているみたいだし好都合だな」

「思った通り? 好都合?」

「……まさか!!」

エミリアは首を傾げていたが、私は思い当る節があったのを思い出す。あの時彼は試験も無し、パートナーつきだと言っていた筈だ。恐らくクラウチが言うパートナーの正体は……

「ああエミリア。一応紹介しておくがこいつはギユスターヴ、うちの会社の理念に共感して喜んで社員になってくれたぜ」

「……またいつもの悪代勧誘? まあ、コイツが有能だって事はあたしも知ってるけど……」

彼女は私の方を見てから胡散臭げな表情でクラウチに向かって言う。

「骨折ったもんだ。試験免除にいないよりはマシ程度のパートナーをつけるって条件を出す事になっちゃったからな……」

本当は身内にとんでもない請求書を送りつけると脅されたからなんだがな。しかもそれは実質騙まし討ちに等しいものだったが……

「へえゝめずらしく太っ腹だねゝ」

エミリアの発言に対してクラウチが呆れ返ったかのように腕を組んで声を上げた。

「何他人事みたいな顔してんだ。お前の事に決まってるんだろ」

やはり彼の言うパートナーとは私の思ったとおりの人間だった様だ。一方でパートナー認定を受けたエミリアが驚愕の声を上げる。

「ええっ！？ おっさん！！ 勝手にパートナーとか決めるな！
！ 少しはあたしの意見を……」

「……ほお、お前それはつまり1人で働きたいって事か？」

その問いかけにエミリアは思わず口を閉ざしてしまう。更に彼は私たちに向かって声を上げた。

「さてギユスターヴ、実はお前さん用の部屋を既に用意してある。エミリア、ぼさつとしてないでコイツを案内してやれ。パートナーなんだから仲良くな」

彼の有無を言わせない言動にエミリアも遂に折れたのか、項垂れて声を上げた。

「はあ……分かったよ。それじゃ、あたしは先に居住区の入りに行ってるから……」

そう言っただけは諦めてとぼとぼとオフィスを後にした。クラウドが慌てて声を上げるがもう遅い。

「あのバカ……案内する奴ほっぽってどうするつもりなんだよ……それに返事ひとつマトモにできねえのか、アイツは」

そう言われるとバツが悪い。だがそこでチエルシーが声を上げた。

『シャツチヨサン、怖い顔するからネ。もっと優しくしてあげるとイイヨ』

彼女の言葉を持っても、クラウドには届かない。

「何でロクに働きもしねえ社員に優しくしてやんなきゃいけないんだよ。な、ギュスターヴ……お前もそう思うだろ？」

私にいきなり話を振らないでくれ。とは言え海底レリクスではあまりに耳を疑う言動を発していたのも事実な訳だ。

「まあ……確かに働いてくれと言っるのが本音だな……」

「そうだろ。やっぱお前さんは分かってやがる。あんぐらいのガキは甘やかすとつけあがるから厳しすぎぐれえが丁度いい」

「それでも言わせて貰うが……流石に仕事中に酒を飲んだりグラビア写真を見たりするのも、子供からしてみれば『お前が言うな』としか言えないが……」

彼女曰く『悪代勧誘』に対する嫌がらせ代わりに言ってやる。だがそこでクラウドが不機嫌そうに声を上げた。

「あ？ まさかテメエ俺とエミリアが親子関係だと思ってるのか？ 勘違いしてるようだから予め言っておくぞ。俺とエミリアは、家族でもなんでもねえ……ただの上司と部下の関係だ」

上司と部下を強調するかのようにつが、チエルシーはそんな彼をたしなめるように言い放つ。

『そんな、ツレナイネー。シャツチヨサンは、あの子の保護者でもあるのに……』

「……ツケの代わりに、お前共々押し付けられただけじゃねえか。泣く真似止めろ、またクレームつけられるぞ」

ハンカチ片手に泣く真似をするチエルシーにクラウチは呆れながら頭を抱えた。

『資源枯渇のせいでお店がつぶれる直前まで来てくれたの、シャツチヨサンだけよ。私とエミリア、引き取ってくれて感謝感謝ネ。もし引き取ってくれなかったら私たち悪いオジサンたちに身売りしてたヨ……』

「……それで？ いい加減こつちも暇ではないんだが……」

流石にこれ以上三文芝居を続けられると呆れより怒りが強くなってくる。私の怒りに感じたのかクラウチが大きな声を上げた。

「と・も・か・く……俺とエミリアは家族なんかじゃねえ……書類上俺はエミリアの保護者になっちまってっただけだ……！ そっじゃなかったら、働かねえ五月蠅いだけのガキなんざとつくに放り出してんだ……！」

『仕方ないヨ。最初は誰でもわからない事だらけヨ……皆が皆、最初から強いわけじゃないもんネー。あの英雄イーサンだって始め

てテクニク見た時はビックリ仰天驚いたのヨ」

確かにそうだが、キャストはカタログスペックではないか？

「まあ、アイツの過去とかはどうでもいい。正直そんな事に興味は微塵もねえしな」

そのことに関しては異議を覚えた。人の過去はある程度は知っておいた方がいいと思うのがウォザールブルグ動乱の顛末を聞かされた時に思ったことだ。確かに地雷を踏む可能性は在るが、知らずの内にとんでもないものを踏まされるよりかは遥かにマシだ。

「まずお前さんがやる事はエミリアのお守りだ。タダ飯喰らいじやなくなる程度に鍛えてやってくれ。それでいい、後はお前の好きにしな」

話は終わりだと言わんばかりに席に座るクラウチ。それを見たチエルシーが私に向かって声を優しく上げた。

『シャツチヨサンはああ言っけどエミリアはいい子ヨ』

まあ、あれで悪党だったら私も即座に人間不信に陥るから彼女の言葉には首を縦に振る。それを見た彼女は顔を明るくさせて声を上げた。

『仲良くしてもらえると、ワタシもウレシイ、あの子もウレシイ、皆ウレシイ。お客サン、エミリアは居住区の入り口でお待ちヨ……レディを待たせちゃいけないネ』

彼女の言葉に後押しされて退出しようとした時、突然クラウチが

私を呼び止めた。

「ああそうだ。アイツは夢だと思ってたから渡せなかったんだよ、コレお前さんのだろ？」

そう言っただけは3種類の物を私に手渡す。まず一つ目は私達の本
来の武器であるデュエルモンスターズのカードで私が入手した『レ
ッド・デーモンズ・ドラゴン』、続けて赤と黒で彩られた私のナノ
トランサー、そして……

「この細剣は……」

最後は私が収容しようとして結局出来なかった細剣だった。クラ
ウチはそれを見据えて声を上げる。

「お前さんの近くに転がっていたんだ」

私は首を横に振る。元々この細剣はあの男が使用していた武器
であり私のものではない。しかしクラウチは無理矢理私に押し付け
ようとした。

「違うのか？ コイツは俺やバスクのモンじゃねえし、デザイン
だってエミリアの趣味でもねえ。となるとお前さんのモンだって言
うのが俺の推理だ」

どうやら彼はこの武器を無理矢理にでも私の物にしようとしてい
る。イグニスを筆頭とした武器が破損ないし破壊されてしまった以
上、私の武器はシールドしか存在しない事になっている。

「仮に違ってもだ。持ち主がここにいない以上誰のものでも

ないが俺らはいらねえし、エミリアじゃ使えそうにねえ。つう訳でコレは今日からお前のもんだ」

この細剣は軽いし貫通力もある。捨てるには惜しいし、何故か手に馴染んでいる。炎魔竜とは比べ物にならないが私がコレを欲してしまっている以上、断る理由は無い、か……

「……まあいい。くれると言うのなら貰っておく」

あのような悪質な勧誘を受けたのだ、敬語を使う気など礼を言うためであろうと失せている。クラウチの方は厄介払いが出来たと思っているのか嬉しそうな表情をしていた。

私は細剣を腰に備え付けるとこの場から立ち去っていった。

「さて、居住区だったな……」

だが腑に落ちないことも在る。炎魔竜も腰に据えた細剣も現実存在するが、不思議な事にナノトランサーの中にあつた武器は全て幻だったかのように消えうせていたのだ。しかしこの細剣だけは消えずに今も残っているのだ。

（……そうなると夢ではないのか……？ それにしては両足や左

腕が生えている事は……いや、そもそも今こうしている事すら……)

『む、お前は……』

私が考え事をしている中、聞き覚えの在る男性キャストの声が響いた。細身のパーツにフルフェイスメット……海底レリクスに訪れた際に会話をしていた傭兵だった。

「確か……私と海底レリクスであつたな……」

『覚えていたか。俺の名はバスクだ。クラウチから名前は聞いているぞギユスターヴ、ここにいるということはお前もリトルウイングに入ったのか?』

入ったと言うか入らされたと言うか……答えに戸惑っていると、バスクの名に聞き覚えがあつたので問いかけた。

「すまないが私達を海底レリクスから救助した『バスク』とはお前か?」

『……ああ、俺の事だ。レリクスでの救助活動と突然攻撃してきたヒューマンとの戦いが縁でクラウチにスカウトされてな』

やはりあの男と戦った事は夢ではないか。そう考えているとバスクが周りを見て声を上げた。

『入社するまでの経緯は問わずと聞いていたから、どんな奴らがいるのかと思っていたが……それほどひどい状態ってワケでもなさそうだな』

確かに言われてみれば周りを見ても、周りにいるのは荒くれ者だと思われるが一日中喧嘩をしているような奴らばかりではないとい

うことか。

「確かにそうだな……問題は取り仕切っている筈のクラウチの行動ぐらいか……」

昼間から酒は飲むわグラビアは見放題だわ問題しかない。特にあの勧誘を思い出すだけで怒りが込みあがってくる位だ。

『……………』

だが私の怒りとは他所にバスクは何か別のことを考えていた様に見えるが、声をかけると直ぐに嗜める様な声を上げる。

『そこまでだギユスターヴ。俺たちは雇われの傭兵よろしく仕事に精を出せばいいし、タダの酔っ払いならとつくの昔に解雇されている筈だろう？ クラウチだってここにいる以上実力はある方だぞ？』

そう言えばこの男はクラウチと共に行動していたはずだから実力は知っている訳か。確かに言いすぎだったかもしれないな。

『まあ一緒に仕事をする機会もあるかも知れんが、そのときはよろしく頼む』

「こつちもだ。ではな」

バスクと別れてしばらくすると今度は横から女性に声をかけられた。赤い扇情的なコートを着ている青い髪を靡かせた右目を隠している女性ヒューマンだ。

「見ない顔だな……と言う事は久々の新入社員か……しかもその

顔から見ると、クラウチとチエルシーが悪代勧誘をやったようだな」

その事を聞きげんなりとする。目ばしい人間には毎回コレをやっているのかとも思えた位だ。

「あれはなんなんだ？ 訴えられても文句は言えないと思うが……」

「あれは既に引き抜きの契約を済ませてある傭兵に対する冗談みたいなものだ、気にする必要は無い」

言ってもいい冗談と悪い冗談があるのは当然の事だと思うのだが……あれが冗談だとは初耳だったぞ。

「おつと自己紹介が遅れたな。私の名はクノー、リトルウイング所属だから君達の先輩に当たる」

「……ギュスターヴ・ウインストンです。若輩者の身ですが、これからよろしくお願いします」

そう言って互いに握手する。握手が終わったところでクノーと呼ばれた女性は目つきを鋭くさせて声を上げた。

「ココは入社までの経歴が問われない反面、入社後の実績で全てを評価される完全な実力主義の会社だ……」

なるほど、それで性根の腐った連中は軒並み排除されていると言っわけか。私は一応推薦状代わりに経歴を問われたわけだが即戦力だからいいと言う事になったのだろう。

「ああ、腕に自信が無いのなら早々に去った方がいい。そして自信があるのなら好きにすればいい」

「……一応コレでも少数精鋭の自警団のメンバーを務めていたので自信はある方です。私が逃げれば残った2人の名を汚す事になるので……はい分かりました等とぼざいて逃げはしない……」

最後の方は地を出して声を上げる。それを知ったのか彼女も小さく笑った。

「ふふ、今のは軽い脅しだったんだが、全く動じていないどころか反論までするか……流石は伝説の『三騎士』といったところか？ まあ君が私と敵対しない限り、私は君の味方だ。いつでも話しかけてくれ」

互いに会話を終わると私は漸く居住区の方へ差し掛かる。入り口を潜り抜けるとマンションの入り口フロアのような空間が広がっており、エミリアはソファアの背もたれに背を預けて眠っていた。

「エミリア。遅れてすまなかった」

「……あ、やっと来たの……んじゃさっさと終わらせるわよ……」

エミリアが目を擦りながら言うと、ソファアから立ち上がって移動を始めた。私も後に続き転送装置にたどり着く。

「ホイホイッと……」

エミリアが装置を操作すると、私達の身体は扉が並び立ってる廊下へ移動してその中の1つを開けて私たちは入る。質素だが落ち着ける部屋だ……まあ、家具がベッドとビジフォンを置いてある机しかないのは今まで誰もいなかった部屋だからだろう。

「……あ、一応会社から支給されてるパートナーマシナリーもリ

クエストあるなら今日中に言っておいてね。ルームグッズとかもスタイルシヨップとか生活用品店に行けばあるから……シャワー浴びたかったらドレッシングルームに備え付けられてるのがあるから」

「了解した」

「んじゃ後はテキトーにやっててね……その間あたし休んでるから……ふあ~~~~あ……」

そう言っただけで彼女はベッドの上で眠り込む。掛け布団を彼女に被せると私はドレッシングルームへ向かい、鍵をかけた後で服を脱いだ。

(……)

備え付けられているシャワーを使い冷水を嫌と言うほど浴びながら私は考え事をしていた。

今日の……いや、昨日かも知れないし一昨日かもしれない海底レリクスの調査を思い出す。

彼女は夢だと言っていたが炎魔竜が封じられたカードもあの細剣も実在している。クラウチの表情から察するに恐らく彼もバスケット共にあの男と戦っていたのだろう。よってあの男も実在している。

(どういことだ……)

エミリアは夢だと思っているようだが証拠物件と証言がある以上

現実だと確信している。だが彼女の言葉に対して納得している自分もいるのだ。

何しろ彼女の言葉を裏付けているのは……他の誰でもない私自身なのだから。流石に冷たくなったからシャワーを止めて置かれてあったバスタオルで身体を拭く。

（左腕はある……両足もある……）

拳を強く握ると痛みが走る。

（痛みがある以上、夢ではない……）

チエルシーから渡された服に着替え、私は今も眠っているエミリアを横目で見据える。

（彼女は私と面識がある……彼女にとって何処までが夢なんだ……？）

彼女にとって全てが夢ならば私の事を『夢の中の人間』と言う可能性があった。だが私は現実の人間だ、フィクションの存在ではない。

考えれば考えるほど分からなくなってきた。出口の無い迷宮に迷い込んでしまったようだ。

（……考えるのは止めよう……バスクの言葉を借りるわけではないが、私は雇われの傭兵だ……命のあつての物種……それで十分だ……）

自己満足だといわれるだろうが、そう考えるしか突破口はなさそうなのだ。さて、そう結論付けたら後はMAW社にイグニスの手

夕を届けなければならない。

私がそう思ってた部屋から出ようとした瞬間

『待ってください……』

そんな声が耳に届くと、私は思わず声が出た方向に振り向く。しかしそこには誰もいない。この部屋には私とエミリアしかいない事は、彼女が鍵を開けたことで確認されている。

更に言えば声と口調はエミリアの物ではないし、当然だが私のものでもない。パートナーマシナリーはまだ支給されていないから動かないし、私がMAW社で使っていたのは遠距離主体の戦いを補うGH494型だ。

鼻を擦ったのはあまりにも心地よい匂いを持つ花の香り……この

花の匂いを嗅いでしまえば、今までの花が意味も無いモノになってしまうのではないかとも思えるものだった。

そしてもう1つ……

「エミ……リア……？」

先程まで眠っていたエミリアが宙に浮かび上がっており、彼女の顔に幾何学的な文様が浮かび上がっていたのだ。そして彼女から金色のような輝きが放たれると、それが一箇所に集まって1人の女性の形となった。

流れるような金髪。

露出度が高い服に豊満な肉体。

背に太陽のような光輪を背負い、そこからも溢れる輝き。

そして何よりも……全てを慈しむ様な優しい表情。

正に『理想の女性』とも言うべき存在がエミリアの体から姿を現していた……

ようこそリトルウイングへ（後書き）

クラウチがやったような冗談は止めておきましょう。話が通じなかったら洒落じゃすみません。後バスクとの会話を原作から変えてみました。

ギユスターヴのPMは……先にも書いてるようにアレですのでwww

そう言えば皆さんが思い浮かべるチートって他にどんなものがあるのでしょうか？

真実と新しいパートナー（前書き）

1 1月2日に車に轢かれかけたデボエンペラーです。
漸くミカさん正式に初登場です。

2 話ではボツられ、3と4話じゃチヨイ役……

第1章最終話、ぜひごらんください。

真実と新しいパートナー

エミリアの身体から姿を現した女性を前にした私は警戒心を抱き、身構えるように対峙する。エミリアを媒介として現界している以上、私の行動次第で彼女に危害を加えてしまう結果に繋がるからだ。

『……貴方が警戒するのは分かります。エミリアを人質にするつもりは私にはありませんので安心してください』

彼女が沈んだ表情で私に向かって敵意は無い言う。しかし完全に信用する事は出来ないため、警戒だけは解かない。

「……何者だ」

端的にしか言わないが、いつでも細剣を抜く事が出来るように柄に手をかける。一方で彼女は私を宥めるように声を上げた。

『私はミカ。訳あって、この子に宿る意識のみの存在です』

「ミカ……だと？」

私は彼女の名に聞き覚えがあった。海底レリクスで私たちを襲った男がその名と花の名らしきものを口走っていたからだ。故に私はある名詞を彼女に向かって呟いた。

「テティの花」

『！？ 何故貴方がその花の名を知ってるのですか！？ 既に存在しなくなってから久しいのに……』

やはり彼女がああ男が言っていた『ミカ』なのだと確信した私は

右手に込める力を強くした。

「海底レリクスで私達を襲った男がお前とその花の名を言った」

『そう……ですか……』

彼女が何処か納得したような沈んだような表情で俯いていたが、直ぐに顔を上げて声を出す。

『ですが……それでもお願いがあります、……今は私の話をどうか聞いてくれませんか？』

彼女にその気は無いとは言え、実質エミリアを人質に取られている以上どうする事も出来ない。私はただ話を続けると言う事しか出来なかった。

『ありがとうございます。今の私の姿も状態も、既に失われた古の技術のもの……失われた技術を旧文明のものと言うのなら、私たちは「旧文明人」となりますね』

「旧文明……だと？」

流石に旧文明の話になると、私も興味はそちらに向いてしまう。少しは彼女の話に耳を傾けようと言う気にはなった。

『はい……途方もない過去に、この星を生きていた原初の文明を持ちつる人類……それが私たちでした』

「……成る程……レリクスもそこに存在していたこの炎魔竜も旧文明の遺産と言う事が……」

そう言って私は一枚のカードを手にする。それは私を魅了した存

在が描かれていた。

『はい、それだけではありません……貴方が持つ本当の力も……かつては旧文明の者達が持つ力でした』

我々の持つ力が旧文明の遺産……それは異能者なら誰もが最初に教わる常識中の常識。彼らの存在があったからこそ、私たちは彼らの力を使う事が出来るのだ。

それを自分達が最初から持つ力だと勘違いしている奴らは外部から流れ込んできた者たちか、異能者が国を支配していた時代を取り戻そうとしていた存在位しかない。

『この時代では“デュエルモンスターズ”と呼ばれ人々の間で親しまれ流行していますが、元を糺せば決闘の儀と言う悪しき存在を封じたり神々を祭り上げる王族が執り行う神聖な儀式……私たちも研究の合間を縫って祭りに参加したものです』

そう言っただけで彼女は過去を懐かしむような声で言う一方で、私は決闘の儀で封じられたり祭り上げられた存在に興味を持った。旧文明の神……どういった存在だったのだろうか？

『……では本題に入ってもよろしいでしょうか？ この時代の背景はエミリアの記憶から把握させてもらいました』

彼女の言葉に私は息を呑む。彼女の表情も本気のものだ。

『3年前、グラール太陽系を襲った危機……覚えていますか？』
「忘れるはずもない……SEEDの襲来だな？」

その言葉に彼女は頷き、その事を思い出すかのように顔を背けた。

『はい……それは、私達の時代でも起こったことなのです』

そこからは新事実とも言える証言が出てきて私は息を呑んだ。

旧文明を襲ったS E E D……そこまではいい。レリクスやスタリティアが対S E E D兵器でもある以上、分かっていた事だった。

だが旧文明を統べる王に対する反乱が起こっていたことには驚いた。当時の王……旧王を引き摺り下ろせば、今度は新王を名乗った者が旧王時代以上に酷い独裁が始まってからS E E D事変が起きた……決闘の儀で封じられた存在はS E E Dに汚染されたり封印が解かれたりして人々を襲い、更には旧王を指導者とした旧王軍が新王軍と戦争に入るわけで、旧文明は疲弊していったというのだ。

私は自然の内にビジフォンを起動してメモにとっていた。何しろ最大の情報提供者が私の目の前にいるのだ、既に彼女に対する警戒心など私には無かったとも言えた。

『それでも、私達はS E E Dの元凶であるダーク・ファルスの封印に成功しました』

ダーク・ファルス……レオンがかの英雄・イーサン「ウェーバー」と、幻視の巫女・ミレイ「ミクナ」……もといその姉であるカレン「エラと共に倒した存在か……」

『新王軍も旧王軍も互いに指導者を失ってしまい、これ以上戦争を続けることも出来なくなりました……しかし、その頃には既に三惑星の大地は戦争の傷跡が深く、更にS E E Dに汚染されており回復は不可能な状態でした……』

「……旧文明人の肉体も同様に、か……」

そこまでならただの旧文明人がどうして滅んだかの真相を聞いて

それきりなのだが……

「続きが、あるのか……？」

恐らく続きがあるのだろう。だったら態々エミリアの身体を借りて話す必要はないし、私達の前に姿を現すことすらない。

『……はい。このままでは人も星も滅亡するのは時間の問題でした……そこであの内乱で私たちに敵対した側の旧文明人達は賭けに出たのです』

「賭け、だと？」

『そう……その賭けの名は復活計画……大いなる時を超える自分達が蘇えるための計画です……』

復活計画。

その言葉に対して私は息を呑んだ。復活するだけの計画には無い不快なおぞましさを本能で感じ取ったかのように。

『コレから貴方にイメージを流します。私を含めた旧文明人はSEEDに対する強力な浄化をこのグラール全てに対して行い、三惑星を復活させ……』

彼女の言葉と同時に私の視界は闇に包まれ、まず真っ先に浄化され輝きを取り戻す三惑星が目映る。

『次に、新たな「ヒト」の素体を造り上げ、それを大地に放ちました』

続けて荒廃した大地に三組の男女がそれぞれの惑星に降り立つ光景が浮かぶ。

『……そして……汚染された自らの肉体を棄て、精神だけの存在となって永い眠りに突いたのです』

ミカ……いや、ミカを模した者から自分自身の精神体が抜けていく光景が浮かび上がった。まるでエミリアから姿を現す彼女のように。

『そう……新たに造り上げた「ヒト」が高度な文明を築き上げた時……』

そして最後に今のグラール……パルムの町並みの中を歩く人々の姿が映し出され

『その身体を奪い、復活する時まで』

その身体に黄金の光が吸い込まれ、かつてその肉体の主だった者の精神体が弾き出されて瞬く間に霧散した。

その光景を見せられた時、私の視界は瞬く間にマイルームに戻る。私はその光景に吞まれ、我に返ったときは額に手を当てて呼吸を荒くしていた。

『……忌まわしいイメージを見せてしまつて申し訳ありません。ですが現に計画は実行に移され、作り出された「ヒト」達は、高度な発展を遂げていきました。決闘の儀と我らの力を復活させ、旧文明人達の精神が眠る場所への繋げてはならない道を開く事が出来てしまつほどに……』

未だに驚愕している私を他所にミカは話を続ける。

『……もうお分かりだと思います。旧文明人達によつて生み出されたヒトとはヒューマンの事です。私達の文明が持っていた技術とは雲泥の差ですが、それで十分だとみなされたのでしょうか』

彼らが創り出したヒューマンがニューマン・キャスト・ビーストを生み出し文明を発達させ、『決闘の儀』を『デュエルモンスターズ』として復活させ、SEEDを退け亜空間研究を推進させて……

「要するに……私たちが築いたものを横から奪い取るというわけか……？ 自分たちは何一つ生み出していないというのに……？」
『……お恥ずかしい話ですが、その通りです……今、このグラールは一部とは言え旧文明人達の生み出した罠に狙われているのです』

あくまで事を起こしたのは一部の旧文明人だと主張するミカ。そ

の表情から彼女の言う事は真実だろうとは言え信頼する理由が無い。何故なら彼女もまた旧文明人なのだから。

「この際真実かどうかはどうでもいいが1つだけ聞かせてくれ。何故旧文明人の貴女がそれを私に話す？ しかもその様な言い方では計画を阻止してくれと依頼しているようにしか聞こえないのだが……」

『はい、私は彼らの忌まわしい計画を阻止したいのです……』

私の問いに迷わず答えるミカ。その理由を問いただす前に彼女が口を開いた。

『確かに私は旧文明人ですが、現代への回帰は望んでいません……』

更に彼女は今まで以上に真剣な表情で、私に向かって答えを紡いだ。

『私達は滅ぶべくして滅んだ。世界は次の世代に任せるべきなのです』

他のヒト達ならともかく、その言葉は私達異能者にとって信じるに値するものだった。我々異能者も影で生きる者、いずれ消え行く存在なのだから。

「……分かった、『世界は次の世代に任せる』と言う言葉を信じよう」

『本当ですか！！ ありがとうございます！！』

ミカはそう言って感謝の言葉を言った。とは言えまだ私には分か

らない事が在る。

「とは言え……まずエミリアに話せばよかったのに何故私から話し掛けたのだ？」

そう、最後にして最大の疑問だ。私に話さずとも、エミリアに話せば信じてもらえるかどうかは別問題だとして真っ先に話してもよさそうだったのだが……

『ええ……ですがこの子は心を閉ざしきっていて、私の声を認識してくれないのです』

「なるほど……確かに認識していれば、あの男の言葉に反応したはずだ……」

『どのようにして彼が私の姿と声を認識していたのかは分かりません……それとあなたから話し掛けた理由ですが……』

彼女が沈みきった表情でその言葉を紡ぐと、私は思わず息を呑んだ。

『それは……貴方が一番わかるはずだと思います……』

炎魔竜 レッド・デーモンズ・ドラゴン

腰に据えた細剣とナノトランサーから姿を消した武具
あの男と戦ったというクラウチとバスクの言葉

エミリアが言う『夢』と『現実』の境界線の矛盾

千切れた筈の左腕と両足が今こうして繋がっている事
そして

「……夢ではなく……私は……死んだ……」

その残酷なまでの真実

ようやく全ての点が線となって繋がり、1つの答えを導く。答えは至って簡単、全てが夢などではなく真実だったというわけだ。

『……………はい』

ミカもその答えに対して真剣な表情となって答えた。既に答えを出したとは言え、真実だと突きつけられると気が滅入る。

『……………貴方は一度……………炎魔竜を瀕死の身に宿し魂を込めた一撃を放って、その命を燃やし尽くし完全なる死を迎えました……………』

彼女も言葉を選んだのか間を置きながら真実を告げる。私があつた男によって死にかけたと言われるよりは幾分かましだ。

『その時、エミリアの強い願いによって発言した私のプログラムが貴方の身体を再構築しているのです……………』

つまり彼女のプログラムが途絶えた時、私は再び死を迎えるという事なのでは無いのだろうか。

「……………そう、か……………」

だが口に出したのは考え事ではなく先の自分は死んでいたと言う事実に対しての溜息のみ……………確かにエミリアが『夢』の一言で片付けようとするわけだ。

「……………ふあ……………」

そんな気の抜けた欠伸声がエミリアの方からすると、ミカの身体が一瞬消えかかる。どうやらエミリアが起きている時はミカの身体は維持できない造りなのだろう。

『……そろそろこの子が目を覚まします。詳しくはまたいずれ……』

そう言った直後にエミリアがのっそりと起き上がり、ミカの身体は瞬く間に消える。エミリアが腕を高く伸ばし盛大な欠伸声を上げた。

「……ん~~~~……ちよつと寝ちゃったかな？」

だが彼女は私の方を見ると驚いたような表情をして声を荒げた。

「……ちよつと大丈夫!? 顔色がすごく悪いよ!? マイシツプの説明は明日にするけどいいよね!？」

「……分かった……ではもう1回シャワーを浴びてから寝るぞ……」

そんなに酷い顔をしていたのか……そう思いよろめきながらドレッシングルームへ向かい扉を閉める。そこで私は服を脱ぎ、限界まで冷やしきった冷水を頭から気が済むまで被り始めたのだった。

暗いマイルームのベッドの上に転がって私はただあの海底レリクスでの出来事を思い出していた。

（突然心臓が熱を持って蹲っている間に取り残され、エミリアと出会ってレリクスを進んで、炎魔竜を手に入れて得体の知れない男と戦い……そして……死んだ）

単純にその言葉が突き刺さる。SEED事変が終わって、ウオザーブルグ事変で協会の幹部や一族の当主たちが拳って失脚して、仲間たちがまたそこで行方不明になって、MAW社の再建に右往左往して土台を造り上げて今に至る、か……

（まさかこの様な形で死に、復活するか……それに旧文明の復活計画……）

話を聞いただけでは荒唐無稽だが、旧文明人本人からの証言とかつて協会の一部が自分達が復権すると言う野望を持っていた事を思い浮かべると、そのような計画があっても不思議ではない。

尤も、そのような暴挙は全て防がれ首謀者やその一味は全員粛清され、残った人員も単純な傭兵や訳ありの存在は拳って条件付無罪。そして全員が条件を満たし晴れて完全無罪だ。

（……それに……死んだ、か……）

思い浮かべるのはあの日……Gコロニーが突然落下してきた時、私たちは拳って街のシェルターに逃げる羽目になり、自分達のリーダーが殿を務め……死んだ。

今でも仲間たちに彼の死を告げた時の光景を思い出してしまう……

『マジかよ……あのボスが死んじまったって言うのかよ!?』

カーツによってSEEDウイルスに感染してしまったレオンがMAW社のメンテナンスルームで驚愕の声をあげ

「そんな……嘘だ……そんなの嘘だ!! あたしは信じないよ!

!」
当時ある事情で謹慎中だったミサキが報告しに来た私を掴み上げ

「クソッ……クソッ!! クソッ!! チックシヨオオオオオオ

!!」

「飛鳥!! 落ち着けて!!」

アスカが叫びながら壁を殴りつけ、それをカールが泣きそうな顔で押さえつけ

そして

「……僕は認めないよ……あの人を殺しておきながら被害者面しているガーディアンズを、あの人を殺したイルミナスを絶対に認めない――！」

彼をミサキと同じかそれ以上に慕っていたゾディアは端正な顔を憎悪に歪め、ガーディアンズとイルミナスに対して滅ぼすと叫ぶ

「あの日を境に、私たちは袂を分かった……」

SEEDに汚染されたキャストと言う事で白い目で見られながらもガーディアンズに残る事を選択したレオン

パートナーと共にイルミナスを追う選択をしたミサキ

私と共にMAW社に留まり『三騎士』として救助活動を行う事になったカールにアスカ

突如私達の前から姿を消したゾディア

「そしてウオザーブルグ動乱でカールとアスカは些細だが致命的な考えの違いが切欠で殺し合い、そして行方不明になった……」

あの七人の内、今や一族に残っているのは私のみ。そう考えると私は深く溜息を吐く。

「……とは言え……」

死んだ者は冥界に行くだとか、河を渡るだとかなんだかんだと言われていたが、結局は何も見えずただただ真っ暗だっただけだ。

「大体、あの人にも会えなかったからな……」

まあ、彼と会ったとしたらミサキかゾディアぐらいだろう。そう考えた時、私の意識は暗闇の中へと沈む。
やはりそこには何も無かった。

そして翌朝、居住区のロビーフロアにて……

「おはよギユスターヴ……大丈夫？」

「……大丈夫だ……これ以上、わがママを言える立場でもないしな……」

朝見た時の表情は正に最悪といってもいいほどの状態だった。昨日よりかはマシだとは言え、快調には程遠い。

「ま、まあギユスターヴがいいって言うならマイシップの説明に

入るわね。昨日のうちに認証登録されたっておっさんが言ってたし、さっさと行こ」

そう言っただけで彼女が転送装置を操作すると、私達は瞬く間に何処かの船の操縦室へと移動した。

「……ほづ……」

我がMAW社が持つ社用マイシップは殆どが系列会社が製造した船だが、我が社のエリート（一般的な）が持つものよりも高そうな代物だった。

何せ立体映像まで流れるモニターにエンジンや燃料装置が現同盟軍でも使っている代物。我が社でもココまでの出力を持ったエンジンは開発しきれていないのが現状なのだ。

「どしたのギユスターヴ？」

「いや……社用の船にしてはずいぶん立派だなと思っただけだ」

私の言葉に対して彼女も顎に手を当てるが、直ぐに答えを出した。

「……ま、あたしも今まで仕事とかに興味なかったしね……ココの中央端末で依頼を受けて、現場へ向かう時はコレを使えばいいってこと」

彼女の説明を聞く私だったが、その様子に対して彼女が怪訝そうな声を上げた。

「……何かあったの？ あたしが昨日あんたの部屋で寝てから様子変だったじゃん」

「……いや、海底レリクスでの件について考えていただけだ」

海底レリクスでの出来事について考えていたのは嘘ではないが、それを聞くとエミリアはすごく嫌そうな表情をした。

「あれ夢じゃん……いつまでも夢の中の出来事を考えてたってしょうがないでしょ？」

「では聞くが私の存在は夢ではないのか？ お前の言葉が真実なら私も夢の中の登場人物だということになるぞ」

私がそう言うとエミリアは答えに詰まったのか、顔を俯かせて声を上げた。

「んー……まああたしとあんたっておっさん達に助けられたわけでしょ？ それがあんたも現実の人間だって言う証拠じゃん」

「……そうきたか」

「それにデュエルモンスターズのモンスターと融合したり、多くの武器がいきなり現れて発射されたり、死なないヒトなんているわけないし！！ そんなヘンテコ出来事は全部夢よユ・メ！！」

一応筋は通っている。これ以上話を進めていったとしても水掛け論になってしまうな。

「まあ、これからあたし達って仕事仲間になるわけじゃん？ でもあたしの方が先輩なんだから敬うように……」

エミリアは私を見据えるが、直ぐに溜息をついて首を横に振った。どうしたのかと聞く前に彼女がいきなり声を上げた。

「でもま普通に接した方がいいか、うん」

彼女の声に納得はいかないが私も頷く。そして一通りこのリトルウイングの施設の説明を受けたところで、彼女がいきなり疲れたような声を上げた。

「それにしても疲れたわ……昨日は初めての仕事だったし、地震に巻き込まれて取り残されるわ、ヘンテコな夢は見るし……」

「まあ、な……」

私は淡々と言葉を紡ぐ。私にしてみたら全て現実だったのだが、寝た子を起すほど暇ではない。

「それにさ、あたしあんたには感謝してるんだよ……あんたがいなかったらおっさんが来るまで生きていなかったと思う」

「そこは過大評価しすぎだな」

「それに、なにより、あたしの言う事信じてくれたし……ま、殆ど夢だけどそこは本当のことでもいいよね……？」

否定する理由は何処にも無い。私は素直に頷く事にした。

「ま、これからは一緒に仕事する事になるんだろうし、あんたの話も聞かせてよね!!」

そう言っただけで彼女はウインクをして、私に指を突き刺して笑いながら言った。

「なんたつて、あたし達は『パートナー』なんだからね!!」

その言葉を聞き呆氣に取られる。

そう言ってくれたのは一体いつ振りだっただろうか？

ウォザーブルグ動乱以来仲間は殆どいなくなり、対等な関係で話
が出来るのはガーディアンズにいたレオンや兄を含めてMAW社で
も両手で数えられる程だった。

そんな私に新しいパートナーだと宣言する人間が出来た。

対等な関係で接し、私に対して砕けた口調で物を言う。そんなヒ
トなど殆どいなくなったのだ。

「そうか……」

そして私は彼女に向かって近づき、頭を叩きながら言った。

「だったら仕事が嫌だなんだとか言わずに精進しろ」

そう言いながらマイシップから中央ロビーへ向かう……と言つよりそこしか行き先を設定されてなかったから操作は楽だった。後ろの方でエミリアが子ども扱いするなど叫んでいたが聞き流した。

クラウチに自分のパートナーマシナリーがあると言い、MAW社にいた部下に送ってもらおうよう通達する。その途中でバスクとパートナーカードを交換し、カフェに行つて3人の男女と会話する。その道中、クラッド6内のショッピングエリアを散策する内にカードショップを見つけてそこに入る。やはりそこは私にとって落ち着く空間だった。

「ふむ……」

グラスケースに収められたカードを見据え、私は掌からあのカードを取り出すと小さく笑った。

「たとえケースの中に入つたカード全でと、このカードをトレードしてくれと言っても交換しないがな……」

グラスケースの中に入つたカードの内、『F・G・D』や『E・HERO アブソリュートZero』と言つた何枚かは絶版物の高級品扱いされているカードだ。私にとってこのカードはそれら以上

の価値を持っているのだ。

「やあやあ、この店は初めてですか？」

そう言って姿を現したのはエプロンを身に着けた1人のヒューマンだった。短い黒髪に黒目、美形と言わないがそれでも平均以上の顔立ちは持っている。

「ああ、貴方はこの店の？」

「ええ、この店の店員ですよ。まあ、店員としても新人さんですがよろしく願いしますね」

手を差し出す店員に私も手を差し出して握手を行う。そして私は再び店の散策に入った。

真実と新しいパートナー（後書き）

さて、漸く第1章を終える事が出来ましたか……次回は幕間で彼のPM初登場です。

PMは他の人々と違ってギャグにしかありませんが……一応海底レリクスのその後も踏まえてやっていきたいと思っています。

後日談と観光と邪気眼と（前書き）

すまん、完全なギャグは無理だったorz

本日は

フレツフレツ、邪気眼王

転生者1のその後

ギユスターヴさん家のご近所観光（表編）
の三本です。

そのうち完全なギャグを……腹筋崩壊するかのようなギャグを！！

後日談と観光と邪気眼と

あたし、あの日から本当にギユスターヴの事が身近に感じられる存在になったんだよね。

リトルウイング所属傭兵（古参だが見習い） エミリアーパージ
ヴァル

まあ、人それぞれと言うし誰もが同じような趣味を持っているわけではないからな……

リトルウイング所属傭兵（新入りだがベテラン） バスクーウギン

すまん、本当にこれ以上言わないでくれ。

リトルウイング所属傭兵（新入りだがMAW社私設特務部隊長兼任） ギユスターヴーウィンストン

私がリトルウイング所属になってから早数日。既にレッド・デーモンズ・ドラゴンのデータと、そのついでに破損したイグニス及び改良案はMAW社本社に送りつけ……それと引き換えに私の手元にPMが届いてしまった。

「……………」

そして今日はM A W社の依頼で再びあの海底レリクスの調査に赴いていた。メンバーは私にエミリア、仕事が無かったと言っていたバスクと先日届いた私のP Mの4人。私とバスクとP Mが前衛、エミリアが後衛を勤めていた。

本当はP Mを連れて行くときは私単独で仕事を行うのだが、エミリアたちも連れて行く羽目になってしまったのが運の尽きだった。

「……………」

バスクは無言のうちで私の方を見据えるが即座に視線を逸らした。とは言え、コレはまだS E E D事変前から使用しているP Mなのだ。S E E D事変以前は単独行動を主としていたのでP Mとのアシストを行っていたし、異能を隠す意味でのパートナーでもあったのだ。

有能なのは認める。だが私はそのP Mをあまり多用しなくなかったのだ。

「奈落の火花が俺に呼応する……………破壊神の鉄槌に身を焼かれよ！」

そのP Mの言葉を合図にその腕から炎系のテクニク・ファイエが放たれる。何やら奇妙な台詞が発せられたが発せられたがそこまではない。そこまでなら二一スなり個性なりで気にする必要は無い。

「……………ぷっ」

エミリアも何だか我慢していた様だったが、遂に限界が訪れたのか左手で指を私に指しながら大声で笑い出した。

「アハハハハ！！ 何それ、もう限界！！」

それを切欠にバスクも右手で顔を隠しながら小さく笑い声を上げる。私はあまりの羞恥心に顔を壁に向けて背けるしかなかった。

「ふむ……このレリクスも地上のレリクスと柱が同じだな……とは言えグラールで発見されたレリクスの建築パターンはほぼ同一……恐らく絶対君主制による治世だったかと推測されるな……」

私はミカに会う前から専門書で読み漁った知識を述べながら前へ進む。眼前から襲い掛かってくる原生生物も心臓を突き刺して絶命させ、タヴァラスと発表された高機動型のスタリティアはクラッド6で買ったランクC - のGRM製ハンドガンの『ハンドガン』で射抜く。

「……やはり威力は弱いか……リトルウイングでの私が持つランクは低いからな、レンタル品として支給されるものが弱くても仕方ないな」

元が炎魔竜との交戦で破壊された以上、文句を言うわけにも行かずハンドガンの感想を述べる。バスクも格闘術や実剣でエビルシャークと言う新種の変異生物を倒していき、エミリアもテクニックでアシストしていった。

「それにしてもリュクロスから手に入ったデータにも載っている生物が何故海底レリクスに出没しているんだ……？ ふむ、気になるな……」

私がエビルシャークの死骸を見据える。そんな中、再びPMの機械音声が響き渡った。

『闇夜の風に耳を傾けよ……届け、疾風の魔弾!!』

銃声が響き渡りしばらくしてから再び訪れる沈黙。そして間を置いてから盛大に響くのはエミリアの笑い声。

「アハハハハハハハ!! やっぱ面白い!! ギュスターヴってこんな趣味してたんだ!!」

『うむ、ヒトは見かけによらないと言うがまさかココで見られるとはな……』

「私の趣味ではない!! 断じて私の趣味ではない!!」

バスクも顔を俯かせ押し殺していた笑いを隠し切れずに漏らし、一瞬だけ異能を解放しようかとも考えたが直ぐに自制を聞かせる事に成功した。

「えー、結構かつこいいと思うけどなー『奈落の火花が俺に呼応する……破壊神の鉄槌に身を焼かれよ!!』とかさ」

私が反論するより先にエミリアが格好をつけながら右掌を開いて左から右へ移動させ、更に続けてナノトランサーから取り出したハンドガンの銃口を別の方向に突きつけながら続けた。

「『闇夜の風に耳を傾けよ……届け、疾風の魔弾!!』とか言ったり!!」

それを見たバスクが突然先程通った通路の方へ走り出すと、しばらくしてから何やら笑い声が響いてきた。

「……エミリアが止めを刺したな」

私は小さく今までの意趣返しに反撃をするが、一方のエミリアは含み笑いを浮かべながら私に向かって言い放った。

「えー？ 確かに止めはあたしが刺したけど、大部分ギユスター
ヴさんのせいですよー」

「なぜそうなる！！ そもそもあれを選んだのは私ではなく……」
「くっ……どうやらもう一人の俺が……暴れたがっているようだ
……」

反論する私を他所に再び機械音声が響くとエミリアが盛大に爆笑し、私は頭を抱えPMを睨みつけた。

『ふっ……そこのおちびさんと黒き機械兵には力が足りなかった
みたいだな……俺の言霊の意味を理解せず、ただただ笑い続けるし
かないとは……』

本音を言えば私も彼ら同様こいつの言う『力が足りなかった存在』
になりたかった。他の面々はある意味ではマトモなPMだった（ア
ス力だけ何故か外見が全くの別物、人型ですらなかったが俗に言う
アタリだった）のに、私だけこの様な大ハズレを引いたのだ。

『気にするなマイマスター、貴方は我が言霊を聞いても笑わなか
った。つまり貴方にはそれだけの力があると言う事、むしろ誇るべ
きだ』

盛大に溜息をつく。全く分かっていないPMに呆れてしまったの
だ。と言うより……

「……まずはその締めりの無い風体をどうにかしろラドル」

G H 4 9 4 型パートナーマシナリー・固体名ラドルで本人曰く精霊に与えられた真名を『ラドクリフ』シユヴァイサー』と言う。

青い『リュックサック』と言う背負い鞆を模した骨董品を背負った黒いぬいぐるみのような外見を持つ P M。

特徴は思春期に患う病気からくる独特の語彙力。

極めつけに言語機能を切れば即座に全機能に異常をきたす致命的なバグと、P M デバイスの上書き防止機能と言うありがたくない特典付だ。

閑話休題。

エミリアとバスクが爆笑し続けても仕事にはならないので、彼女達を黙らせ仕事を再開させる事にした。そしてその道中、私とエミリアがレリクスの仕様について話し合い、あの男と戦った広間でスヴァルティアと言う斧を持った巨大な人型スタリティア……炎魔竜を封じていたモノと同型の敵が襲い掛かって来るのに対して戦闘を開始する。

「くっ!!」

私は手にしたシールドでタイミングよく防御してスヴァルティアが行った攻撃の余波を跳ね返し、すかさず懐に入って胴体部に傷を作らせる。

『はあっ!!』

『ここを超えて待つのは……未知なる強さの世界!! コスミツク・ソウル・レボリユーションツツ!!』

バスクがドリルの突いたナックルで傷口を抉り、ラドルが手にしたソードで真上から両断する。

「とどめえ!!」

エミリアが最後の一発と言わんばかりにフォイエをロッドから放つ。傷口から炎が進入し、スヴァルティアが斧を取りこぼして甲高

い音を発すると、膝を屈して地面に倒れこんだ。

「よしエミリア、お前はMAW社の調査チームを呼んできてくれ。後護衛にラドルをつけておく」

「うん。わかった」

『フツ……光を消さぬのも俺の役目か……承知したぞマイマスタ
ー』

笑いをこらえたエミリアとラドルは来た道を戻っていき、彼女らが見えなくなったところで私はスタリティアの残骸を見据えて考える。

「やはり……手緩いな……」

そう思ってしまうのは、やはりあの時の炎魔竜とこの細剣を放った男との戦いのせいなのだろう。確かにスヴァルティアも普通の傭兵が戦うにしては強敵だったが、どうしても見劣りしてしまうのだ。

『……ギユスターヴ……やはりお前もそう思ったか』

バスクも私の言葉の真意に感づいたのか顔をこちらに向けて話し込む。

「攻撃は斧を振り下ろす、斧を掲げて飛び掛る、突進する、斧を突き刺して地震を起こし雷光を放つ……コレぐらいしか思い浮かばんな……」

それでもエミリアにとっては脅威だ。先日聞いた話だが、1日で逃げ出したとは言え彼女はクノーによる鍛錬を行っており基礎は出来ていると聞いた。

「とは言え、だ……」

私は1枚のカードの事を思い出して考える。それは言うまでも無く炎魔竜ことレッド・デーモンズ・ドラゴンの事だ。

あのカードはこの海底レリクスで私が入手したカードであり、デュエルモンスターの製造や販売を担っている一社でもあるMAW社のデータベースにもそのカードの名は載っていないかった。

まさかと思い蔑称であろうと思っていた『250円竜』と言う名称で調べても当たりもしなかった事に胸をなでおろしたのはココだけの話だ。

だと言うのに、あの男は炎魔竜の事を知っていた。それだけではない、エミリアですら自覚していなかったミカの事まで知っていたのだ。

情報通にしては異常な情報の質……一体何者なのだろうか？

『あの男の事で何か考えていたのか』

バスクがそう言うとは私は頷く。私は手にしたカードの事やエミリアの事を話すと、バスクもそうかと言って私に情報を話した。

『ああ……お前と同じく面識こそ無いが、奴は俺やクラウドの事まで知っていたからな……クラウドはともかく俺は傭兵としては無名だが、お前は『三騎士』として有名だったはずだろ？』

一応そうなっているようだ。私もその事を知ったのはSEED事変の後でありレオンがその件でからかっていた事は覚えている。

……二度と三騎士時代の衣装を身に纏うと言う意思は無いがな。

『気にならないか？ リトルウィングを取り仕切っているクラウド

チはもちろん、無名の傭兵である俺にエミリアの事は知っていたが……都市伝説にもなっていた『三騎士』であるお前は知られていなかった事に』

その言葉に私は息を飲んだ。確かにあの男が情報通なら私や『三騎士』の事を知っていてもおかしくは無い筈だが何も答えなかった。

「……言われてみれば気になるが……」

いくら伝説とは言え、英雄・イーサン・ウェーバーに比べたら私たちの名は霞んでしまう。

何しろ最初にHIVEに突入してそれを殲滅、続けて前総裁暗殺未遂に極め付けが幻視の巫女との恋愛劇だ。比較対象を間違っている。

「別に私を知らなくてもおかしくは無いだろう？ 言うてはなんだが、やってきた事はMAW社付近のSEEDを浄化していたり、犯罪者の取締りぐらいだ」

『……確かにそうだが……』

バスクも腑に落ちない表情を浮かべ、暇つぶしと言わんばかりに私たちは広間を散策する。その途中で異臭がしたので発生源を調べてみると、見覚えのある赤いコートと紫色の髪をした男がうつ伏せになって倒れていた。

「む……」

コイツに実質致命傷を負わされたのは記憶に新しいので細剣で足の裏あたりを突いてみても反応が見られない。思わず“それ”に近づいてみたが、私は思わず口元を手で覆い表情を顰めてしまった。

何故なら男の身体は何故か腐っており、目のあった所は既に穴だけになっており、鼻もつぶれていた。よく見れば所々が何らかの原生生物に喰われた痕があり、腕に至っては骨までも見える始末。

最早生死を疑うまでもない。心臓を貫いても死ななかつた男が、何故この様な形で死んでいるのか……後でミカに聞く必要が出来てしまったな。

「……」

よく見てみれば周囲には蠅らしきものが飛び交い、蛆も右目の下から湧いており傭兵業をやっているもきついものはきつい。吐き気もしたから口も押さえておく。

『……大丈夫か？』

バスクも気分が悪いのが声色が普段と違っている。エミリアに見せるわけにもいかないが、タイミング悪く彼女が調査団を引き連れて戻ってきてしまった。

「ただいまー……あれ？　どうかしたの？」

エミリアの怪訝そうな顔に対して、バスクが私に向かってエミリアの方へ行けと首を動かす。仕方がないと言わんばかりに私は彼女らに近づいた。

「エミリアか……奥の方へ進むぞ」

「え？　ココで調査とかしないの？」

「一応ココの安全は確保されている。私としてはココから奥の方が気になってるんだ」

炎魔竜のあつた広間と逆方向にあつた階段があつた場所……そこを下りるのは遭難の可能性を踏まえ断念したが次に進むのはそちらしかない。

横目で確認するとバスクと運悪く見つけてしまった調査団のメンバーが死体の処理をし、調査団の何名かが死体を運び去っていったのが見えた。

ラドルは私の様子を見て「やれやれ」と言わんばかりのポーズを決める。正直言つてそれが腹立たしい。

「ふーん……まあいいわ」

エミリアがそんな事を言つと私たちは奥へ進む事になった。そして彼女が離れた隙にラドルがポツリと私にしか聞こえないように呟いた。

『いたいけな少女に死人の香りは相応しくない、とでも？』

「やかましい」

私はそんな事を言っていたが、調査団のリーダー格の青年がこちらへ向かつて声を上げた。

「あ……ギスターヴ殿、奥へ向かうのですか？ あそこは途中で落盤が発生したのか、通路がふさがっていましたよ？」

「……何だと？」

私が彼……調査団のリーダー兼MAW社私設特務部隊の副隊長に向かつて声を上げた。今回の調査団は殆どが以前私が所属していた部隊の隊員であり、私の部下だった連中だ。

「ええ。貴方が所有していたデータを元に散策していましたが…

…途中の分岐路で何らかの戦闘行為があったのか戦闘行為による落盤で道がふさがっていました」

それを聞き私といつの間にかここにいたバスクもあきれ返った表情をした。レリクスで破壊行為に及ぶ阿呆がいたとは驚きだったのだ。

「現在左の通路を中心に発掘作業を再開していますが……どちらにせよコレで貴方方の依頼は終了となります」

これ以上無理強いしても反感を買うだけ、か。今の私はMAW社の私設特務部隊長ではなくリトルウイングの……それも新人傭兵なのだからな。

「了解した。では終了手続きを取りたい」

「それは地上に出てからお願いします。今回は弊社のグラディウス の好意でホテルを用意しておりますので、そこでお休みになられてください」

部下であった男がそう言う和我々はホテルへと向かう事になった。エミリアはホテルに泊まれることを喜んでいたが、その道中で彼は私に向かってエミリアには聞こえないよう謝罪した。

「申し訳ありません隊長……」

「……気にするな。今の私は一介の傭兵であり、お前達への指揮権は無い……今はお前が部隊長なんだぞ？」

「いえ……時が来れば直ぐにお返ししますよ」

そんな会話を交わしながら私たちは転送装置で地上へと向かった。

そして地上…… M A W 社のお膝元でもある『フィランディア・シテイ』の高級ホテルの一室にて私はエミリア…… 正確に言えば私の部屋に遊びに来た彼女が眠りこけ、代わりに姿を現したミカに対して問いかけた。

「あの男が死んだ原因について何かわかるか？」

『貴方の話では彼は不死身だと言いましたね…… もしかしたらですが、それは肉体に限ってはと言う場合かもしれません』

彼女が言うには精神の不死と肉体の不死…… そして不老は全くの別物であると言う考えだ。現にミカの肉体は滅んだが精神はこうして今も現存しているため納得がいく仮説だ。

ふと頭によぎったパルムに伝わる昔話の1つに神に対して死なない身体を要求した男の話を彼女に教える。

それは遙か遠いところのお話

美しい女神を罫に嵌めて捕まえた王様は『1度だけ願いが叶えてやるから私を汚すな』と言う彼女の話を聞き、「傷を負っても病を持っても死ぬ事のない体にしろ」と願って神はそれを躊躇いも無く承諾する。

男は歓喜し欲望の限りを尽くしたが、ふと手を見据えると皺だらけになっている自分の手を見てしまう。慌てた男は女神を呼び出し、

自分の身体が老いていく事を問いただしたが彼女はこう言った。

『お前が願ったのは「死ぬ事のない身体」であり、「老いる事のない身体」とは聞いてない』と。

その証拠にと女神は鏡を差し出して皺だらけになった男の顔を見せ付け、男は醜くなつた自分の顔に絶望してしまふ。命を絶とうとするが死なない身体のため死ぬ事ができない……『壊れる事の無い心』を渴望していなかったため心が壊れ考える事を止めても肉体はそのまま残り見世物にされ続けたが、徐々に腐っていき不快に思つた人々に燃やされたと言う。

『肉体の不老不死と精神の不死ですか……それらもかつては旧文明では研究されていたものです。恐らく貴方が知っている死なない王様の話も私達の研究の内容が漏れてしまい、その研究を良しとしなかつた方々が戒めのための話としたのでしょね』

「ふむ……」

『それと実はあの子が願つたプログラムは、敵対者に対する緊急迎撃用のプログラムでもあるので敵意を持った存在を1人残さず消滅させる事が出来るのです。ですが不死の肉体を持っていたのであれば、肉体は滅びず精神だけが滅んでしまつたのではないか……そして精神が滅び不死の契約が途切れたのではないかと私は考えているのです』

精神が滅んだだけで肉体が腐敗していくのはあるのか、と言う疑問もあつたが彼女が言うように不死の契約も精神が壊れた事によつて契約とやらが破棄されたのかどうかはわからない。だが1つだけ解る事がある。

「あの男は“死んだ”……二度と復活する事は無い……」

その単純なまでの事実……それだけだ。まあ、かつて死んだ私が

言うのもおかしい話だが……あれで復活したら今度こそ我々異能者の手で処分するしか道は無く、今の私には彼らを指揮する事など出来ないから上に任せておくしかない。

「まあ、その話はもういいだろう。それでもう1つ聞きたいことがある……お前はあいつの事を知っているのか？」

「……いえ、今の彼らと接点を持った事はありません。その者の肉体を乗っ取っているのではないかと考えた事もあったのですが、感じられた気配は1つだけ……それにグラールに残った旧文明人の大半は私と同じ考えを持っているのです……」

SEEDや敵対していた側に恨みを持っていてる者を除いて、ですが……彼女はそう締めくくる。

「となると……ますますわからん」

バスクやクラウチの事を知っており、ミカや彼女がエミリアに憑いている事をあの男が知っていたのは何故だろうか？

そう考えているうちにミカの身体が消滅し、入れ替わりにエミリアが目覚めました。

「ん……ベッドがふかふかで気持ちよかったな……」

「……第一声がそれかエミリア」

私は呆れながら彼女に向かってそう言ってやった。

その翌日……私たちはフィランディア・シティの一角にあるショッピングモールを中心に散策していた。

理由は観光……フィランディア・シティはMAW社の本社がある都市でありダグオラ・シティと比べると小規模だが、店は並んでいる方だ。

身も蓋もない話だが、本来私達の依頼はあの海底レリクスの奥深くまで調査する事だったのだが先の通行止めの影響もあってキャンセルになってしまった。

その結果、埋め合わせの為にフィランディア・シティの高級ホテルに泊り込み、今日は観光するためにここに来ているのだ。

とは言え、フィランディア・ショッピングモールは現在資源枯渇の影響もあって閉じている店が多く、残った店も何とか常連のおかげで営業できているという有様だ。

「まあ、最大の原因は資源枯渇なんかじゃないんだけどなあ……」

本日の副隊長は非番であり、服も私設特務部隊の制服ではなくジャケットにジーンズと言う完全な休日スタイルだ。言葉遣いも素の口調となっている。

『最大の原因？ それは一体なんだ？』

「……君たちに文句言ってもしょうがないがな……フィランディア・ステーションに俗に言う駅ビルが建っちまったんだ……それで客足が遠のいてしまったんだよ……」

「本当にあたし達に文句言ってもしょうがないじゃない……」

各地を移動し、今はミュージックストアで買い物しているエミリ

アが言うが、その代わりと言わんばかりに私が言葉を進めた。

「最大の原因の駅ビル……そのオーナーがスカイクラッド社なんだがな……」

「スカイクラッド社って……うちの親会社じゃん!？」

『それは文句の一つや二つも言いたくなるな……』

私の暴露にエミリアは啞然とし、バスクも顔を抑える。まあ品揃えも豊富であり、値段も手が届く値段……どちらに流れるかは自然の理だ。

『まあこう言った寂れた商店街に掘り出し物があるのはよくある事だし悪い事だけではないぞ？ 俺の手に量産品と言う言葉は似合わないし、それなりの“格”は欲しいからな……』

「はいラドルくん、痛い事言わないでねー。ぶっちゃけフィランディア・ショッピングモールが寂れて大変な事になるのってMAW社だからねー」

本当に色々な意味で困るからな……とは言え、先程さりと重要な秘密を言ってしまったなコイツ……

「？ 確かフィランディア・シティにはデパートとかあるんですよ？ そこは潰れても大丈夫なの？」

早速食いついてきた。まあ、こういった事態の為に表向きの理由は既に用意してあるから問題ないが……

「大丈夫なわけが無いだろ。デパートで使えるポイントはショッピングモールで手に入るんだ」

『ふむ……とは言え我々が止めてくれと言ったところでな……』

エミリアの疑問に私が答え、バスクが今の現状を考える。とは言え止めると言ったところで関係が悪化するだけだ。

「流石にそこまでしてもらう事はないさ。大体MAW社はスカイクラッドと喧嘩売るところじゃ無いんだしな……」

まだトラブルが解決していないからな……先代め、身内のゴタゴタで隠居したくなったのはわかるが、後始末だけでもやってくれ……！！

「まあ、後は俺らで解決しますしね……っと、そろそろ時間が……」

そう言って副隊長が私に腕時計を見せる。一応会社の依頼と言う事にしてあるし、既に外泊すると言う報告はしてあるが、限度と言うものもある。

「そうか……そろそろ戻るぞ、エミリア」
「待ってて！！今メセタ払ってるから！！」

確かに今エミリアは会計を行っている最中だ。私も流れている曲を聴き、聞き覚えのある声を聴く。

激しい曲調に歌詞、ドラムやギターの奏でるロック。私が好んで聞く人々を静めるクラシックとは対極となる人々を熱狂させる曲だ。

「ふむ……」

しばらく聞き入っていたが、エミリアがこちらへ戻ってくると私も店を出る事にした。

『やはり俺にはこういった曲は合わないな……やはりこう、何かを呼び出さんとする曲の方が……』

ラドル、いい加減お前は黙ってる。

後日談と観光と邪気眼と（後書き）

瞬様を見習って今回からキャラや作品に関する質問及び“敵側の”転生者を受け付けます。

実は敵側の転生者もネタが尽きそうなので自分が「これはひどい」と言いたくなるような奴をお願いします（遊戯王をクロスさせた時点である意味トーンでもキャラになっちゃったのが1名……）。

敵以外と指定した場合は、問答無用でモブキャラもしくは外伝キャラ（どっちかって言うところ日常変）にまわしますのでご容赦を。

また採用不採用は作品で発表しますのでご容赦を。
ではまた次回。

用語集その1

ビジフォンに用語が更新されました。

ネタバレになりますのでストーリーをお読みになってからこの項目をお読みください。

また、原作で出てきた人物や用語については割愛しますのでご了承ください。

【人物】

ギユスターヴ・ウィンストン

この物語の主人公。20歳。

パルムに本社を置くアミューズメントを中心とした総合会社であるMAW社の社員でもあり私設特務部隊の隊長を勤めている。

SEED事変では仲間と共に自警団『三騎士』を結成し、3人しかいない戦闘メンバーの一角を担っていた。

旧文明の研究が趣味で、SEED事変前までは旧文明テクノロジーの研究を主にしてきた。

服装はエスプレンドスカラー（黒地）を用いていたが海底レリクスでの戦いでズタズタにされて以来、リトルウイングにてCUBIC STAR製の新製品・パニッシュジャケットを譲ってもらいそれを着ている。

グラディウスⅡウインストン

ギユスターヴの実兄でMAW社代表取締役。37歳。

決闘中の問題になっていたデュエルディスクから投影された鮮明すぎる実体化の対策に身を乗り出し、ディスクからの情報を擬似的なVR空間でのみ実体化させそれを視認するための装置『VRゲイザー』を開発に成功した。

服装はエスプレンドスカラーをより豪奢にしたもの。

【団体】

MAW社

パルムに本社を置くアミューズメントを中心とした総合企業。

元々は軍事企業だったがカードゲーム「デュエルモンスターズ」をプレイするための装置である「デュエルディスク」を開発して以来、アミューズメント事業に転向していった。

またデュエルモンスターズ販促アニメである「遊戯皇」シリーズを製作しているアニメ製作会社等多くの子会社を持っている。

『三騎士』

SEED事変の際、MAW社に組織された自警団。

本来『三騎士』とは戦闘を行っていた3人の総称だったが、それがそのまま組織名として浸透していった。

SEED事変が終結してからは活動も縮小化し、ウォザールブルグ動乱にて2人が行方不明になったのを切欠に自然消滅した。

【技術】

デュエルモンスターズ

グラール規模でブームとなっているカードゲーム。

かつては知る人ぞ知るカードゲームだったが、MAW社がVRを用いた投影システム搭載型の装置『デュエルディスク』を開発させて以来ブームとなった。

一説によると旧文明で行われた儀式がこれに似ていると言っ記述はあるが、SEED事変の影響もあり資料が少ないため学会から重要視されていない。

【旧文明】

“旧王”

かつてグラールを支配していた旧文明の王の一人。

独裁を強いていたがそれを憂いた“新王”が革命を起こし王位を追われた。

だが“新王”が王位についた途端、自分以上の独裁を行ったため自分を中核とする反抗勢力が生まれた。

SEED事変時に“新王”と相打つ形で死亡している。

“新王”

かつてグラールを支配していた旧文明の王の一人。

独裁をしていた“旧王”を廃立させたものの、今度は自分が旧王

以上の独裁を行った。

故に“旧王”を立てた反抗勢力と戦い、S E E D事変が起きた中でもそれは続いた。

彼もまた敵であった“旧王”と相打つ形で死亡している。

【異能者】

異能者

かつて旧文明で悪しき神々を封じたり祭りを盛り上げたりしたヒト達。

今ではデュエルモンスターズに描かれた魔物や魔術に畏を駆使して戦いを行う存在でもあるがその数は極僅か。

500年戦争の際はパルムを陰で操ると言われており、ウォザールブルグを本拠として活動していたが数の差で真つ先に敗れた勢力となつてしまい、『異能者狩り』と言う事態を招いてしまう。

今では知るヒトも殆どおらず、異能者たちもそれを隠して生活しているため表舞台に出る事は殆ど無い。

【武器】

リゾネーター

シャドウーグ

クバラ製・ 5・B

MAW社製のものであり、デュエルモンスターのモンスター『
ダーク・リゾネーター』を模したシャドウーグ。

極稀に「リゾ」と鳴いている光景が見られる。

『細剣』（正式名称不明）

セイバー

クバラ製？・ 13・S

海底レリクスでギユスターヴを襲った男が弾丸の様に放った武器の一つ。

ギユスターヴの腕を射抜いたが、彼が召喚したダーク・リゾネーターの尽力により引き抜かれた際、武器を失っていた彼によって利用される。

クラウチによって救助された際、彼によってこじつけに等しい理論で所有権を押し付けられた。

それ以来異能を使わない状態のギユスターヴの主武装になりつつある。

形は騎士達が使ったようなエストックの様な形をしており、貴族のような風貌を持ったギユスターヴに似合った武器となっている。

また彼を襲った男はこの武器の事を『宝具』と呼んでいたが……？

【エネミー】

レッド・デーモンズ・ドラゴン

海底レリクスに封印されていた竜。

その腕はあらゆる守りも打ち砕き、冷たき氷をも溶かす。

紫髪の男

クラウチの過去を知っていたヒューマン。

不死身の肉体を持ち、武器を弾丸の様に撃つ力を利用してギユスターヴを殺そうとした。

用語集その1（後書き）

これから章の終わりごとにこの様な用語集を追加していきます。

入れない方がいいと言う方はぜひ掲示板の方へ来てください。

借金取り（前書き）

漸くメインで活躍するe・go!作品のキャラを出せる……
コレでギョスターヴの出身も分かるかも!?

借金取り

夢を見ている

それはまだS E E D事変の時、まだ『三騎士』を結成する前のこと……

その日、私は他の異能者達と酒場でS E E Dを退けた祝賀会に参加し、皆が酔いつぶれるなり疲れるなりして寝静まった時の事だった。

沈黙が支配する闇の中に悲しげな旋律が響く。その音に目を覚ます羽目になった私は発生源となっている外へ出向きしばらく歩くと壁に寄りかかっている白髪の男性ヒューマン……仲間の1人であったアス力を見つける。

彼の近くにあるのは今宵の戦いで死に浄化された人間達の……異能者も傭兵も巻き込まれただけの人間が眠る簡素な墓場でもあった。さしずめ今流れている曲はアス力が死した者達へ捧げる鎮魂歌といったところか。

曲が終わり、アス力がハーモニカから口を離すと漸く私の存在に気付いたのか驚いたような表情をした。

「ギユスターヴ……」

「意外だな……お前にこのような特技があつたとはな……」

私が覚えている限り、S E E D事変が起きる前のアス力是我が一族の女性に罹る呪いを解くための研究を中心に自分の身体を鍛えるための鍛錬、カール達と共に行動していたか彼らにせがまれてデュエルに付き合っていたかのいずれかしかなかった。

そんな彼がハーモニカを吹けるという意外な特技があつた事に私

は驚いた。とは言え彼は私の方を見ずに淡々と言葉を紡ぐ。

「別に……ただガキの頃よく吹いてただけだ……この曲だって姉さんがよくフルートで吹いてたから覚えてただけだ。俺の作った曲じゃねえ」

「それでもな……私から見ればお前は無愛想な人間だからな……」
「テメエから見た俺の事情なんざどうでもいいじゃねえか」

そう言つとアスカは私と墓場から遠ざかる。私が彼を呼びとめようとしたが、彼を手を振っただけだ。

「……興が冷めた、俺は寝させてもらうぜ。ホントは研究に費やしたいが明日も明後日もS E E Dと戦うんじゃ出来ねえしよ……」

そう言つて彼が去ると、私は墓場を見る。その場には玩具やぬいぐるみ、酒の瓶に花束など統一されてない供え物が何故か置かれてあった。

我々が作つたときには何も置かれてなかったし、アスカは宴会にも参加しなかった。よく見れば近くにはカールが眠りこけている姿もあった。

「……」

ココで寝ていたら風邪を引くぞ。そう思いながら私はカールを担いでアスカの後を追った……

目を覚ますとそこはリトルウイングから与えられたマイルームであり、ラドルはビジフォンで何やら調べ物をしていた。本人曰く電子の海を漂いながら人魚と戯れているとのことらしい。

『眠りの神からの呪縛から解放されたかマイマスター。俺が電子の海に住まう人魚から聞いた情報を知りたいか？』

「……」

普段なら（その言葉遣いが原因で）一蹴するが、今日は夢の影響もあつたのか仲間の情報が得られるかもしれない。そう思つて私はラドルに続けろと促す。

『……一番興味深かつたのは妙な石を集める少女の話だな』

現実是非情だつた……行方不明の仲間とは関係ない話だつたからだ。しかもその話題はこいつが一番好みそうなレベルの話だつたのもあつて頭を抱え込む羽目になつた。

『その石を見た者の話だとか闇の力を手に入れられそうだとか、集めている少女は見えない何かと会話していたとか、俺の魂を揺さぶる何かを感じ取つた……』

期待した私が馬鹿だつたということか。既に興味を失つた私はベツドから立ち上がつてリトルウイングの管轄区へと赴いた。

『待て待て待て！！　マイマスターも男だろ？　その女掲示板で

話題になってたぞ！！ 顔写真希望とか着やせしてるとか胸がでかいとか
」

私は近づいてきたラドルを掴み上げるとベッドに向けて投げつける。そして私は振り向きもせずに部屋から出て行った。

期待はずれのラドルの発言に私は頭を抑えながら管轄区へ行く。前回海底レリクスの再調査に赴いたり、その後でディ・ラガンの討伐も行いエミリアに経験を積ませる事に成功した。

それでも『三騎士』や『三騎士』以前の所属部隊であった『虹』レーゲンボルグに比べたらまだまだだと言うレベルだが、自分たちとは戦い方が違うのだからしょうがないと言ったところだ。

「……………」

落ち込んだエミリアが私の横を横切る。私が声をかけると彼女は再び溜息を吐いた。

「あゝ、ギユスターヴ……………？　どうかしたの？」

「ラドルが変なネタを掴んできただけだ……………お前こそどうかしたのか？」

「ん……………」

エミリアの話を聞くとこうだ。朝起きたら通信ログが入ってて、開いてみるとその相手はクラウド行きつけの飲み屋だったのだ。どうやらツケで払っていたらしく、いい加減今月分のツケを払えとの事。

「家からの転送通信はツケの催促とかココ最近多くなってきた変質者からの電話ばかりだし……あたしに働けとか言うけどおっさんだって昼間から酒飲んでばかりだし……バリバリ働けとか言わないからせめて人並みの常識とか身に付けてほしいよ……」

エミリアの口からはクラウドへの怒りのみ。バスクが『ここにいる以上ただの酔っ払いではない』と擁護していたが、どうも怪しくなってきた。この前の海底レリクスで戦った男が死体で発見されたと報告したら、終業後バスクと共に宴会までやる始末だ。

「で、あんたが不機嫌だった理由は？」

「ラドルが変な情報を拾ってきた」

そう言つとエミリアも納得したのかこちらに向けて同情するような目で見据えてきた。

「……まあいい。さっさとクラウドの所へ向かうぞ」

「そだね……」

お互い足取り重くりトルウイングの事務所までたどり着くと、チエルシーがニュース番組を見ていたところだった。

『着工より二年。先月、ついに完成した亜空間発生装置の完成式典がパルムの同盟軍本部で行われました』

亜空間発生装置が漸く完成したのか……あの研究には兄上も出資していたな。本来遊戯皇の映画に回されるはずだった予算をほぼ全額そちらに回した程優先していた。

その映画も元となったアニメが監督と脚本が好き勝手やってくれた結果、これはひどいと言わんばかりに滑ったから予算がだいぶ余ったと聞いた。

それにしても……

『式には、亜空間理論を確立した総合科学企業インヘルト社のナツメ・シユウ代表取締役をはじめ、開発に加わった軍関係者や多くの企業が参加しました。今回披露されたこの装置により亜空間発生実験が成功すれば、有人での亜空間航行計画へと大きく前進することとなります。現在グラールが抱える資源枯渇問題に光明をもたらすこの研究、絶対に成功してもらいたいものですね』

インヘルト社か……懐かしい名前を聞いたな。昔はよく社交界に一緒に行っていて、ナツメ代表と先代が話しているところを私たちは遠目で見ただけだったな。そう言えば、ここ最近アイツとは疎遠になってきていた……

『ノー！！ ニュースそれで終わりナノ？ 納得いかないヨー！』

チエルシーの叫び声に私はハツとなり、エミリアも驚いた表情で彼女を見つめた。テレビの方はスポーツやデュエルモンスターの話題になり、亜空間研究の話題は終わった様だ。

「なんでいきなり怒ってるの、チエルシー？」

『エミリアー、今のニューススカイクラッド社の名前が出てない

ネー！！ 亜空間航行の計画にイッパイ出資してるんだヨ！！ ウチのいい宣伝にナルと思ってたの二ー！！」

「スカイクラッド社はウチの本社じゃん。リトルウィングの宣伝にはならないって」

どちらにしてもM A W社も多額の出費をしているのだが名前すら出てなかったんだがな、と思ったがそれをここで言うのは憚られた。大体G R M社も出ていないんだから我慢してくれ。

今や亜空間研究のための出費はある種のスータスとなっており、どれぐらい出したかで権利を得られるのか躍起になっている事業が多いのだ。

「次のニュースです。近年デュエルモンスターズ界存続の危機の元凶だったデュエルディスクから投影される鮮明すぎた実体化映像、それを解決させるための装置が開発されました。デュエルディスクを開発したアミューズメント事業の最大手M A W社のグラディウスⅡウィンストン代表取締役との会見です」

「よかった……何とか開発に成功したみたいだな」

亜空間研究も重要だが、やはりM A W社の人間として近年の技術の進歩による投影映像の鮮明化は問題視されていた。突然現れたモンスターによって運転を誤って事故を起こした人間もあり、中には死傷者まで出る始末。

S E E D事変のお陰で矢面に出される事は無かったが、それでもデュエルディスクを開発した身としては起こした事の重大さと責任に押しつぶされた。故に一時期予算の大部分をその解決策に割いたのだ。

その甲斐もあって遂に開発に成功したと言う事はM A W社を離れている身としても嬉しい限りだ。自然と私の表情も明るくなる。異能者の問題だけでなくこういった事業もまた我々の役目でも在るの

だから。

会見場に舞台が移ったのか、グラディウスⅡウィンストン……兄上が右目付近にバイザーのようなものを身に着けて笑みを浮かべながら会見に応じている。

『ええ、今回弊社が開発したのはデュエルディスクから得た映像データを擬似的なVR空間に映し出し、造られたVR空間を視認するための装置です。私はそれを『VRゲイザー』と名づけました』

映し出されるのは指で突付かれている片目を覆うデザイン性を重視したバイザーの様な装置だった。様々なデザインが映し出され、単純な擬似VR空間の説明に入っている。

『後蛇足ですが、くれぐれも運転中のVRゲイザーの使用はお止めください。何しろ今度はこれが原因で事故が起きた、などと言われても責任は問いかねますのであらかじめご了承を』

兄の苦笑じみた声を合図に記者達の笑い声が会見場を支配する。更に兄が何やら言葉を続けようとしたところで

『ク・ヤ・シィ~~~~~!!』

チエルシーが声を張り上げながらリモコンを操作してテレビの電源を切った。極めつけにハンカチーフを口に含んで噛みながら引張る芸当まで見せた。

『MAW社はデュエルモンスターズやらデュエルディスクやら今のVRゲイザーやらで、利益も話題もインヘルト社を除いて独り占めだヨ!? しかも今やデュエルモンスターズどころかアミューズメント界はあいつ等の天下だって話ネ!!』

「それでも、亜空間研究の件は表に出されていないわけだから条件はイーブンだと思うが……」

『ギユスウー！ アナタはどっちの味方ナノヨー！ それでもリトルウイングの社員ナノー！？』

一応私はMAW社の人間なんだが……と言うよりチエルシー、お前もその件については知っているはずだが！？

「ともかくチエルシー！！ おっさんいるー！？」

エミリアが声を張り上げたのを機に私は渡りに船とばかりに声を上げる。

「そうだったな。チエルシー、エミリアがクラウチに用があるとの事だったか……」

流石にチエルシーも私情を挟むわけには行かなかったのか、泣きながら私たちに声を上げた。

『オウ……そう言えばシャッチョサンが2人に用があるって言うてたネ……シヨッキングなニュースのせいですっかり忘れてたヨ……』

「あんまりシヨッキングでも無かったけど……ま、いいわ。おっさんは奥にいたんだったよね」

エミリアと共に奥に行こうとした私達。するとそこへ

『お二人さん、シャッチョサンのところへ行くならついでにコレもお願いネ』

チエルシーに渡されたのは電子媒体の……領収書？

「……『ランジェリースポット、リッチベルベルト、ダグオラ・シティ店』……？」

私が読み上げるとエミリアが露骨に嫌そうな表情をした。気持ちは分かるので私も表情を変えようとはしない。

「……ねえチエルシー……このどう見てもいかがわしいお店の領収書って……なに？」

『経費じゃ落ちないカラ自腹ダヨって伝えてネ!!』

その言葉に対してエミリアの表情が強張った。私の手元に領収書が無ければ彼女が握りつぶしていたかもしれない。

「あのエロオヤジ……ツケの払い忘れだけじゃ飽き足らず経費の無駄遣いまでするか!!」

遂にエミリアが吼えた。私もチエルシーも気持ちは分かるので反論しないがココで吼えても仕方がないだろう。

「とにかく行くぞエミリア」

私の声に渋々と彼女はついて行く事になった。とは言えあれほどクラウチの悪口を言ったのならば反応の1つや2つを返してもおかしくないはずだが……

「うわっ!! 酒臭っ!!」

……なるほど。理由はコレか。要するに酔いつぶれていた、と。

「……起きろ。私は酔っ払いに敬語を使う気は無いからな」

怒りを込めて声を上げる。ココで辞表を叩きつけても文句は言わせないが、同時にエミリアを鍛え上げる依頼も放棄する事になるからな……

「……よお、来たか」

右手には酒瓶、足元には缶ビール。どう見ても酔っ払いスタイルに私は怒りを覚えた。バスクめ、コレでただの酔っ払いじゃないとどの口がほざくか……！！

「来たか、じゃないっての！！いつもの飲み屋からまた電話が来たんだよ！！いい加減ツケを払えって！！」

「後はコレだ。経費じゃ落せないから自腹を切れ、との事だ」

私の言葉に対して理解する力はあったのか、私に向かって反論した。

「なんだ、コレは資料とか根回しとかの経費じゃねえか」

「どう見ても乱行の見本市じゃない！！落ちない理由も常識的に考えろってのー！！」

「全くだ……」

よくコレで倒産しないな……ココで勤めて不安になってきたぞ。

「ま、んなことどうでもいい、後で俺の貯金から払ってやるよ……
…っと、本題行くぜ」

その言葉に対して私の表情も真剣になる。クラウドも真剣な表情で私達に向けて声を上げた。

「コイツは緊急かつ重要な依頼だ。急ぎ探して欲しいヤツがいる」

真剣な表情から先程の酔っ払いの顔は見えない。エミリアも真剣な表情で彼に向けて声を上げる。

「人の搜索……？ 重要参考人とか、要人とか？」

「あるいは指名手配の犯罪者か、何らかの密売人が……」

エミリアと私が各々仮説を組むが、当のクラウドが笑みを浮かべながら声を上げた。

「ギユスの方が近いな。何しろそいつは俺が前に金を貸したヤツでな、借金踏み倒そうとしている極悪人だからよ」

その答えに対して私もエミリアも脱力してしまった。先程までの空気が空気がたっただけにあまりのギャップに耐えられなくなってしまったのだ。

「ようするに依頼主おっさんじゃん！！ そんなの自分で探しに行けー！！」

「やかましいー！！ あの海底レリクスでのゴタゴタ以来、ウチにろくな仕事回ってこねえんだよー！！」

「ぐ……」

まあ、借金の取立てならエミリアでも何とか言えるかと言った所か

……

「で、その極悪人の情報はなんなんだ？」

皮肉を込めて私が言っているとクラウドも忘れてたと言わんばかりに映し出していた水着姿の女性写真を最小化していき、厳ついビーストの男の写真を映し出させる。

「搜索対象者は『ワレリー』ココフ』51歳、種族はビーストだ。ヤツの船はモトウブのクロウドッグ地方に在ると場所が特定されている」

「場所分かってるんなら自分で行けばいいじゃない……」

エミリアがポツリと言うがクラウドは彼女を睨み付けて情報を話し続けた。

「シティでもカジノでもねえ、ヤツには用事が無さそうなヘンピな場所だ。まあ、居場所が分かればこっちのもんだ、さっさと取り立てに行つて来い！！」

「……了解しましたー！！ こんな酒臭い場所にいたら飲んでないのにこっちまで酔っ払つてきちゃう！！ さっさと行こギユスターヴー！！」

エミリアが怒り心頭な様子で事務所を出て行く。私もそれについて行くとした時、クラウドが私を呼び止めた。

「なんのようだ……！！」

クラウドが無言で紙の書類を投げてきた。それを受け取り、私の目に映るのは紙を束ねていた帯を止めていた刻印に刻まれた伝説上の獣である天馬と一角獣の合成獣。

それは忘れるはずも無い『異能者』としての我が一族の紋章、そ

してそれを意味するのは『異能者』としての一族の長からの命令書……！！

「テメエの兄貴から情報屋経由で依頼だそうだ。俺も情報屋も奴から『お前以外の奴に読ませるな』の一点張りだから封すら開けてねえよ。まあ奴が言うには依頼の場所はクロウドッグ地方だって事くらいだ」

私は今度こそ無言で事務所を出る。途中でエミリアが愚痴りながら私の後について行ったが、私は途中で部屋に用があると言って戻って行った。

私の部屋にて、鍵を閉めた後に書類の封を開ける。封を解かれ広がった書類にはこう書かれてあった。

『モトウブのクロウドッグ地方にて妙な力を持った連中が屯している。あそこは文化保護地区でもあり、我々外部の人間が好き勝手に荒している場所ではない。また異能者の可能性も高く事が露見したら五百年戦争の悲劇の二の舞を招くため“違法者”の仕業だと判断したら説得する必要は無い、優先的に処分するように』

書類をレンタルしたロッドを用いたフォイエで燃やすと私は溜息

を吐いた。クラウチは今回の借金取りを好都合と見たのか、私の任務と抱き合わせで行わせようと言うのだ。

「こういう合理的な点は評価できるんだがな……」

いかんせん悪代勧誘やのんだくれ、経費や依頼の私的利用などで評価をマイナス面にまで下げてしまふ。大体エミリアが巻き込まれるとは考えていなかったのか？

『マイマスター、依頼か？』

「兄上……いや、当主からな」

気になる点はいくつかある。まずは『妙な力を持った連中』と言う言い回し。最初から『異能者』だと言い切ればいいのだが、何故このような言い回しを……

『ふむ……俺と同じ力を持った精霊の祝福を得た連中と言う事かな？』

「……お前のような奴が何体もいてたまるか」

私は一瞬ラドルと同系統のPMが何体も暴れまわる姿を想像して頭を痛めた。ああ、本当に頭が痛くなる。

「……まさかな」

頭が痛くなつたついでにふと思ひ至るのはあの海底レリクスで戦ったあの男だ。あの男の力は我々異能者とはまた別の異質な力だった。

しかしあの男は海底レリクスで死亡が確認され、既にこの世の間ではない。

それを「ありえない」と言っただけ切り捨てる事は簡単だが、どうしてもあの男の姿が頭によぎってしまう。

「……最悪、また異能を使わねばならないか……」

かつて炎魔竜と戦うために異能を発動させエミリアも目撃している。しかし彼女はあの事を夢だと断言してしまっているのだ。

大体現実だと自覚すると言う事は私が一度死んだと言う事実も自覚する事だ。とは言え、私自身の实力は異能を使った戦いを除くとそこらの傭兵達と対して変わらない。

そうなると答えは1つしかあるまい。

「……今回はデッキを持っていこう」

そう言っただけ私は机の上に置いていた鍵をつけた箱に手を伸ばして指紋照合を行い、鍵を開けてデッキを取り出した。

エミリアと合流し、マイシップを運転させる。更に彼女がこの前のミュージックストアで買ってきた音楽を鳴らしながら運転する。この曲は近年流行している音楽グループ『Vanguard』の曲なのだ。特にリーダー格の女性ボーカリストが一番人気だそうだが、曲も聴いてみたが、それは先の店で聴いたあの曲だった事を思い

出した。

閑話休題。

グラール太陽系第三惑星モトウブに到着し、目的地であるクロウ
ドッグ地方へと船を運ぶ。そこで私たちが目にしたのは……

「な、何なのよこれー!？」

見渡す限りの船、船、船……どこぞの観光プラントも顔を青くさ
せんばかりに屯している乗り捨てられた船の行列だった。中には迷
惑にしかないような止め方をしているのもおり、酷いものだと
激突しているものもある。

「船、だな……」

「おっさんヘンピな場所だって言ってたじゃない!! 話違うわ
よ!」

こうして動くのにも一苦労だ。マイシップと言うものは思った以
上に図体がでかく、その上に乗りながら移動するのはまず不可能な
のだ。大体リモート操作で動かせるので動いた時点で最悪の事態を
招く……こうしている今でも最悪の事態は招く事が出来るのだが。
だからこうして狭い間と間を動きながら移動するのだが……こう
も乱立されるとたまった物ではない。

「こんな連中の中からワレリーって人を探さなきゃいけないわけ
え!? 大体おっさんの借りてたものを何であたしたちが取り立て
なきゃいけないのよお!!」

「……そこは、ノーコメントで頼む……」

本当に狭いし返す言葉も見つからない。と言うより動くのにも一

苦労だ。何度かぶつかりながら船の迷宮を抜けると息を大きく吐く。

「あー……経費だけじゃなくて依頼まで私物化し始めてるよあのおっさん……いい加減誰かガツンと言ってくれないかな……」

「お前から言ったらどうだ？」

かつて私が入社する際、クラウチに対して言った皮肉を教えてやるがエミリアは首を横に振った。

「無駄無駄。あたしも言ったことあるけど何一つ聞いてくれなかったもん。それにおっさんに見してみたら、あたしってお荷物に過ぎないしさ……どうしたら言う事聞いてくれるんだろ？」

盛大な溜息をエミリアは吐いた。とは言え、エミリアの実績は無いに等しいからな……

「実績を作ればいい。少なくとも今回の依頼を成功させれば『タダ飯喰らい』から見直す筈だが？」

「えー？ そんな事でおっさんが急に態度を変えたりすると思う！？」

「今のまま過ごすよりはマシだと思うぞ？ ナツメ代表だってや亜空間理論と言う実績もあってインヘルト社を有名にしたんだ」

まあ、インヘルト社は亜空間研究のみならず海底都市開発と言う実績もあったんだが……大体それを確立したのはナツメ代表の息子であるアイツが……

「うーん……戦うのは苦手だし、調査とかも……」

そう言った瞬間、エミリアの空気が凍る。だが直ぐに彼女はポツ

リと言いなおした。

「……調査とか堅苦しい事も嫌いだしさ……」

その様子はまるで思いだしたくも無いものを思い出そうとしている雰囲気だった。とは言え、この付近に人は私達以外誰もおらず、どうしたものか……

「おい、お前達……こんなところで何してるんだ？」

子供のような声が響き、私は声がした方向に首を向ける。そして視線を下のほうに向けると、そこには浅黒い肌を持ったジュニアスクールに通うような背丈を持った男性のビーストがいた。だが雰囲気の子供のそれとは全く違う……話で聞いた小ビーストか。

「何をしていると言われてもな……」

「人を探しに来ただけだね……いくらなんでも船の量が異常だよ……」

エミリアが途方にくれた様な表情をする。まあ、あれほどの船の量だから絶望しきってしまっているのだろう。クラウドに船の特徴は聞いたが、残念なことにありふれたデザインだったらしく特徴が見当たらないのだ。

「ああ……確かに……ココ最近船の量が多くなってきてやるな……まあ俺達もココに来たばかりだけどよ、いくらなんでも異常だろ……」

確かに彼の言うとおりだ。いくらなんでも船の量が異常すぎる。ココで祭りでもやっているのかと言う質問にも彼は首を横に振った。

「祭りもイベントも何もなし。リイナの話だとカーシュ族って言う連中しかいないはずだぜ？　まあ、この辺りには誰もいないみたいだな……」

「リイナ、だと？」

その名には聞き覚えがあった。私は咄嗟に質問の声を上げた。

「一つ聞くが、そのリイナは銀髪の女性ヒューマンか？」

「いいや、俺と同じ小ビーストの女だぜ？　それに髪の色だって黒だしよ」

「ギユスターヴ、そのリイナって人と知り合い？」

エミリアの質問に対して私は首を小さく縦に振る。まあ同名の知り合いがいたって話だし、私の知り合いと彼の連れとは別人だと言う事が分かった。

「……お、噂をすれば来たぜ」

彼がそう言うのと同時に奥の方から女性の声……彼の言うリイナと言う人物の声だろう、それが響いてきた。

「あ、トニオ？　そっちも2人見つけたんだ？」

姿を現したのはトニオと呼ばれた小ビーストと同じぐらいの背丈を持った女性ビーストだった。だが彼女の背後にいた少女たちを見た瞬間、私は思わず目を見開いた。

「生憎だが来たばかりの人探ししてる奴らだとよ。で、『そっちも』って事はお前も2人見つけたって事でいいのかリイナ？」

「まあ、ね……実はあたいの名前でちょっと困ってるんだけど……」

そう言つて頬をかく小ビーストのリイナ。彼女の言葉を合図にして彼女の後ろにいた2人組みの女性の内片方が声を上げた。

「あはは……まさか同じ名前の人がいたなんてね……」

活発そうな雰囲気を持った金髪の少女も頬をかく。すると彼女と手を繋いでいた瓜二つの顔を持った黒いコートを身に包んだ銀髪の少女が首を傾げながら言った。

「リイナのなまえはリイナだよ？　でもおねさんのなまえもリイナだし……」

「銀髪のリイナか……そっちも噂してたら来ちまったよ……」

彼が呆れたような溜息を吐けば、私も盛大に溜息を吐く。当然だ、本当に噂をしていたら来たのだから。

「あー、自己紹介を始めるぞ。俺はトニオ＝リマ、フリーの傭兵だ」

トニオが頭を掻きながら言つと小ビーストのリイナが声を上げた。

「一応あたいも言っておくよ。あたいはリイナ＝リマ、さっきのトニオとは夫婦で傭兵をしているんだ」

彼女に続いて私が声を上げる。残つた2人の……特に私に警戒心を持っている片方の目を気にしながら声を上げた。

「始めまして4人とも。私はギユスターヴ・ウィンストンだ、しばらくの間よろしく頼む」

「あ、あたしはエミリア・パーシヴァル。ギユスターヴと同じリトルウイングの傭兵です、一応……」

エミリアが言葉を濁しながら言うつと最後に双子姉妹の内、金髪の方が声を上げた。

「……ま、いいわ。あたしはレイナ・ワインバーグよ。で、この子が……」

「レイナ・ワインバーグです！！ おねえちゃんといつしよに“ようへい”のしことをしてるので、よろしくおねがいしまーす！！」

レイナが言い終わらないうちに銀髪の方のレイナが手を上げて声を上げた。だが私は彼女たちの自己紹介に違和感を覚えた。

（どういうことだ……！？）

レイナとリイナと言う双子姉妹は私の知り合い……私と同じ異能者であり、同じ一族の人間だ。恐らくレイナも私の素性に気付いているのだろう、凄い目つきで睨んできている。

そしてそれ以上に私が困惑している理由がある。それは

（なぜ先代当主の娘達がココにいる！？ いや、そこまではいいだが……）

そう、彼女たちは先代当主の娘だ。ウォザールブルグ動乱以後一族を出奔したのは聞いているが、それ以上に私が驚愕したのは

（何故リイナがあそこまでおかしくなっているんだ！？）

そう、彼女たちも……特に銀髪のリイナの方はウォザーブルグ動乱の関係者……否、ある意味では“元凶”とも言える存在だ。

そして私は動乱以後の……カールとアスカが行方不明になってからの彼女達の事も知っているし、父親にすら牙を向ける荒れ様とコートを抱きかかえたまま動こうとしない落ち込み様は見ていられたかった。しかも本家筋の人間しか名乗る事が許されなかった姓を棄てワインバーグ……カールの苗字を名乗るようになってからしばらくして、先代当主が大枚叩いて手に入れたレアカードを破り捨ててから出奔したのだ。

だが手にしたぬいぐるみで遊んで喜んでいる彼女はまるで……

（まるで何も知らない、普通の子供ではないか……！！）

私の驚愕の視線に気付きもせず、彼女はただただ人形遊びに興じていた。

同時刻

「くそっ！！ くそおっ！！ テメエ誰だ」

その言葉を最後に自分と同じ存在が斬り捨てられる。斬り捨てた存在はただただ何事も無かったかのように手にした武器をこちらに向けた。

「どうなってんだよ……遊戯王のモンスターは出てくるし、『原作』通りに炎を潜り抜けたら爆弾が爆発するし、プリン害児は妙に強くなってやがるしどうなってんだよ！！ ましてやテメエのようなデューマンがカーシュ族にいるなんて聞いてねえ！！」

そして目の前の『異物』はこっちに向かって襲い掛かってくる。その手に握られているのは日本刀そのもの。無数のシャドウグがこっちへ銃口を向け撃ち続けるわ、『原作』には無い攻撃方法の足蹴りまで繰り出してくるわ、拳句の果てには遊戯王のモンスターまで召喚するわで何が何だか分からない状況になりやがった！！

「ちきしょう……チキショウ！！ こっちに来るなあ！！」

話が違っじゃねえかあのクソ神！！ チートを好きなだけ手に入れたしニコポもナデポも常備した！！ 海底レリクスで死ぬのが嫌だったからミカも見れるようにした！！ なのになんでリトルウィングには入れなかった上にココで死ななきゃいけないんだよ！！ 超電磁砲を当てても何一つ動じてねえ！！ こんな人間いるわけねえだろ！！ くるな、くるなくなるな！！

「くるなああああ！！」

思わず叫ぶ。だがそいつは何も動じずにこっちにまで来て赤黒い何かを腕に纏わせる。

そのとき初めてそいつの顔を見た。そして体が震えた。

「あ、ああ……」

白く伸ばされた髪

その前髪の隙間と千切れた包帯から見え隠れする黒一色に赤い光が燈る眼に、生気を感じさせない白い肌

そしてそれ以上に 黒一色に光が燈る右眼以上に禍々しく、白い肌以上に生気を宿していない、普通の白目と血の様に紅い左眼

それは正に『死神』その者の姿

何かが漏れた感覚がしたが、そんな事よりも赤黒い手が自分の顔を掴み上げ、頭が痛くなつて

墮落しろ……無限獄へ……

が 地獄の底から響くような声がして、最後に何かが潰れるような音

借金取り（後書き）

……実は今回出した銀髪の方のリイナちゃんは原作とは性格が違います。

と言うより、性格を変えざるを得なかったと言うのが正しいですね。

原作の彼女は（人間不信とは言え）生真面目な性格の妹キャラでした（メインルートになればお兄ちゃんっ子に戻りますが）が……

生真面目な妹キャラと言えば、この作品では「ご愁傷様です」の対象で有名なあの子です。心を鬼にして言いますがそちらの方が知名度が高い上、登場させないと言う事も出来ません。更にリマ夫妻も削るには惜しい上にヘイトする気もありません、最初は削る気でしたがインフィニティのタイラー登場で却下しました。

故に銀髪リイナが性格改変な上、まさかのダブリイナ登場となってしまうしました。

実はコレが一人称視点での執筆をした最大の理由……ギユスターヴ視点ならコイツの性格上、リイナ＝リマをリマ夫人、銀髪リイナを呼び捨てで呼ぶことが可能になるからです。

まあ、もちろんトニオやタイラーは逆にリイナ＝リマを呼び捨て、銀髪リイナをトニオは「嬢ちゃん」、タイラーは「お嬢さん」と呼ばせますが。

ではではまた次回

ところで遊戯王もクロスさせている以上、デュエルは入れたほうがいいのでしょうか？

A・おい、デュエルしろよ

B・まるで意味が分からんぞ！！

でアンケートにご協力ください。では。

自然の守人（前書き）

今回は中ボス戦なのでデュエルは無しデース。
デュエルはボス戦になる予定デース。

今回はあの少年が本格登場です！！

自然の守人

驚いたな……まさかあの2人がココにいたとは……私の正体に気付いているレイナは妹を庇いながらこちらを睨んでいるため、ろくに話も出来ない。

「ねえ……あの2人、知り合い？　少なくともお姉さんの方は凄いい顔で睨んでるけど……」

当然の事ながらエミリアが聞いてくる。まあ、これ以上隠し立てするのも気が引けるからコレぐらいはいいだろう。

「……親戚だ。彼女が凄い顔で睨んできたから思わず『始めまして』と返したかな」

嘘は言っていない。確かに彼女も私も一族の本家筋であり、父親同士がかつて当主の座を争った事のある相手だと言うのも事実。

結果は彼女らの父親の軍配が上がり当主の座に座ることが出来た。尤も彼も自分の不始末が元凶で失脚したのだが、MAW社を発展させた功績はあるため一応悪く言うつもりは無い。

「……まあ、アンタに嘘をつく理由もメリットも無いか」

エミリアも納得してくれたようだ。一方でレイナも彼女の妹でもあるレイナと共に、トニオとレイナ……紛らわしいからトニオの妻であるレイナは『リマ夫人』と呼ばせてもらおう、彼女らは情報交換をしていた。その会話はこんな風だ。

「あー……レイナとその妹の嬢ちゃん、あんたらは何しに来たん

だ？」

「今日は依頼抜きで観光よ。ちょっとリイナに色々なところを見せてあげたかったしね。この子、体が弱くて外で歩けるようになったのってつい最近なのよ」

観光……か。その動機には彼らにしてみれば嘘は無さそうだが、私から見たら不自然すぎる。

「ふーん……ま、俺達は文化保護地区の見回りを頼まれてココに来たんだよ」

「ぶんかほごちく？」

リイナが首をかしげると同時にエミリアもどいう事かと聞いてきた。尤もエミリアの方はそんな事聞いてないと言う風だが、リイナの方は言葉の意味すらわかってないと言う風だ。

「ああ、クラウチの所から出たところで情報屋から連絡があつてな、最近文化保護地区を大勢の人間が訪れていると聞いたんだ」

「へえ……」

「ああ、そいつが私以外の人間に情報を提示するなと無理を言っていたからな。クラウチも知らなかったようだぞ？」

彼女からしてみれば『そっちを正式な依頼にすればよかったじゃないか』と言いたいのだろうが一応フォローしておくか。

「でもさ、どっち道ちよつと変じゃない？」

「何がだ？」

私は彼女の疑問に耳を貸す。彼女は海底レリクスでレリクスについて述べたように顎を手に乗せて自分の意見を言った。

「文化保護地区とかがある観光地にしては、その2人以外の観光客がいないって事がさ。船はいやと言うほどあるけど……」

彼女の意見に対して、女性同士の会話になったのか輪から外れたトニオがこちらの会話に口を挟んだ。

「……なるほど、そっちの嬢ちゃんは勘は良いみたいだな」

「ああ、一応私も驚くような事を言い出すからな……」

そんな中、会話に一区切りを終えたのかリマ夫人が声を上げた。

「さっきの子達にも言っただけど、これからどうするんだい？
一応依頼書ではココ最近気配も異様だし原生生物もやけに凶暴だ
って話だよ」

「奥で何か起こってるって事は間違いない、か……」

私がそう言うのとレイナも溜息をつく。一方でトニオが場を仕切るように声を上げた。

「なににせよ、奥に進まねえと人探しも見回りも観光も出来ねえ
……ココは一つ、俺たち6人でチームを組むって言うのはどうだ？」

その言葉に対して私は考える……尤も、直ぐに回答が出てしまっ
たがな。エミリアの方を見ると彼女も私と同じ意見だったのか頷き
を返す。

「……いいだろう。我々リトルウイングはその提案を受け入れる」
「よっしゃ決まりだな！！ リイナの話じゃこの奥に『カーシュ
族』って連中が住む村があるからな、まずはそこまで行くぞ」

トニオとリマ夫人、そしてリイナは喜ぶがレイナの方は表情が曇る。これから行動すると言うのにその表情は印象を悪くするだけだが……

「少し待つてくれ、レイナと話がしたい」

そもそも彼女の様子と一族側に“前科”がある以上、彼女が私に對して後ろから攻撃してもおかしくない。まずは彼女の“勘違い”を解いておかないといけないな……

「良いけど早く済ませてよね」

「分かってる。行くぞレイナ、あの船の陰でいいな？」

「え？　ちよつと待つてよー！」

彼女の有無を言わず私は適当な船の陰まで移動する。彼女も観念したのか私の後を追うのが気配で分かった。

「……で？　話つてなんなの？」

適当な船の陰で止まるとレイナが腕を組みながら私の方を睨みつける。まあ、警戒心を抱くのは当然の事だが……

「まずはじめに言うておく。あの男はお前達が家を出奔した直後、兄上に当主の座を譲った」

「へー、グラディウスさんに『あんた等のお父さんが念願だった当主になれておめでとさん』って言った方がいい？」

彼女が笑みを浮かべながら言う。昔は明るいのが取り得だったのだが、ウォザーブルグ以来よくもまあココまでやさぐれたな……

「私が伝えておく。それと兄上は“協会”と手を切った、お前の妹にはもう興味ないから何処で暮らそうが“異能”で好き勝手してかさない限りお前の勝手だ。お前達程度の戦闘者ならば代わりはいくらでもいるからな、いなくて困るという事は無い」

「……それはどうも。お礼に売り上げに貢献してやってもいいわよ、一応新製品出したみたいだから帰りに買っておくわ」

「ありがとうございます。兄上も喜ぶでしょうな」

私がそう言っていると彼女は声を上げた。彼女はあの時以来“協会”を嫌って……否、憎んですらいる。どちらにせよ、“協会”と完全に手を切ったのは全員一致の考えだったがな。

「で、話はココで終わり？ まあ、あんたがリイナに妙なちよっかいを出そうとしたら倒す予定だったけど無駄になってよかったわ……アンタは飛鳥とカールの仲間だったわけだし、両方の意味でね」

そう言っただけ彼女は右手のナノトランサーからハンドガンを取り出す。危ない危ない、真っ先に誤解を解いておいて正解だったな。

「それとコレは傭兵としての私の勘だが……異能は直ぐに使える用意はしておけ」

その言葉には彼女も眼を見張ったのか声を張り上げて叫んだ。

「はあ！？ 異能を使える準備をしておけって……あんた本気？ いつもは『異能者狩りを避けるため無駄に使うな』とか言ってた、勘なんてもん信用してないあんたが！？」

「SEED事変以来そうだった物も馬鹿に出来ないと学んだだけで、今回は異能をそれが告げているだけだ。さて、戻るぞ」

そう言って私は船の間を縫って移動を三度始める。レイナも再び私の後を追おうとして

「私はレイナがどうしてあんなったのかは興味無い。お前が言いたくないのならばそれでもいい」

私がポツリと言うとレイナから緊張が解れて行くのが分かった。最大の懸念はそこだったという事か。

（尤も……お前の本当の目的が何なのか、ゆっくりと推理させてもらうぞ）

レイナは本当に観光のつもりだろうが、彼女には別の目的があるのは明らかだった。漸く他の皆と合流できたところでエミリアが声を上げる。

「遅かったじゃないギユスターヴ、どうかしたの？」

「少し誤解を解いておいたただけだ。私が彼女の妹を狙っていると勘違いしていたみたいだったからな……」

おおむね事実だ。かつての一族には彼女を狙う理由もあったのは事実だが、今はどうでもいい事だ。だからこそその誤解は解いておかないといけなかったのだ。

「ふーん……」

「……何か勘違いしてないか？」

あの顔は明らかに勘違いしている顔だった。大方私がレイナを口説こうしていたと思っっているのだろっな……

「そう言えばト二オ、カーシュ族の村へはどう行けばいいか分かるのか？」

「テメ、話逸らしやがったな……まあ、リイナが言うにはカーシュ族は土地を転々と移動するから逸れた仲間が分かるように目印をつけておくんだよ」

「それとカーシュ族の文字についてはあたいは予め学んでいたからそれを元に辿ればすぐさ」

リマ夫人が自信ありげにそう言つと、レイナも負けじと声を上げる。

「リマさん、それだったらあたしも協力するわ。結構学んできたからね」

そう言つて彼女も立候補する。私は旧文明専攻でそういった少数民族の暗号は学んでこなかったから解読役が複数いても困る事はない。

「……では2人とも、解読は頼んだぞ」

「わかったよ」

「りょーかいつと」

そう言つて我々は森の奥へと進む事になった。

「あつたあつた！！　これがカーシュ族の文字だよ」

洞窟の壁を見据えていたリマ夫人の呼び声にエミリアとリイナが後ろから顔を覗かせる。私もしゃがんでそれを見るが、楔形文字に似た感じでありどれも一緒にしか見えない。

「わー、おもしろいかたちしてるねー！！」

リイナは珍しい文字を見て喜んでいるが、私にしてみれば何処が面白い形なのかさっぱり分からんのだな。一方でリマ夫人とレイナはそれぞれ解読しているが、メモ帳を見ながら解読しているレイナよりもリマ夫人の方が早く解読できたようだ。

「旧文明の文字ならある程度分かるかな……？」

そう言った矢先、私は楔形文字を間近で見据える。この文字は何処かで見たことがある様な……だが旧文明の文字ではない、コレは一体……

「ところでリイナ……」

エミリアが彼女達の名前を言ったのがまずかった。リマ夫人は苦笑いをしたが、リイナがエミリアの方を見て首をかしげる。

「よんだ？　エミリアおねえちゃん？」

「あー……ゴメン、間違った……」

よくよく考えればエミリアはレイナやトニオと違って、どちらか一方の『レイナ』と親しくないのだ。それ以前にエミリアは両方とも初対面だが。

……そもそも体格的にレイナとエミリアを並べた場合、後者の方が妹にしか見えないのだが……

「どう呼べばいいんだろ……」

「エミリア、どうしたんだ？」

ココは助け舟を出すか。エミリアから簡単に質問の内容を聞き、私は声を上げる。

「リマ夫人、解読の方は？」

「済んでるよ、『炎は全てを燃やす悪魔、何も無き道は墮落の象徴、鋭い針を越えていけ』ってあるから、針のある道を進んで行けって事じゃないの？」

「とげとげしてていたそう……」

レイナが沈んだ表情をするが気にしても始まらない。6人で行動してしばらくすると、三叉の分かれ道に出た。

「炎がある道に平坦な道、それに……」

レイナが指を指した先は針が出たり入ったりする罠がこれ見よがしにあった。他にも炎が吹き出る道もあったがそれは罠だと分かっている。

「確か針がある道に行けばいいんだよね？」

「どっちにしても悪趣味よね……」

トニオとエミリアが各々思ったことを口にする。まあ、カーシュ族はコレを越えていくのだろうから嫌がっても仕方がないのだが文句を言っても仕方が無い。

最初に私がシフタライドを飲んだ後でエミリアを連れて針を飛び越え、続けてレイナがタイミングを見計らい針が無くなった直後にレイナの手を握って走りぬけ、最後にトニオとリマ夫人が針が出る前に飛び越える。

その先を越えたところはやはり平坦な道筋、どうやら正解の道だったようだ。

「……一応武器は出した方がいいと思うぞ？」

「もう？ 早すぎじゃない？」

私が細剣を手にとるとエミリアがそう言うが、私にしてみたらいつ襲われるか分からないのだ。森の中は原生生物にしろ人にしろ隠れる場所に困らないからだ。

「……ま、それもそうだね」

「じゃあねえなっと」

リマ夫妻も各々得意とする武器を取り出す。トニオがヨウメイ社製のツインクロー・ランミサキで、リマ夫人がテノラワークス製のツインハンドガンのアルブ・ボアだ。一方でレイナも得意とするヨウメイ社製のナックル・ガレントクルを手に着させる。

「ねえねえおねえちゃん、レイナはどうすればいいの？」

「レイナはテクニックであたしたちのサポートをよろしく!!」

彼女がそう言うところレイナも何処かの玩具メーカーが売り出すようなデザイン性重視のウォンドを手にする。一方でエミリアも仕方が

ないと言わんばかりに普段から使っているクラーリタ・ヴィサスと言うロッドを手にした。

「来たか!!」

私の言葉を合図にヴァンダと言う原生生物の群れが姿を現す。ベツガと言う同盟軍が使う小型マシナリーの様な大型昆虫の様な原生生物やリーダー格らしきヴァンダ・メラもいたが最悪の事態ではなかったことに私は安堵の息を漏らした。

「はあっ!!」

まず私が一匹のヴァンダの心臓目掛けて踏み込んで細剣で突き刺すと、トニオもランミサキでベツガの複眼を突き刺す。

続けて遠く離れたところからエミリアとレイナが氷系の初級テクニク・バータで離れたところからヴァンダの炎を相殺すると、炎を吐き出したヴァンダの横に回ったレイナが右の拳で殴って動きを止めるとリマ夫人が撃ち倒す。

リーダー格のヴァンダ・メラについてはトニオがツインクローで切り裂いて動きが止まったところをリマ夫人がツインハンドガンで足止めしたところで

「ハッ!!」

私が先程のヴァンダと同じように足を踏み込ませ、口の中に細剣を突き刺した。剣先が後頭部を貫いて姿を現しているため、絶命させたのは明らかだった。

「さて……と……」

周囲を見回すと花の下あたりに文字が刻まれているのが見えた。
レイナとト二オが倒した原生生物の墓を作っている間、レイナとリ
マ夫人が解読を行っている。

「……」

私とエミリアが二人の後ろから文字を覗く。所々掠れて読めない
ところがあるがやはり何処かで見たことがある文字だ、何処で見た
のやら……

「えーつと……『我ら』……『人を造りし』……『信じ』……」

レイナが所々を読みながら声を上げる。その一方でリマ夫人が頭
を掻く。

「『自然』……『汚』……『鉄槌』……レイナ、あんたが解読し
たのは要するに人の造ったものを信じるとか信じないとか言う事だ
ったね？ あたいが解読したのは自然を汚すものに鉄槌だから……」
「人の造ったものを信用すると言う事か？」

ト二オとレイナが戻ってきてそう言うことを言った。さて、次の
道は人が造ったものを信用すると言う事だな……少し進んだ先に
看板らしきものが右矢印を向いている。そちらとは逆方向に進んで
みるとするか。

さて、なんだかんだで解読が進んでいく。ある時は黒い炎を避け、またある時は滝がある道を進み、またある時は紫色の花を探して進んでいく。

「なんだかたからさがしゲームみたいだね」

リイナが笑いながら言った『宝探し』とは言いえて妙だ。差し詰めお宝はカーシュ族の村と言うところか。

「確かにそうだな……おっと、また暗号だ。頼んだぜお二人さん」

トニオがそう言うのとレイナとリマ夫人がしゃがみ込み、その後ろからエミリアがまたもや覗き込んだ。最早いつもの光景だったのでトニオも気にしてはいないようだ。

「あゝ……こりゃ結構難しいわ……」

「そうみたいね……」

今度のはかなり難しい暗号だったのか2人とも頭を悩ませる。必死になって解読しようとする中、エミリアが声を上げた。

「あ、それ……この先の道のりについてだ」

『え?』

2人が驚くと、エミリアは頷きながら壁の文字を見据えて呟く。

「ああ……うんうん……今までと違って難しい文法で書いてるん

だね……更に詳しい道のりまで書いてるから、コレが最後の目印って事かな？」

そう言いながら彼女は解読を進めていく。2人よりも早く、そして文字だけを見据えて頷くと突然立ち上がった。

「よし、この先を進んで森を抜ければ直ぐだって……どうしたの？」

エミリアが呆然となっているリマ夫妻とレイナを見ながら目を瞬かせて答える。一方でリマ夫人が代表して声を上げた。

「あんた……何で読めるんだい？」

「何でって、さつきから2人が読んでたのを、後ろで見てたし……」

エミリアがそんな事を言うが、当然信じられるはずが無い。それに彼女は以前レリクスの存在意義についてを海底レリクスで述べた事もあるのだ。

「にしても俺はさっぱりだ。似たようなモンにしか見えねえんだがな……」

トニオの指摘にエミリアも眼を泳がせてしまう。

「そ、そんな事ないって!! 誰だって出来るよこのくらい!! 現に奥さんやレイナも読めてるわけだし……」

「いや……実は一ヶ月かかったんだけどね……」

「あたしは一週間の付け焼き刃よ……」

リマ夫人が苦笑いを、レイナが溜息を吐きながらエミリアに反論する。すると彼女はこちらに顔を向けてきた。

「ギユスターヴ!! ギユスターヴはどうなの!? 興味あるみたいだけど……」

「いや、何処かで見ることがある文字だと言っ程度だ……それも旧文明の文字ではない……」

いきなり話を振られた私も声を出す、一方でレイナが声を出す。

「でももうばしよわかるんだよね? はやくいったほうがよくない?」

「そうそうそのとおり!! ほらみんな、こっちだよ!! 早くいこー!!」

レイナの言葉に反応したエミリアが無駄に明るい声を出して彼女を連れて先に進もうとし、私たちがそれに続こうとした時だった。

「おまえたち、とまれっ!!」

そのような殺意が籠った声が響いた瞬間、私達は一斉に動いた。

「馬鹿っ！！ 危ねえっ！！」

「リイナッ、危ない！！」

トニオとレイナがそれぞれエミリアとリイナを押し倒した直後、オトンの矢が数本彼らの真上を通り過ぎ、続けて角度を修正して放たれた矢を私とリマ夫人がハンドガンで撃ち落とす。

彼らがエミリアとリイナを連れ戻したところで三度迫る矢を私が撃ち落とし、今度はトニオとリマ夫人が矢を放った張本人に迫る。

「もらっただぜ！！」

真っ先に飛び掛ったトニオがツインクローの片方を突きつけようとした刹那、突如赤い魔法陣が浮かび上がると炎を象った何かの姿を現しトニオに向けて拳を振りかぶると、その腕から放たれた炎が彼に襲い掛かる。

「なっ……！！」

トニオが驚愕の表情を浮かべる。彼は上空を飛んでおり、避ける事など最早不可能だ。そこをリマ夫人が真横から飛びつくと炎の塊はトニオに当たることなくそのまま通り過ぎる。

炎は私が翳したシールドで残った2人……エミリアとリイナに当

たることなく霧散したが代償はあった。先程の炎でシールドが溶けてしまったのである。

「くっ……!!」

これで私がMAW社から持ってきた武器は全滅。トニオたちが私たちとは別の場所で体勢を整えなおすと、矢と炎を象った何かを呼び出した存在の正体が姿を現した。

オレンジや黄色を主体とした派手な民族衣装を身に纏った、羽飾りのついたバンダナをつけた端正な顔立ちをしたニューマンの少年……顔立ちからして下手をしたらエミリア以下の年齢だ。その手には羽飾りがつけられた一文字の槍が握られており、表情は怒りと憎しみに歪んでいた。

「先へは行かせないっ!! 村は、皆はばくが護るんだ!!」

叫ぶ少年に対して私は己の武器を確認する。踏み込んでこそ真価を発揮する細剣と同じ条件の槍では間合いで負けてしまう。先程のシールドは炎によって溶かされたため除外する。更に残ったハンドガンなどは殆どが自衛目的のレンタル品だ。

となると今回の私の立ち位置はエミリアとリイナの護衛だ。戦闘は情けないがレイナとリマ夫妻に任せるしかない。

「レイナ、すまないが戦ってもらえるか!？」

「……はいはい、わかったわよ!!」

彼女が叫ぶとリマ夫妻と共に少年に襲い掛かる。この乱戦では下手に援護しようものなら誤射を招きかねない。現にリマ夫人もダガーに取り替えて接近戦を行っているのだ。

かと言って私も乱戦に参加しては彼女らに対する流れ弾の処理が

遅れてしまう。先程の炎が彼女らに襲い掛からないとは限らないし、先程の剣幕ではこちらにも攻撃するだろう。

尤もこのままだったら数の差と、SEED事変を潜り抜けたリマ夫妻の経験の差で少年を倒す事は出来る。

「くっ！！　こうなったら！！」

少年が距離をとると、1枚のカードを手にする。それを見た瞬間、私は声を周囲の目を忘れて張り上げてしまった。

「まずい！！　早く奴を倒すんだ！！」

ハンドガンを出して撃とうにもココまで距離を離されたらロングレンジショットでも届かない。リマ夫妻は少年が取った行動を理解していないが彼らを責める事は出来ない。叫んだ理由を察したレイナが彼に向かうがもう遅い……！！

「ぼくはナチュル・パンプキンを召喚！！　更に条件を満たした上での召喚に成功したので、ナチュル・ナーブを特殊召喚する！！」

彼の声を合図に顔と手足のついた南瓜の原生生物らしきものが姿を現すと間髪いれずに植物の葉を重ねたような魔物が姿を現す。

「な、何だいあれは！？ ミラージュ・ブラストじゃ無さそうだが……」

リマ夫人が呆然とする中、エミリアが驚きの声を上げた。

「ちょっ！？ 何！？ 何でデュエルモンスターのモンスターが……」

エミリアも驚愕の表情を浮かべたが、直ぐに首を傾げる。恐らくあの顔は海底レリクスでの事を考えているのだろう。更に続けて少年が声を上げた。

「レベル4のナチュル・パンプキンにレベル1のナチュル・ナー

ブをチューニングー!!」

ナチュル・ナーブが1つの輪になり、それをナチュル・パンプキンがくぐる。その直後、ナチュル・パンプキンが4つの星になり直線状に並ぶ。

「偉大なる自然の四地王が一角が今日覚める!! その安らぎを持つて魔を打ち払え!!」

その叫びと同時に無数の葉が散らばり、我々の視界を覆う。しばらくしてから葉は全て地面に落ちたが、既に相手の同調は完了してしまった。

緑色の虎に年代の入った樹木で覆われた手足と頭部に生えている角。そして所々で生えている葉がそれが自然界で現存している虎ではないと自覚させる。

「四地王が一角……安らぎの緑虎『ナチュル・ビースト』!!」

それと同時に少年の声が響き渡る。それを聞いた瞬間、私はある事を思い出した。

「ナチュル……!!? そうか、『ナチュル族』か!!」

先程見たカーシュ族の文字の正体、それは500年戦争時代に存在していた異能者の部族・ナチュル族が使っていた文字だったのだ。自然を愛し500年戦争の末期になつて暴走した3体の氷竜の猛攻を受けてもなお生存し歴史の影に消えた部族……名前を変えて存在し続けたというのか……!!

「ナチュル族だかなんだか知らねえが、どうなつてんだよありや!?! デュエルモンスターのモンスターがディスクも無しに実体化しやがったつて言うのかよ!?!」

トニオが驚くが、目の前のナチュル・ビーストも怒りの表情をこちらに向けてくる。そして再び少年の声が響き渡った。

「村には行かせない！！ お前達の狙いはぼくの筈だろ！！ ぼくだけを狙えばいいじゃないか！！」

「しかも何かと勘違いしてるみたいだね…… どうなってんだい！？」

リマ夫人も驚愕の表情を浮かべ、トニオも呆れながら頭をかく。

「俺が知るかよ……」

しかし疑問を他所にナチュル・ビーストが突然襲い掛かってくる。これ以上暴れまわられては異能者の存在自体が露見してしまう可能性がある……それだけは断じて防がねばならない。

「こうなれば仕方がない、発覚する前に倒させてもらおう！！」

最早スピード勝負になってきている。私は先頭に出て2枚のカードを取り出す。

「私はバイス・ドラゴンを特殊召喚し、フォース・リゾネーターを召喚する！！」

そう言って姿を現したのは紫色の竜と普段から使っているリゾネーターの背中に何らかの球体に乗せた悪魔だった。そして私は腕を交差させて宣言した。

「レベル5のバイス・ドラゴンにレベル2のフォース・リゾネーターをチューニング！」

バイス・ドラゴンが5つの星になりフォース・リゾネーターから作り出された2つの輪を潜り抜ける。

「王者の叫びがこだまする！！ 勝利の鉄槌よ、大地を碎け！！」

その声を合図に爆音が響き渡りその中から1体の紫竜が姿を現す。

「羽ばたけ爆炎竜！！ エクスプロード・ウィング・ドラゴン！
」

その声を合図に竜が咆哮を上げる。そして紫竜が息を吸い込み、私が叫びを上げる。

「吹き飛ばせ、エクスプロード・ストーム！！」

その声を合図に爆炎竜が爆炎を伴った炎の息吹をナチュル・ビーストに目掛けて吹きかける。しかしナチュル・ビーストはそれを必死になって避けるが、それでも炎の息吹が着弾した余波での爆発によって大きく吹き飛ばされた。

「うわあああー！！」

少年がナチュル・ビーストから弾き出され、地面に叩きつけられる。ナチュル・ビーストも傷は浅くなく、即座に消滅し私も爆炎竜に対して礼を言って消し去る。

「……ぼくは……まけられない……むらは……ぼくがまもるんだ……」

そう言ったのを最後に少年は気絶する。所々に私が着けてしまっ

た火傷がある為、手にしたウォンドでのレスタをかけて治療を開始した。

「すまねえな、手間をかけちまってよ……」

トニオがそう言うが、今回は相手が相手だったし、彼自身異能者と戦ったのは初めてだろう。私も気にしないでくれと言ってから彼の容態を見る。

「ねえねえ、このひとが『カーシュぞく』？ ふつうのひとだよ？」

リイナがそう言うとりマ夫人も頷きながら彼女の問いに答えた。

「そうさ、カーシュ族って言うのは『種族』じゃない。あたい達のような文明を持たず原始的な生活をしていた『部族』なのさ。もちろん、ナチュル族って言うのは初耳だけどね……」

そう言っただけで私の方を見据える。トニオもエミリアも怪訝そうな表情でこちらを見据えてくる。最早隠せる段階ではない……正直に話すしかないか……

異能者に関して私が話し終えると、トニオが訳が分からないと言いたげな表情でこちらに向かって問いかけた。

「異能者、ねえ……となると、そっちの嬢ちゃん達もそうなのかな？」

彼の視線の先にはレイナとリイナがいた。レイナも渋々だが頷き、エミリアの表情が曇る。まあ当然だ、彼女にとってはあの出来

事は『夢』なのだから。

「まあ、よくよく考えればミラージュ・ブラストって元々カーシユ族が持ってた技術なんだからこう言った力を持っても不思議じゃないか……」

リマ夫人がそう言うのと、レイナが声を上げた。

「でもこの子、あたし達の事を何かと勘違いしてなかった？」

レイナの言うとおりだ。私たちはここには始めて来たのだし、カーシユ族に至っては初めて知ったのだ。大体村を襲う動機も無いし、この少年を狙うなど論外だ。

「……ねえギュスターヴ……聞きたいことがあるんだけど……」

エミリアが沈んだ表情で私に問いかける。話したいことは果たして異能者のことか……？

「それは後回しにするけど、さっきのカーシユ族の事……どう思う？」

「どうも何も、何かが起きているんだろう？ カーシユ族の村で何かが起きたのは間違いないだろうな……」

どうやら彼女も気にしていたらしく通路らしきものを見据えている。まさか兄の書類にあった異能者とはカーシユ族のことか？ それにしても今まで隠しおおせていたものが突然露見してしまうなど、一体何が……

「じゃあねえ、二手に分かれるぞ」

私が考えている中でト二才が声を上げた。

「俺達は一旦こいつを連れて手当てに戻る。お前達は先に進んで様子を探ってくれ」

ト二才の提案に対してエミリアが異を唱えた。

「え……！？ あたし達が先に進むの！？ 足手まといなのが確実なあたしやあの子の方がよくない！？」

「あんたたちの船に医療用のポッドとか、この子を手当てできるような設備ってあるかい？ それにあんた達だけで来た道を戻れる自信は？」

エミリアの異議に対してリマ夫人が逆に問いかける。残念だが社用の船にはそのような設備は無い。

「両方ともない……」

「あたしたちの船も広いけど……たとえ設備があってもあたし達は今回ばかりは奥へ進ませてもらうわよ」

レイナもココから帰れと話を振られたリイナを宥めながら彼女の言葉を否定する。となるとやはり彼らが戻るしかないか……

「それにコイツのような奴が相手だと俺らじゃ慣れてねえしよ……異能者だって言うあんたの方が奥に進むのに適してるって訳だ」

ト二才が済まなさそうに言うが、直ぐに明るく声を上げた。

「ま、そう心配するなって。俺らも早く追いつけるように急ぐさ」

「それじゃ頼んだよ」

リマ夫妻がそう言っただけで少年と共に来た道を戻っていく。これで奥へは私にエミリア、レイナとリイナの4人で進むしかなくなったと言っわけか……

意気消沈としている暇は無い。私は考え事をしているエミリアに声をかけると4人で再び奥へ向かった。

森も奥深くまで進んだ。今度は罾も目印も目立たなかったが、その代わりに視界などが狭く急ごうにも急げない状況が続いた。

「もうそろそろカーシュ族の村に近づくけど……」

エミリアの声に対して私は頷くとレイナとリイナの方を見据えた。

「……そろそろいいだろ。レイナ、1つだけ聞きたいことがある」

その声に対してレイナの表情が強張る。それでもなお私は聞かなければならなかった。

「何を……？」

それは私が彼女らと会ってから感じていた疑問がある。ここで聞くしかない。

「私が言いたいののは1つだけだ」

そう言っただけの少年と戦ったような広い場所に出ると、私はレynaに向き直って目つきを鋭くさせて問いかけた。

「今一度聞かせてもらおう……お前の本当の目的は何だ……？」

自然の守人（後書き）

さて、今回も難産だったな……何しろ今回はデュエル無しだったの
で何を召喚させようか悩みに悩んだから……

ユート君にはナチュルを与えようと最初から決めていたのですが、
今回は何を召喚しようかと言う事は考えていませんでした。
ギウスの方は決めていたのですが、そうなったら効果がかみ合わない
のではと思い変更にくぐ変更……漸く決めた時には6時間の死闘
になっていたという……

異能者としての矜持と決闘者としての誇り（前書き）

皆さんお待ちしました！！

今回でとうとう遊戯王恒例のあのシーンが出ます！！

単純な流れ作業デュエルですがそこはご容赦を……

後このサイトでは常識になってる全カード所有者に対するアンチもしくはアンチ管理局信者がよくやる管理局に対する悪意を持った解釈と似たような内容になってしまっていますがそこはご容赦を……

それでは皆さん一緒に……

／（、、（ゞ デュエツ！

異能者としての矜持と決闘者としての誇り

私が発した言葉を合図にレイナの雰囲気が一変した。目つきを鋭くさせ、リイナを護りながら私を睨みつける。

「……どういう意味？ 本当も何も観光以外にココに来る理由ってあるのかしらね？」

その問いかけに対して私は憶測だが答えを得ている。そして彼女の矛盾点も2つ存在したのでそこから突かせてもらった。

「まず最初にリイナだ。体が弱っていて漸く外に出られるようになったと言ったな？」

「そうよ？ だから観光。その何が悪いって言うのよ？」

別に悪くは無い。むしろアスカやカールの事を考えれば嬉しいくらいだが、だからこそおかしいのだ。

「だったら絶景で有名なニューデイズ……いや、それこそ我々の故郷であるパルムでもよかったのではないか？ 彼女にしてみたら何処でも新鮮なものだ、態々寒暖の気候が激しいモトウブを選ぶ理由など無い」

その言葉に納得するエミリア。一方でレイナは苦虫を潰したような表情になるが続けて2本目を立てさせてもらう。

「仮にパルム及びニューデイズを既に訪れていたとしても……2つ目の疑問点だが何故カーシュ族の文字を学んだんだ？」

「適当に選んだ森が実は罠とかがあったって話よ。それで学んで

もおかしくない？」

「ああ、おかしいな。ならば何故一週間の付け焼き刃でカーシュ族のテリトリーに入ろうとした？　しかも解読に四苦八苦していた状態で、だ」

その言葉に対して口ごもるレイナ。さてココからが私の憶測だ。

「もしかしたらだが……ココ最近異能者がこの森で多く見られるようなんだ。私はその調査ないし違法者の駆除に赴いている」

「……それがどうかしたの？」

「ココからは私の憶測なのだが……お前の本当の目的も人探しではないか？　そしてお前がそうまでして探そうとしたその対象は……」

言い切ろうとした瞬間、強大な殺意と強き風が吹き荒れる。この気配は紛れも無い……あの時海底レリクスで感じ取ったものだ！！

「……！！」

私は細剣を手にし、周囲に気を配る。周りは木々と草で覆われており、隠れるにしろ奇襲にしろ都合がいい場所だ……

「……なんなの！？」

次の瞬間、一機の戦闘機が上空を舞う。重厚なシルエットは戦闘機と言うより爆撃機に相応しい存在感、その橙もしくは茶の色彩を持った爆撃機は突如人の形を成していき、我々の眼前に立ちはだかつた。

「……！！」

その姿を見て私は息を飲んだ。その重厚なシルエットは忘れるはずが無い……あの機体は、否、あの“モンスター”はかつてデュエルモンスターズ界を荒らしたため造られてから僅か一ヶ月で使用が禁止され生産が止まったデュエルモンスターズ界の問題カードが1枚……！！

「ダーク・ダイブ・ボンバー、だと!？」

仮に買おうとしたら1枚20億メセタは軽く超える言っなければ資産にも等しいカードだ。あれをモチーフにした兵器と言う可能性もあったが、二手二足の直立歩行型マシナリーはいかなる用途でも製造が禁じられており、キャストが大多数の同盟軍が製造しそれを投入するなどありえない。

だが続けて再び上空から今度は何らかの吐息が放たれた。炎・津波・突風・土石流・そして黒い波動だ。

「な、何なのよ!？」

そして姿を現したのは五つの首を持つ竜……それを見た瞬間、私は頭を抱えなくなった。

「今度はF・G・Dだと!？」

F・G・Dもまた限定生産されたカードであり、高レートで取引される物だ。その値段は禁止指定を受けたダーク・ダイブ・ボンバーよりも高いと聞く。

「ちょ、何処の金持ちよ、そんなカードをぽんぽん手に入れることが出来るなんて!？」

エミリアが叫び声を上げるが、今もなお上空にはダーク・ダイブ・ボンバーが、背後にはF・G・Dが控えているため、進むことも逃げる事も出来ない。

『ハッハッハッハッハ！！　どうだい僕に主人公を譲る気にはなつたかな？』

ダーク・ダイブ・ボンバーの中から声が響く。声質からして男だろう。

「お前は……何者だ！！」

「……」

敵意を込めて声を発する私に対してレイナは言葉を出さずに雰囲気を変させる。それは先程私に向けた物以上の怒り……否、憎悪だった。

『何者か、だって？　僕は言うなればこの物語の主人公様だよピンチヒッター君？』

「主人公……？　ピンチヒッター……？」

主人公だのピンチヒッターだのどういう事だ？　海底レリクスでの出来事は私の記憶にも新しいが、ますます意味が分からなくなつて来ている……

『そうさ。カーシュ族のガキはゲームをプレイしてた時からウザつたかったからね、さっそくで悪いけど退場してもらおうかと思つてたんだ。よくあるだろ、淫獣とかKYとか薬味とか鈍感野郎を殺して退場させて自分でハーレム作るって言う話だよ』

『ゲームをプレイ』？ どういうことだ！？ まるでこの世界がゲームであるかのような言い方ではないか！？

「ふうん……」

困惑する私を他所にレイナが憎悪を隠さずに一步前に出る。すると再び声が響いてきた。

『んん？ 君は『PSPo2』に出てない人間だよねえ？ まあいいさ、僕のものにならないかい？』

そう言つてコクピットらしき部分から出てきたのは左腕に何らかの装置を身に着けた細身の優男で、容姿は絵に描いた様な美形の男だった。その男は緑色の髪をしており、黒のロングコートを羽織っている。

「そんな怖い顔しないでリラックスしなよ、ね？」

場違いなほどに明るい笑顔で言い放つ彼だったが、即座にレイナが慣れない腕でハンドガンを乱射する。私たちはレイナの奇行に眼を見張るしかなかった。

「うわっ！！ な、何を……！！」

「やかましいわよ！！ 言っちゃ何だけど、F・G・Dならともかくよくもあたしの前でそんなもの出したわね！！ 大体そうやって女を食い物にしようって根性が見え隠れするような奴なんか誰が信用するか！！」

憎しみに支配されて攻撃するレイナ。気持ちは分からなくないが、いくらなんでもやりすぎではないか！？ 男も男で避け続けている

が、限界に来たのか遂に大声を張り上げる。

「五月蠅い！！　こうなったらコレで決着をつけるぞ！！　行くぞ篤志い！！」

その言葉を合図に奴の様子が一变し……何とF・G・Dの影から瓜二つの人間が姿を現した。違う点は髪の色が橙色の点のみ……恐らく彼が『アツシ』なる人物だろう。

「え！？　ど、何処に隠れてたのよ！？」

エミリアの驚愕を合図にしたかのように彼らは一斉に左腕を構える。すると突如プレートが動き出し、起動状態に入る……って少し待て！！

「デユエルディスクだと！？」

私の驚愕を無視して彼らは自慢話を始めた。

「僕と忠志兄さんは他の野蛮人どもと違って謙虚でね……」

「武器を手にしてチャンバラごっこなんて必要無いんだよ……」

『僕たちが手にしたのはコイツさあ！！』

奴らから紫色の光が放たれると同時に伸びた光が私とレイナを貫き、光の腕が私の心臓を掴み上げてくる！！

「なっ！？」

「え！？」

驚くのもつかの間、私から伸びた光はF・G・Dの影に隠れてい

た男・アツシと……レイナの方はダーク・ダープ・ボンバーから出てきた男・タダシの腕と繋がってしまった！！

「ギユスターヴ!？」

「おねえちゃん!？」

エミリアとリイナが狼狽し、男達は声を上げる。

「はっはっは!! この世界は何故か遊戯王の設定も入っているみたいだしね!!」

「一回こういった何でもありのデュエルを試してみたかったんだ、使わない手はないよなあ!!」

流石に彼らを野放しにしていたら最悪の事態……五百年戦争の二の舞だ!!

「お前達、異能をこれ見よがしに使って露見したらどうするつもりだ!? 五百年戦争で引き起こされた異能者狩りを再び招きたいのか!？」

異能者たちにとって最悪の事態を私たちは心の奥底から恐れている。しかし彼らはそれがどうしたと言わんばかりの表情をして我々を馬鹿にしきつた表情で言い放った。

「『異能者』あ? なんだいそれ? 僕たちは主人公側の立ち位置だからそういったのは関係ないね!! 僕たちが気に入ったキャラは生かすし気に入らないのは殺すさ、今までと同じようにね!!」

「ま、女は罰ゲームで僕らの玩具にしてやるから感謝しろ!! 殺されないだけでもありがたく思っただね!!」

その言葉を聞いた瞬間、私は彼らを生かしておく必要性を無くした。何故あのような凶行に走ったのかどうでもいい。今は最悪の事態を起こさせないため、ココで始末しておく!!

「……もういい。それ以上口を開くな」

「……あんたの切り札はそいつ、野良試合だから使いたい放題つて訳ね……上等よ!!」

私とレイナは左腕を高く掲げ、異能者としてのデュエルを開始する宣言を同時に発する!!

『デュエルトランサー、起動!!』

その言葉を合図に左腕に装着されたナノトランサーが起動し、体

の外側部分にプレートが出現する。更にナノトランサーの基盤が変形しその中にデッキが収められた。

コレこそが異能者専用のデュエルディスク『デュエルトランサー』であり、普段はナノトランサーに擬態させている。

更にデュエルトランサーには異能者が技術の粋を集めて作った認識障害の機能が備わっており、使用者の半径50メートルは外部の人間には認識されない為、処刑などにはうってつけの道具だ。

「違法者とみなす……お前たちを駆除させてもらうぞ」

「はっ！！ 君は所詮どこかの傲慢な管理局と同じ考えかい！？」

「あたしの前でそのカードを使った事、後悔しなさい！！」

「上等だ！！ 妹共々可愛がつてやる！！」

一触即発の気配が漂う中、誰もが次に叫ぶ言葉を決めていた。そして、それは現実のものになる！！

『デュエル！！』

ギユスターヴ

LP：8000

篤志

LP：8000

このデュエルはタッグデュエルではなく私とアツシ、レイナとタダシで行われるシングルマッチ……互いの助けは期待できそうに無いか。

「先攻は僕だあ！！ ドロー！！」

そう言っアツシがカードをドローすると即座にカードを叩きつける。

「僕は『未来融合 フューチャー・フュージョン』を発動！！僕が選択するのは1体目の『F・G・D』、『伝説の白石』3枚に『エクリプス・ワイバーン』2枚を墓地へ送る！！」

未来融合 フューチャー・フュージョン

永続魔法

自分のエクストラデッキに存在する融合モンスター1体をお互いに確認し、決められた融合素材モンスターを自分のデッキから墓地へ送る。

発動後2回目の自分のスタンバイフェイズ時に、確認した融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

伝説の白石

チューナー（効果モンスター）

星1 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻 300 / 守 250

このカードが墓地へ送られた時、デッキから「青眼の白龍」1体を手札に加える。

エクリプス・ワイバーン

効果モンスター

星4 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻1600 / 守1000

このカードが墓地へ送られた場合、デッキから光属性または闇属性の

ドラゴン族・レベル7以上のモンスター1体をゲームから除外する。

その後、墓地のこのカードがゲームから除外された場合、このカードの効果で除外したモンスターを手札に加える事ができる。

「この時、墓地へ送られた伝説の白石とエクリプス・ワイバーンの効果発動！！ 前者はデッキから『青眼の白龍』を手札に加えることができるし、後者はデッキから光属性または闇属性のドラゴン族かつレベル7以上のモンスター1体をゲームから除外する！！ 僕は『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』2枚を除外する！！」

そう言ってアツシが手札に加えたのは3枚の青眼の白龍……デュエルモンスターの黎明期に作られた今もなお造られているモンスターであり、入手していてもおかしくは無い。だがエクリプス・ワイバーンはまだデータしか存在していないカードではないか。

（流出したデータを利用して偽造したのか……？ いやカードデータのセキュリティは厳重だから漏洩は無いと思いたいが……しかし、偽造カードはディスクが反応してデッキごと切り裂く仕組みなのだが……）

とは言えデュエルは待ってくれやしない。それにレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンもまた高額カードだ。ダーク・ダイブ・ボンバーにF・G・Dといいどうなっている！？ 普通に買おうとしたら家が傾くどころでは無いぞ……！

（何が、どうなっているんだ……！？）

青眼の白龍

通常モンスター

星8 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻3000 / 守2500

高い攻撃力を誇る伝説のドラゴン。

どんな相手でも粉碎する、その破壊力は計り知れない。

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン

効果モンスター

星10/闇属性/ドラゴン族/攻2800/守2400

このカードは自分フィールド上に表側表示で存在するドラゴン族モンスター1体を

ゲームから除外し、手札から特殊召喚する事ができる。

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に手札または自分の墓地から

「レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン」以外のドラゴン族モンスター1体を

自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

「そして『龍の鏡』と『融合』を発動!! 『龍の鏡』の効果によつて墓地へ送られた5体のドラゴン族モンスターを除外して2枚目のF・G・Dを、融合によつて手札に加わつた青眼を3体使つて『青眼の究極竜』を特殊召喚する!!」

それを合図にしたかのように1枚の巨大な鏡が姿を現し5つの首を持った邪竜を、何らかの渦が広がりそれが収束していくと三つ首を持った神の様な威圧感を持つ白竜が姿を現した。

龍の鏡

通常魔法

自分のフィールド上または墓地から、

融合モンスターカードによつて決められたモンスターをゲームから除外し、

ドラゴン族の融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。
(この特殊召喚は融合召喚扱いとする)

融合

通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた

融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

F・G・D

融合・効果モンスター

星12 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻5000 / 守5000

ドラゴン族モンスター×5

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードは闇・地・水・炎・風属性モンスターとの戦闘では破壊されない。

青眼の究極竜

融合モンスター

星12 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻4500 / 守3800

「青眼の白龍」+「青眼の白龍」+「青眼の白龍」

たった3枚のカードでココまでの布陣を整えるとは……カードの引きも質も伊達ではないということか。しかもそれだけではない！！

「さらに効果で除外されていた2枚を手札に加えさせてもらっよ！！」

エクリプス・ワイバーンの効果で除外されていた2枚のカードを手札に加える事に成功したか！！コレで奴の手札は5枚……実質ノーコストで強力なモンスターを2体召喚する事に成功した……！！

「おっと、まだまだいくよ！！ 僕はポケ・ドラを通常召喚！！

更にポケ・ドラを手札に加える事が出来る！！ 続けてそいつを除外して手札に加えたレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを特殊召喚！！」

姿を現したのは硬質の身体を持った真紅眼の闇竜……！！ しかもあのモンスターの効果は……！！

「コイツの効果で手札の真紅眼の黒竜を特殊召喚！！」

僅か1ターンで4体の高攻撃力を有するモンスターを召喚したと
いうのか……！！

ポケ・ドラ

効果モンスター 星3 / 炎属性 / ドラゴン族 / 攻 200 / 守 100

このカードが召喚に成功した時、
自分のデッキから「ポケ・ドラ」1体を手札に加える事ができる。

真紅眼の黒竜

通常モンスター

星7 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻2400 / 守2000

真紅の眼を持つ黒竜。怒りの黒き炎はその眼に映る者全てを焼き
尽くす。

「さらに手札から『黒炎弾』を発動！！」

黒炎弾…… 真紅眼の黒竜専用の魔法カード！！ 元々の攻撃力分のダメージを与えるが真紅眼の黒竜は使用したターン中、攻撃出来ないと言うデメリットが存在するが……！！

「その顔を見ると分かってるようだね？　そう、最初の1ターン目はバトル出来ないからどうでもいいよねえ！！」

そう言う事だ。私は何も出来ない歯がゆさを感じながらも黒竜が放つ炎の弾丸を避けるしかなかった。

「くっ！！」

それでも余波となった熱を感じ取ってしまった。熱い、もし当たったら二度目の死を迎えるところだったかもしれない。

ギユスターヴ

LP：8000　5600

黒炎弾

通常魔法

自分フィールド上の「真紅眼の黒竜」1体を選択して発動する。選択した「真紅眼の黒竜」の元々の攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

このカードを発動するターン「真紅眼の黒竜」は攻撃できない。

「これでターン終了っつと」

まさか先攻1ターン目でココまで削られるとは……相手の場のモンスターはF・G・Dを筆頭に青眼の究極竜、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンに真紅眼の黒竜……最低でも2400ライン、更に2ターン後には2体目のF・G・Dが呼び出されてしまう！！

「終わりじゃん……普通の戦いならまだしも、こんな状況覆せるわけ無いじゃん……」

エミリアはそんな諦めたような表情を浮かべ、男はニタニタと笑う。言葉にしくとも分かる。

「どうだ、僕の力は」

そう、奴はそう言っている。異能を自分の好き勝手に使い、自分が絶対的な上位者だと言わんとしているあの表情……

『フェツフェツフェ……！！ 小僧どもが、好き勝手吼えるでないわ！！ この力さえあればワシがグラールの支配者になるのだ！！』

あの時、ウオザーブルグ動乱で取り押さえようとした当時の“協会”副代表を思い出す！！

「ふざけるな……」

「は？」

そう……私利私欲で人体実験を行ったあの男がいたからこそ、本来絶たれる筈の無い絆が切れてしまい、彼女の心に闇が出来てそこを潰け込まれ、最後の最後であの無意味な戦いが引き起こされた！！

「ふざけるなと言ったのだ！！ 私は貴様たちのような違法者など断じて認めん！！ お前たちの思い通りになど誰がさせるか！！ 私のターン、ドロー！！」

1ターンキルが出来れば理想だが、この手札ではそこまで出来ない。故にまずやるべきことは……！！

「まずはそのフィールドを一掃させて貰おう！！　アウェイケン・ザ・マジックカード、アースクエイク！！」

アースクエイク

通常魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て守備表示にする。

その直後に強い地震がおき、眼前の竜たちがそろって攻撃態勢を解除してしまう。

「更に私はバイス・ドラゴンを攻撃力と守備力を半分にして特殊召喚する！！」

そう叫ぶと同時に私の場からバイス・ドラゴンが姿を現し咆哮を上げる。

バイス・ドラゴン

効果モンスター

星5 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻2000 / 守2400

相手フィールド上にモンスターが存在し、

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、

このカードは手札から特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚したこのカードの元々の攻撃力・守備力は半分になる。

「ちょ、ちよつと待て！！　この展開ってまさか！！」

どうやら奴も理解できたようだな、だがまだ甘い！！

「アウエイクン・ザ・マジックカード、スタンピング・クラッシュユー！！ その未来融合を破壊させてもらおう！！」

断固として未来融合を破壊して2体目のF・G・Dの召喚を阻止させてもらおう。バイス・ドラゴンが飛翔し、即座に急降下して未来融合のカードを踏み碎き破壊する！！

スタンピング・クラッシュ

通常魔法

自分フィールド上にドラゴン族モンスターが

表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。

フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を選択して破壊し、そのコントローラーに500ポイントダメージを与える。

「くうっ！！」

篤志 LP：8000 7500

「続けてフレア・リゾネーターを召喚！！」

そう叫ぶと同時に炎を背に纏ったリゾネーターが姿を現す。

フレア・リゾネーター

チューナー（効果モンスター）

星3 / 炎属性 / 悪魔族 / 攻 300 / 守 1300

このカードをシンクロ素材とした

シンクロモンスターの攻撃力は300ポイントアップする。

「行くぞ……」

その声を合図に心臓が激しく脈打つ。やはりかつて私の命を喰らいし炎魔竜を従えるにはココまでの代償が必要だというのか……！！

だが、自然と私の口元に笑みが宿る。あのカードを手にすると自分が自分で無くなっていく様なあの鼓動……ああ、漸くあのカードを出せるのか……デュエルと言う神聖な戦場で！！

「私はレベル5のバイス・ドラゴンにレベル3のフレア・リゾネーターをチューニング！！」

バイス・ドラゴンが5つの炎の玉となり、フレア・リゾネーターは3つの火の輪となる。炎の玉が私に吸い込まれ火の輪が私の周囲に纏わりつく。さあ、ココからが本番だ……！！

『王者ノ鼓動、今ココニ列ヲナス！！ 天地鳴動ノカラ見ルガイイ！！ シンクロ召喚！！』

あの時と同じように私以外の存在……否、最早疑うまでも無い。
炎魔竜の声が私の声と重なり響きあい、我が体が炎に包まれる。身体が燃える、心臓が脈打つほど熱い、コレこそが炎魔竜の熱さと鼓動……！！

『我が半身……』
「我が誇り……」

『「炎魔竜、レッド・デーモンズ・ドラゴン……」』

レッド・デーモンズ・ドラゴン

シンクロ・効果モンスター

星8/闇属性/ドラゴン族/攻3000/守2000

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを攻撃した場合、

ダメージ計算後相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを全て破壊する。

このカードが自分のエンドフェイズ時に表側表示で存在する場合、このターン攻撃宣言をしていない自分フィールド上のこのカード以外のモンスターを全て破壊する。

次の瞬間には炎が吹き荒れ、あの時と同じように私の身体は炎魔竜と化していた。

「や、やっぱリレモンか!! よりによってこんな時に!!」
『「フレア・リゾネーター」の効果発動!! コノカードガシンク

口素材ニナツタ時、シンクロモンスターノ攻撃力ヲ300ポイント
アップスル！！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK:3000 3300

この男も炎魔竜を知っている………どういうことだ？ 『250円
竜』と違って今回の略称はレッド・デーモンズを略した記号だから
分かるのだが………どちらにせよ不快だという事には違いないが。

『……行カセテ貰ウ！！ 我自身デ真紅眼ノ黒竜ヲ攻撃スル！
！ アブソリュート・パワーフォース！！』

炎を腕に纏わせ、紅き眼を持った黒竜に襲い掛かる！！ 炎の腕
は黒竜の鱗をも焼き尽くし、その肉体を焼き尽くした。

『ソシテ、守備表示ノモンスターヲ攻撃シタ時、ダメージ計算
後相手フィールド上ニ存在スル全テノ守備表示モンスターヲ破壊ス
ル！！ デモンメテオ！！』

その直後翼を広げ、炎の隕石を呼び出す。炎の隕石を破壊する手
段を持たない竜たちは隕石に飲まれていき、悉く燃え尽きていく。

「そんな……僕のモンスターが……だ、だが次のお前のターンを
凌いで僕が勝つー！！」

『ヤレルモノナラヤツテミルガイイ……我ハ2枚伏セ、コノタ
ーンヲ終了サセテ貰ウ……』

何とかこの場は凌いだか………だが次のターン次第では逆転される
可能性だつて存在する。2枚のカードが正しく発動できなければ…
…私は負ける。だがあえて言わせてもらう。

「……見ているエミリア。私が伏せた2枚のカードで逆転してみせる。出来なかったらそのときは私の負けだ」

炎魔竜に頼み込み、この時ばかりは私自身の声で話させてもらう。だがアツシはそれが気に入らなかったのか大声を張り上げて叫んだ。

「なめるなよカマセ犬！！ 僕のターン、ドロー！！」

そう言っただけが引いたとき、私はそれをまず制した。

『「オープン・ザ・トラップカード！！ バトルマニア！！」』

バトルマニア

通常罠

相手ターンのスタンバイフェイズ時に発動する事ができる。

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターは全て攻撃表示になり、

このターン表示形式を変更する事はできない。

また、このターン攻撃可能な相手モンスターは攻撃しなければならぬ。

バトルマニア……今回はデッキを調整していたが為あえて入っていたカードだが、もう1枚伏せられたカードを組み込む事によって調和されるカードだ……問題は奴がそれに乗るかどうかな！

「それがどうした！！ 僕はポケ・ドラを召喚！！ 手札にポケ・ドラを加え直して召喚したこいつを除外！！ いでよ、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン！！」

2枚目のレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン……そう言え
ば持っていたな。

「コイツの効果で僕は青眼の究極竜を特殊召喚する！！ 蘇えれ、
究極竜！！ 更に手札に入った死者蘇生の効果でもう一体のレダメ
を特殊召喚！！ 効果で真紅眼の黒竜を蘇生！！」

死者蘇生

通常魔法（制限カード）

自分または相手の墓地に存在するモンスター1体を選択して発動
する。

選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

紅き眼をした黒銀竜と青き六眼を持った三つ首の白竜が再臨した
か……

「これで貴様も終わりだ！！ 青眼の究極竜でレッド・デーモン
ズ・ドラゴンを攻撃！！ アルティメットバーストお！！」

奴が吼え、究極竜に備わった三つ首から光の波動がこちらへ向か
ってくる。

……そう、この瞬間を待っていた！！

『「オープン・ザ・トラップカード！！ プライドノ咆哮！！」』

プライドの咆哮

通常罠

戦闘ダメージ計算時、自分のモンスターの攻撃力が相手モンスター
より低い場合、

その攻撃力の差分のライフポイントを払って発動する。

ダメージ計算時のみ、自分のモンスターの攻撃力は
相手モンスターとの攻撃力の差の数値+300ポイントアップす
る。

これは自分自身の誇りの象徴……我が誇りの叫びだ。貴様たち違
法者を裁くため、私の異能者の誇りを乗せた、魂のカード！！

『「オオオオオオオオオオオオ！！」』

ギユスターヴ

LP：5600 4400

そして光の波動を我が身で受け、その力を吸収する……少しばか
り苦痛を感じたが、な……

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK：3300 4500
4800

『「クリムゾン・ロア・フレイバーストオ！！」』

紅き咆哮の灼熱波が三つ首竜を飲み込む。炎に焼かれ、光に溶かされ、究極の名を閑した白竜は今度こそ我が手で倒す事に成功した。

「あ、ああ……」

篤志

LP: 7500 7200

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK: 4800 3300

『「サテ、バトルマニアノ効果ダ。他ノ者ドモ我ラト戦ッテモラウゾ」』

その言葉を聞き、アツシの顔が青くなり、残った3体の紅き眼をした黒竜が一斉に襲い掛かる。だが

『「一体目！」』

右腕を振るい1体目のレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを葬り……

『「二体目！——」』

続けて左腕を振るい2体目を破壊し……

『「三体目エ!!!!」』

我が咆哮とともに炎の濁流で最後の黒竜を焼き払う!!

篤志

LP: 7200 6700 6200 5300

「うそ……本当にあの状況をそっくりそのままひっくり返しちゃうた……」

ライフ差こそ狭まったただだが、最早ボードアドバンテージは決定的。既に手札を消耗しつくした彼に何も出来るはずが無く、ターン終了を宣言した。

『「行くゾ……ファイナルターン、ドロー!!!」』

そして手にしたカード……それは奇しくも先程のアツシと同じカード……死者蘇生だった。

『「……………」』

このカードで青眼の究極竜を召喚する事も考えたが、私はあのカードたちの出所を疑っている。本当に彼ら自身の手で手に入れたカードなのか……それすらも危うい。

データしかないエクリプス・ワイバーンに高級レアカードのF・G・Dにレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン……しかもレッドアイズは少なくとも2枚あるのだ、疑わない方が無理だ。

「……1つだけ聞かせろ、そのカードはお前たち自身で手に入れたものか……？」

炎魔竜に頼み、しばらくは眠ってもらう。どうしてもそれだけは聞きたかったのだ。だが彼はそれを無視し、癩癩を出して喚きだした。

「なんだよ……お前何なんだよ！？ 兄さんと違って僕は他の転生者と同じようにGXでシンクロやエクシーズつかってデュエルバカや水色におじゃ万丈目を見下したかっただけなのに、何でこんな世界に放り込まれたんだ！！ しかもあのクソジイにカードを作らせて、さあ行くぞと言うところであのバカ世界を間違えてこんな所に放り込んで！！ 折角主人公になれたのに、こんな仕打ちあんまりだ！！」

……今なんと言った！？ カードを……『作らせた』だと！？

「……どういうことだ！？」

「五月蠅いな、転生者特権を使っただけだよ！！ 全カードを所持して遊戯王の世界に入り込んで、要らないカードを売りまくってガチデツキ組んで無双しまくってやりたい放題ハーレムマンセー、気に入らない奴は徹底的に叩き潰す！！ それが転生者ってやつだろうが！！ 何だよお前、僕のささやかな理想を踏み躪りやがって！！ 僕を誰だと思ってるんだよお！！」

……喚きたてているようだが、もう関係ない。最早私の心は決まった。ちようどライフも削りきれぬし問題ない。

『「モウイイ、ダマレ。アウェイクン・ザ・マジックカード、死者蘇生！！」』

さて、私のカードを蘇生させてもらおうか。頭上に煌びやかな剣を模した十字架が聳え立つ。

「な、なんだよ……僕の究極竜を召喚しようって言うのか……？」

とうとう奴は私の逆鱗に触れた。

私はアンティも同意の上ならば何も言うつもりは無い。強奪同然ならば即座に制裁して奪還するのみ。

私自身がM A W社代表の弟であるからこそ、家の財産でカードを買うという事を否定するつもりも資格も無い。子供がなけなしの金銭で、富豪が湯水のように金銭を使ってカードを買うのも、私にしてみたら大差ない。同じ金銭を使つての戦力増強に貧富の差など存在しない。

だが偽造カードで好き勝手行ふ事や密売を奨励したつもりは一度も、否、一瞬たりとも無い。

それで私服を肥やし、決闘を踏み躪り汚すというのだけは……私の誇りが許さん！！

コイツは異能者としての矜持も決闘者としての誇りも踏み躪った……これ以上顔を見るだけで不快だ！！

『「イツマデ私ヲ愚弄スルカ……フザケルナ凡愚メ、誰ガソノヨウナ紙屑ヲ使ウカ！！ 私ハ死者蘇生ノ効果デ、バイス・ドラゴンヲ特殊召喚スル！！ 蘇エレ、バイス・ドラゴン！！」』

バイス・ドラゴン A T K : 2 0 0 0

私の怒りを表したかのようにバイス・ドラゴンも再び飛翔する。その力は先程のような制限されたものではない！！

「ま、待ってくれ！！ サレンダーだ！！ サレンダーするううう！！ よくある話だろ！？ 自分の敗北を認めてそれをバネにして……」

言うに事欠いてサレンダーだと！？ この男は、いつまで自分中心で世界が回っていると思っているのだ！！

『「焼き払エ、バイス・ドラゴン！！」』

最早存在させる義理もあるまい。私の殺意を知ったのか逃げ出そうとした奴にまずはバイス・ドラゴンの火炎の息で足を焼き払い……

『「消エウセロ阿呆！！ 今こそ裁キノ時ダ、アブソリユート・パワーフォース！！」』

炎を灯した右腕で転がり込んだあの阿呆を焼きつくしてくれる！！

「あ、ああ……うわあああああ！！」

右腕がそいつを飲み込んだ時、その場には焼き焦げた跡しか残さなかった。例えライフが残されていようと、奴はもうこれ以上デューエルは出来ないだろう……

篤志

LP：5300 3300 0

炎魔竜との融合が解除され、エミリアが恐れながら私を見据える……当然だ、あのような激昂振りを見せた上、人を一人焼き払ったのだ。

「……私が怖いか？」

「……怖いに決まってるじゃない」

それが自然な反応だ。私はデュエル中に人を殺したのだ。いくら決闘を汚したとは言え、最後の最後で異能を使い相手を焼き払ったのだ……どちらにせよ最悪の行為だ。

「……この依頼が終わったらパートナーを解消してもいいんだぞ？」

「……考えさせて……自分で考えて決着つけたいから……一回パートナーだって宣言した以上は、ね……」

意外な反応だったがまあ、いい……コレで後はレイナのデュエルが終わるのを待っただけか……

異能者としての矜持と決闘者としての誇り（後書き）

以前現実主義だったというギュスターヴ……偽造カードの存在を決して許さない、所詮彼も遊戯王側の人間だったという事だ……

転生者ってオベリスクブルーの成金に対しては平然と見下すくせに自分は神様からカード貰ってるんですよ？ その成金くんと何処が違うのか私が納得できるよう説明してください。

自分もお金をやりくりしてカードを買ってますし、パックで買ってレアカードが当たった時は嬉しいです。

特にトリシューラのターミナルを15回やってトリシューラのシークレットが出た時は喜んだものですよ。交換持ちかけられたけど当然却下で、代替案を出して双方満足な結果に終わりました。

その人として当然の喜びを奴らは平然と踏み躪る。湯水のように出てくるカードの海、それを使って平然と複数のデッキを使って気分次第でコロコロ変える……それでデッキとの絆と平然と抜かし、GXのキャラを水色だのなんだの見下し放題……そんな奴らこそ世界の歪みだと私はあえて言わせてもらいます。

後勘違いされても困るのですが、GXでも主人公の特権ではないシンクロとか5D'sキャラが使うのならいいんですよ。

現に自分も「お話上手になりたいよ！」をお気に入り登録してますから。

姉としての戦い（前書き）

難産とリテイクを描き続けて漸く完成です。

この作品初オリカが出ます。

また、レイアウトが見つからないなどの意見がありましたらこうしたほうが言いと発言してください。後感想もブリーズデス……

姉としての戦い

あたしはあの時何も分かってなかった。

リイナが十年間どんな思いで過ごしてきたのか、人の醜さって奴とか、アイツの過去とかも……

だけどそんな事悔いても時間の針を巻き戻す事なんて出来ない。

「レイナ、少しばかり話を……」

ウオザールブルグでの戦いが終わり休学届けを出して実家に戻った時、あたしは塞ぎこんだリイナを抱きかかえながら怒りを隠しきれずに叫んだ。

「うるさいうるさいうるさい！！ もうあたし達に構うな！！」

子供の頃に異能の暴発を防ぐため施設って言う機関に預けられたリイナとそこで再開した。でも再開したあの子は人を信じなくなつて、タチの悪いクソ野郎に騙されて、リイナの処罰を巡って飛鳥とカールが殺しあつて、結果的に2人とも行方不明になった。

そこまでなら、まだ呼びかけている父だった男と分かり合おうと努力できた。

自分が頑なに機関に預けるのを断り続けたせいで異能が暴走して妻を……つまりあたし達の母さんを喪い、今度はリイナが異能に呪われた。今度は過程がどうであれ助けようと努力した。そこまでなら百歩譲って苦渋の判断だったと感じられる。

あたし達は何度が預けられたと聞いたリイナに手紙を送った事がある。その手紙も届けられたと聞いた。

でも、あの男は手紙を届けていなかった……それどころかリイナの見舞いにも行きやしなかった。拳句の果てにリイナがあそこでも

んな目にあつたのか知っていた。

『二度とあのような事を犯しはしない、今度こそ親の義務を果たす』

封を切られていない手紙を出しながら言い訳じみた言葉まで放つ。しかも聞いた話だと信じられない事に、リイナを差し出したときにこの屋敷が買えるって言う金額を誇るレアカードと潤沢な資金を貰ったって聞いた。

そこであたしはキレた。あたしからしてみたらアイツにとってリイナはそれ位の価値しかたつて事？ それなのに親としての義務を果たすって今更何のつもり？

「……」

あの時から生きているだけのリイナを抱いて考えた。ココにいてリイナの心の傷が癒えるのを待つのも1つの手だ。もしかしたら一族の情報網にあの2人が引かかる可能性だってある。

だけどそれじゃあたしは与えられたものを享受してただけの子供だった頃と何一つ変わらない。それにもう一族なんざ信用する事が出来ないし、肝心な情報を隠されたりする事もあるかもしれない。もう何も知らないのはゴメンだ。ならば自分の目で見て、自分の耳で聞いて、自分の足で歩く。

「そう決まったら準備ね……」

替えの下着やあたし達の全財産、後は換金用のカードや武器の数々。靴とかは現地で買えばいいから今は動きやすい靴でいいか。

後はリイナを連れて行くための移動手段ね……まあフィランディア・シティに着くまでの足だから後は何とでもなるか……

そうなつてから日々用意を整えてリイナを連れて屋敷を移動する。
後は今では使われていない車に乗れば……

「何をしているんだ、レイナ!!」

その声はあたしが聞き慣れた男の声……十年間あたし達を騙し続けた、あのクソ野郎や副代表以上にあたしが憎んでいる男の声だ!!

「……あんた、ココでなにしてんのよ？」

「……最近妙な動きをしていると聞いた。馬鹿な真似はよして大人しくしているんだ、あの2人を探すのならば協力しよう」

「馬鹿な真似、ねえ……」

本当に馬鹿げた話。あんたの言うようにして『お利口さん』にした結果が、あの状況じゃない。あの時以上の『馬鹿な真似』があるんなら、あたしの方から教えてもらいたいわね。それに協力するも何も、最初に裏切ったのはアンタの方じゃない。

「ホントはこうしてる時間も惜しいけど……ココはデュエルで決着つけましょう？ あんたが実の娘以上に大好きな大好きなあのカード、あれも入れていいわよ？」

コレは賭けだ。自分が一族の助けなど不要だという賭け。ココで負けていたらあの2人の代わりにリイナを守る事なんて出来やしない。

「……何を考えているんだ!？」

「別に。あんたに……あのカードに負ける程度しかないならあたしの力は外じゃ通用しない。そう考えただけよ？ それにあんたが勝てたらいいだけじゃない」

そう言ってあたし達はデュエル・トランサーを起動する。コレに備わった認識障害の装置で当分の間は誰もココには来れない。

後はこの男を倒すだけ ！！

「いい加減にしろレイナ！！」

「あたしはあんたを倒す！！ この……クソ親父！！」

『決闘！！』

あの時と同じ言葉を紡いだ瞬間、あたしの視界はかつていた屋敷からモトウブの原生林に場所を変え、あの男のそばにいたダーク・ダイブ・ボンバーは消滅した。

レイナ

LP：8000

忠志

LP：8000

「ああ、一応言い忘れてたわ。それ、エクストラデッキに入れてもいいわよ?」

「いいのかい? 後悔するよ?」

ま、こうでも言わないと禁止カードだからデッキには入れられない。あのカードを倒した上であたしが勝つ……それがあたしのこの決闘における完全勝利条件……と言えはかつこいいんだけど私怨に等しいわね。

でもレイナはレイナでのんびりあたしの応援をしながら決闘の様子を見ている。それでも今の様子でもあたしは満足だ。あの時のあたしとあの男の決闘ではあの子は応援どころか塞ぎこんでいたからだ。

「ま、代わりに先攻はあたしが貰うけどね。あたしのターン、ドロー!!!」

そう言っであたしはカードを1枚手にする。まあまあの手ね……

「あたしはモンスターとカードを1枚ずつセットしてターンエンド……」

まずは様子見……と言うよりキーカードが来なかったのよね……

「僕のタアアアン!!! ドロー!!! 僕は魔法カード『調律』」

を発動する！！」

調律

通常魔法

自分のデッキから「シンクロン」と名のついたチューナー1体を手札に加えてデッキをシャッフルする。

その後、自分のデッキの上からカードを1枚墓地へ送る。

調律……カールと同じようなデッキね。あのカードはシンクロンなら何でも手札に加えられるカード……何を加える気？

「僕は調律の効果でクイック・シンクロンを手札に加え、デッキの上から一枚墓地へ送る！！」

クイック・シンクロン

チューナー（効果モンスター）

星5 / 風属性 / 機械族 / 攻 700 / 守 1400

このカードは手札のモンスター1体を墓地へ送り、

手札から特殊召喚する事ができる。

このカードは「シンクロン」と名のついたチューナーの代わりにシンクロ素材とする事ができる。

このカードをシンクロ素材とする場合、「シンクロン」と名のついた

チューナーをシンクロ素材とするモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

クイック・シンクロン……か。カールはジャンク・シンクロン主体だったけどこのカードも使っていたから、コレはまずいかな？

「更に手札から黄泉ガエルを墓地へ送ってクイック・シンクロン

を特殊召喚だあ！！」

黄泉ガエル

効果モンスター

星1 / 水属性 / 水族 / 攻 100 / 守 100

自分のスタンバイフェイズ時にこのカードが墓地に存在し、自分フィールド上に魔法・罫カードが存在しない場合、

このカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

この効果は自分フィールド上に「黄泉ガエル」が表側表示で存在する場合は発動できない。

「あ、カールおにいちやんのカード！！」

アイツが召喚したのは頭にウエスタンハットを被った二丁拳銃を持った機械人形だった。リナは可愛いと喜んでいたが、こっちはそれどころじゃないっての！！

「そして僕は通常召喚でこのカードをリリースして氷帝メビウスをアドバンス召喚！！」

氷帝メビウス

効果モンスター

星6 / 水属性 / 水族 / 攻 2400 / 守 1000

このカードがアドバンス召喚に成功した時、

フィールド上に存在する魔法・罫カードを2枚まで選択して破壊する事ができる。

その言葉を宣言してから吹雪があたしの視界を遮って1体の巨人が姿を現す……って狙いはそっち！？ それに確かメビウスって…

…！！

「メビウスの効果発動！！ アドバンス召喚に成功した時、フィールドに存在する魔法・罫を2枚まで破壊する！！ 君のカードを破壊させてもらうよ、フリーズ・バースト！！」

その声を合図にあたしのカードが凍り付いていく。こうなったらココで使うしかないか……！！

「リバースカードオープン！！ 罫カード『輝石融合』！！」

輝石融合

通常罫

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、

「ジェムナイト」と名のついたその融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

このカードはあたしがモトウブで手に入れたカテゴリーカード……平穩を望み自分の核を傷つけてまで仲間の輝きを護る宝玉騎士『ジェムナイト』のためのカード！！

「あたしは手札のジェムナイト・オブシディアとジェムナイト・サフィアを墓地へ送って、エクストラデッキからジェムナイト・ジルコニアを特殊召喚するわ！！」

地面を突き破り指の無い巨大な両手に翻されたマントを羽織った白い宝玉騎士・ジルコニアが雄叫びを上げながら姿を現した。

ジェムナイト・オブシディア

効果モンスター

星3 / 地属性 / 岩石族 / 攻1500 / 守1200

このカードが手札から墓地へ送られた場合、

自分の墓地に存在するレベル4以下の通常モンスター1体を選択して特殊召喚する事ができる。

ジェムナイト・サファイア

通常モンスター

星4 / 地属性 / 水族 / 攻0 / 守2100

サファイアのパワーで水を自在に操り、

敵からの攻撃をやさしく包み込んでしまう。

その静かなる守りは仲間から信頼されているらしい。

ジェムナイト・ジルコニア

融合モンスター

星8 / 地属性 / 岩石族 / 攻2900 / 守2500

「ジェムナイト」と名のついたモンスター+岩石族モンスター

「ジェムナイト・オブシディアの効果を発動!! このカードが手札から墓地へ送られた時、自分の墓地に存在するレベル4以下のモンスターを特殊召喚することが出来る!! 蘇えれ、ジェムナイト・サファイア!!」

あたしが叫ぶと同時にサファイアが姿を現す。その腕に宿った水であたしを護ってくれるのはいいんだけど……

「コイツも守備表示よ……頼んだわよ皆!!」

あたしが激励すると、2体のジェムナイトはあたしの方を振り向き、そして頷いた。

『我……姫タチ……護ル』

『僕とジルコニアがいる限り、貴女には傷1つ触れさせませんよ……』

ジルコニアが片言口調で淡々と頷いて、サファイアが気障ったらしく言い放つ。このデッキは彼らの魂も含まれたデッキで精霊として宿っているみたいで、移動している時とかはリイナの話し相手にもなってもらっている。その一方でアイツは小さく笑いだした。

「なるほどね……ジェムナイトか……」

……え？　今なんて言ったの！？

「……あんた、ジェムナイトの事知ってるの？」

「知ってるよ。それがどうかしたのかい？　それにこいつらってカードの精霊だろ？」

それを聞きあたし達は驚いた。カードの精霊はあたしだけの特権じゃないからいいとしても、ジェムナイトはあたしがモトウブの秘境で手に入れたカードであり、MAW社のカードデータに存在しなかったカードなのよ！？　あたしだってジェムナイトはココに来て始めて知ったって言うのに……！！

『ドウイウ……事ダ？』

『僕に聞かれたって分からないよ！！　姫様は分かりますか！？』

あたしに聞いても分からないわよ。でもただじゃすまなさそうね

……

「うーん……となるとサファイアを狙うって言うのも怖いなあ……」

手札にマーチャントがいたら悲惨だしね、かと言ってあのモンスターがメタモルポッドじゃないって言う可能性も無い。メビウスじゃジルコニアを倒せそうにないしミスったなあ……」

暢気にそんな事を言っている。でもそいつは自分の手札を見据え、と意を決したのか攻撃を宣言した。

「ま、いいか。んじゃそのリバーズモンスターに攻撃ね、アイス・ランス……」

そう言っただけで氷の槍を手にして襲い掛かってくるメビウス。あたしのリバーズモンスターはなす術もなく貫かれたけど……

「あれ？ ジェム・タートル？」

そう、あたしが伏せていたのはジェム・タートル……壁兼キーカードでもあるジェムナイト・フュージョンを手札に加えるカードなんだけど……！！

ジェム・タートル

効果モンスター

星4/地属性/岩石族/攻 0/守2000

リバーズ：自分のデッキから

「ジェムナイト・フュージョン」1枚を手札に加える事ができる。

「効果を発動させてもらうわ。あたしはデッキからジェムナイト・フュージョンを手札に加えるわよ」

「まあいいよ。どうせ勝つのは僕なんだから。僕のターンは終了、つと」

そりゃまあ、あれを加えてもいいといった以上はね……でもあれはどうしても倒しておかないとあたしの気が済まないのよ!!

「あたしのターン、ドロー!!」

手札に加わったのは……まああの引きね。新しいジェムナイトを融合召喚しようかとも考えたけど、アクアマリナを素材にしてもメビウスが手札に戻るだけ……黄泉ガエルがある以上、戻すのは馬鹿げてる……

「あたしはジェムナイト・アレキサンドを召喚!!」

ジェムナイト・アレキサンド

効果モンスター

星4 / 地属性 / 岩石族 / 攻1800 / 守1200

このカードをリリースして発動する。

自分のデッキから「ジェムナイト」と名のついた

通常モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

そう言っであたしが呼び出したのは赤・緑・青に輝くアレキサンドライト……そこから打ち破って姿を現すのは白い鎧を身に纏った騎士・アレキサンドだった。

『姫、私の効果を使ってください!!』

「もちろん!! あたしはこのカードをリリースして……」

呼び出すのは彼らのまとめ役……このデッキのエース!!

「出なさい、ジェムナイト・クリスタ!!」

ジェムナイト・クリスタ

通常モンスター

星7 / 地属性 / 岩石族 / 攻2450 / 守1950

クリスタルパワーを最適化し、戦闘力に変えて戦うジェムナイトの上級戦士。

その高い攻撃力で敵を圧倒するぞ。

しかし、その最適化には限界を感じる事も多く、仲間たちとの結束を大切にしている。

姿を現したのは扇形のクリスタル、それを打ち破ってあたしのデツキのエースが姿を現した。

『レイナ……奴のカードは我々の知るカードとは違つかもしれない……』

あたしに対して呼び捨てで接するクリスタが警戒しながらそう言う。彼は他の面々と違ってあたしと対等の関係を築いているからコイツはレイナのデツキのあの人と同じ、あたしたちにとっていい相談役でもあるのよ。

「どういう意味……？」

『カードの中には概念や意思に歴史といった重みがあり、君達はその概念を実体化させている……だが奴らのカードからは概念も意思も何も感じられないのだ……もしかしたら、あのカードたちはグラールに存在しないものかもしれないな』

「グラールに、存在しないですって……じゃあ何でそんなものがあるって言うのよ？」

『……すまない、私にも分からないんだ……』

クリスタが謝罪する中、アイツが声を上げて挑発する。今はこの決闘に集中しないとね。

「……サファイア、悪いけどいい？」

『当然です。仲間と共に戦うのが我らの定め。その為に墓地へ行く事に何のためらいがありませんか』

サファイアの意思を受け取ってあたしはカードを1枚手にする！！それは先程手にしたこのデッキのキーカード！！

「あたしはジェムナイト・フュージョンを発動するわ！！フィールド上の『ジェムナイト・サファイア』と手札のジェムナイトと名のついたモンスター『ジェムナイト・アンバー』を素材にして……」

サファイアの宝玉とアンバー……琥珀が混じりあい、1つの巨大な宝玉になる。そしてその中から水を操る騎士が姿を現した！！

「出なさい、『ジェムナイト・アクアマリナ』！！」

ジェムナイト・アクアマリナ

融合・効果モンスター

星6 / 地属性 / 水族 / 攻1400 / 守2600

「ジェムナイト・サファイア」+「ジェムナイト」と名のついたモンスター

このカードは上記のカードを融合素材にした融合召喚でのみ

エクストラデッキから特殊召喚する事ができる。

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になる。

このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、

相手フィールド上に存在するカード1枚を選択して持ち主の手札に戻す。

2600

あたしの叫びと共にアクアマリンの宝石が罅割れ、中からアクア

マリナが突き破って姿を現した。だけどそれを見たタダシが怪訝そうな声を上げた。

「アクアマリナ……プリズムオーラじゃなくて？」

怪訝そうな声に対してあたしは思わずクリスタに顔を向ける。プリズムオーラって、以前あたし達が倒した……

『我らだけではなく、我らが戦ったヴァイロンまで知ってるだといふ？』

「どう言う事……？」

聞いた話だとあたし達がウォザールブルグで戦ったインヴェルズ……その本隊がモトウブで行動してて、ヴァイロン達と同盟を結んで戦った事があったみたい。その時クリスタが手にした力こそがプリズムオーラなのよ。

でもあたし達が来た頃には既にヴァイロン達と戦い始めて、その力も無くしたみたい。そしてあたし達はヴァイロン・プリズムオーラと戦い、それに打ち勝った。

それにヴァイロンも大元が何者かに倒されたため、既に滅び去った存在に成り果てている。どうしてモトウブの異能者たちの間では知らないものが……？

「おねえちゃん、どうかしたの？」

そうだ。今はリイナを護るために戦うんだ。考えるのは終わってからも問題ない……！

「……アレキサンドを除外して手札にジェムナイト・フュージョンを加えなすわ」

アレキサンドが姿を消し、あたしの手にはジェムナイト・フュージョンのカードが握られる。これで全ての準備は整った！！

「バトルよ！！　まずはクリスタでメビウスに攻撃！！　ラス・オブ・クリスタ！！」
『ハアアアッ！！』

クリスタの持つ宝玉が輝きを増し、その手刀がビウスの腹部を貫き……

「続けてアクアマリナでダイレクトアタック！！　アクアストリーム！！」

アクアマリナから放たれた水流があいつを飲み込まんと追い詰め……

「最後にジルコニアでダイレクトアタック！！　ジルコニア・プレッシャー！！」

その巨大な腕をタダシの真上から拳で殴るように叩きつける！！

「ぐあっ……！！」

忠志

LP：8000　7950　6550　3650

「コレであたしのターンは終了……攻撃した時、アクアマリナは守備表示に変更させてもらっわ。」

水流を呼び出した腕でそのまま守備体制を整えるアクアマリナ……コレでアイツがあノモンスターを呼び出しても戦闘破壊できない……！！ 仮にクリスタを狙ったところで返しのターンでジルコニアを使つてぶつ潰す……！！

「ボクのタアアアン！！ ドロー！！」

そう言つて奴が乱暴にカードを引き抜き、ニタリと笑つてカードを宣言した。

「スタンバイフェイズ時に黄泉ガエルの効果を発動！！ このカードが墓地に存在し、魔法・罠カードが僕のフィールドに存在しない場合僕はこのカードを特殊召喚する！！ 蘇えれ、黄泉ガエル！！」

そう言つて天使が舞い降りるかのようにカエルが姿を現す……次はどういった手を使うのやら……

「更に僕は『死者転生』の効果を発動！！ ダンディライオンを墓地へ落してクイック・シンクロンを手札に加え直す！！」

死者転生

通常魔法

手札を1枚捨て、自分の墓地に存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターを手札に加える。

ダンディライオン

効果モンスター（制限カード）

星3 / 地属性 / 植物族 / 攻 300 / 守 300

このカードが墓地へ送られた時、自分フィールド上に「綿毛トークン」

（植物族・風・星1・攻/守0）2体を守備表示で特殊召喚する。
このトークンは特殊召喚されたターン、アドバンス召喚のためにはリリースできない。

アイツがダンディライオンを墓地に落した瞬間、綿毛のようなモンスターが姿を現す……となると、ココからが本番ね……！！

「そして僕は手札からもう1体の黄泉ガエルを墓地へ送ってクイツク・シンクロンを特殊召喚！！」

再び姿を見せるクイツク・シンクロン……今度はシンクロ召喚が狙いね！！

「レベル1の黄泉ガエルと綿毛トークン2体にレベル5のクイツク・シンクロンをチューニング！！」

そう叫んであいつのモンスターが3つの星と5つの輪になって回りだし、あいつは声を上げて叫んだ。

「集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます……光さす道となれ！！シンクロ召喚！！ 粉碎せよ、ジャンク・デストロイヤー！！」

ジャンク・デストロイヤー……カールが愛用していたジャンクシンクロモンスターの1体！！シンクロ口上もカールと同じだなんて癪に障るわ……！！

ジャンク・デストロイヤー
シンクロ・効果モンスター

星8 / 地属性 / 戦士族 / 攻2600 / 守2500

「ジャンク・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、

このカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの
数まで

フィールド上に存在するカードを選択して破壊する事ができる。

「ジャンク・デストロイヤーの効果発動!! このカードがシン
クロ召喚に成功した時、素材にしたチューナーモンスター以外のモ
ンスターの数までフィールド上のカードを破壊する!! 喰らえ、
タイダル・エナジー!!」

その声を合図に胸部の球体からエネルギー波が放たれてジルコニ
アとアクアマリナにクリスタが破壊される……!!

「すまない、レイナ……!!」

気にしないでクリスタ、アイツは明らかに判断を誤った!!

「アクアマリナがフィールドから墓地へ送られた時、効果を発動
!! 相手フィールド上のカードを1枚手札に……この場合はエク
ストラデッキに戻ってもらわよデストロイヤー!! アクアリタ
ーン!!」

アクアマリナ最後の秘術が発動し、泡に包まれたジャンク・デス
トロイヤーがそのままアイツのエクストラデッキに戻っていく。コ
レでフィールドは事実上リセットって訳ね……

「……これで僕はターンエンド、さあチャンスだよ……! かかっ
てくるんだね!!」

フィールドがから空き状態でターン終了……ですって!? まだ通常召喚も出来たのに、どうして……!!

「何を考えてるの……あたしのターン、ドロー!!」

そう言って手札に来たのは……助かったわ。

「あたしは手札から魔法カード貪欲な壺を発動するわ!!」 貪欲な壺

通常魔法（制限カード）

自分の墓地に存在するモンスター5体を選択し、デッキに加えてシャッフルする。

その後、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「サファイア、ジルコニア、クリスタ、オブシディア、アクアマリナををデッキに戻して2枚ドローするわ!!」

現れた変な壺が仲間達を飲み込んでいって2枚のカードを吐き出した。この場合、ドローって言うのかしら……

「……よし!!」

この手札なら一気に総攻撃を仕掛けられる!! あからさまな罠もあるみたいだね……ココはこいつで行かせて貰うわ!!

「ジェムナイト・フュージョンを発動!! 手札のジェムナイト・ガネットとジェムナイト・ルマリンを墓地へ送ってジェムナイト・マディラを融合召喚!!」 ジェムナイト・ガネット

通常モンスター

通常モンスター

星4 / 地属性 / 炎族 / 攻1900 / 守0

ガーネットの力を宿すジェムナイトの戦士。

炎の鉄拳はあらゆる敵を粉碎するぞ

ジェムナイト・ルマリ

通常モンスター

星4 / 地属性 / 雷族 / 攻1600 / 守1800

イエロートルマリンの力で不思議なエナジーを創りだし、

戦力に変えて戦うぞ。

彼の刺激的な生き方に共感するジェムは多い。

ジェムナイト・マディラ

融合・効果モンスター

星7 / 地属性 / 炎族 / 攻2200 / 守1950

「ジェムナイト」と名のついたモンスター+炎族モンスター

このカードは融合召喚でのみエクストラデッキから特殊召喚する

事ができる。

このカードが戦闘を行う場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠・効果モンスターの効果を発動する事はできない。

ガーネットとトルマリンの宝玉が交じり合い、赤熱している腕と剣が特徴的な赤みが強いマディラシリンの宝玉騎士が姿を現す。

『姫様よお、戦いの時間かあ！？』

彼はジェムナイトの中では珍しく好戦的な性格をしている。今まで戦ってきた溶岩の戦闘民族の影響だつてクリスタが言つてたけど

……

「続けてジェムナイト・エメラルを召喚!!」

ジェムナイト・エメラル

効果モンスター

星4/地属性/岩石族/攻1800/守800

自分フィールド上に表側表示で存在する通常モンスター1体とこのカードをゲームから除外し、自分の墓地に存在する

「ジェムナイト」と名のついた融合モンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターを墓地から特殊召喚する。

そう言つて姿を現したのは翠色のジェムナイト……エメラルだった。両腕に円盤状の武器を装備した彼が弱々しく言う。

『姫え……どう見ても罨ですよ……』

「だからマディラも召喚したのよ!! マディラ、エメラルの順で総攻撃!! 言つとくけど、マディラにはダメーシ終了時まで魔法・罨・効果モンスターの効果を発動する事出来ないのであしからず!!」

あたしの命令に対してマディラが待つてましたといわんばかりに剣と拳を振りかざして攻撃を仕掛ける。『行つくぜえ!! マディラヒートニクス!!』

「ぐああああ!!」

忠志

LP:3650 1450

「出番よエメラル!! エメラルソーサー!!」

『一応撃ちますね……』

エメラルの円盤がアイツを捉えた瞬間、あいつがニタリと笑ったのが見えた。やっぱり攻撃を防ぐ手段を手札に忍ばせていたわね……！！

「速攻のかかしの効果発動！！ 相手が直接攻撃を宣言した時、こいつを手札から捨てることでバトルフェイズを終了する！！」

そう叫んだ時、あいつの手札からかしの様なモンスターが姿を現しエメラルの攻撃を防ぐ。カールの調整用デッキースに入ってたモンスター……それがあつたからこそ、から空き覚悟ジャンク・デストロイヤーを召喚したって訳ね……

速攻のかかし

効果モンスター

星1/地属性/機械族/攻 0/守 0

相手モンスターの直接攻撃宣言時、このカードを手札から捨てて発動する。

その攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

「……まあいいわ。ルマリンを除外してジェムナイト・フュージョンを手札に加え直してターンエンド……」

そしてあいつがカードを引くと、黄泉ガエルが再び召喚されてまたリリース要員にされた。

「黄泉ガエルをリリースして光帝クライスを召喚する……！」

光帝クライス

効果モンスター

星6 / 光属性 / 戦士族 / 攻2400 / 守1000

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、

フィールド上に存在するカードを2枚まで破壊する事ができる。

破壊されたカードのコントローラーは、破壊された数だけ

デッキからカードをドローする事ができる。

このカードは召喚・特殊召喚したターンには攻撃する事ができない。

姿を現したのは金色の帝……他の帝と違って特殊召喚でも効果を
使える代わりにそのターンの攻撃を封じる闇帝デイルグの対を成す
『双帝』と謳われるモンスター……！！

「光帝クライスが召喚された時、2枚カードを破壊する……マデ
イラとエメラルを破壊！！クライシスフラッシュュ！！」

クライスから放たれた眩い光があたしの仲間を弾き消す……！！
そしてあいつは強く言い放った。

「後破壊された分だけカードをドローできる効果がある……喜べ
よお、2枚ドローできるんだからさあ！！それに今僕は戦闘で
きないしねえ！！ターンエンドだあ！！」

そう言っであたしは手札に加える……まずい、今手札にモンス
ターが無い……！！あそこでクライスが来るなんて思わなかったし
……

「あたしのターン、ドロー……！！」

そう言ってドローしたのは壺の中の魔術書……コレに賭けるしかないわね……

「魔法カード、壺の中の魔術書を発動!!」

壺の中の魔術書（漫画版GX登場カード）

通常魔法（制限カード）

互いのプレイヤーは3枚ドローする。

このカードを使用したターン、自分は特殊召喚する事ができない。

「んん？ このカードって漫画版に出てきた……」

「お互いに3枚ドロー!!」

何か言ってる様だけど無視!! あたしの手札には……よし、モンスターカードが来た!!

「あたしはジェムナイト・サニクスを召喚!!」

ジェムナイト・サニクス

デュアルモンスター

星4/地属性/炎族/攻1800/守 900

このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、

このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、

自分のデッキから「ジェムナイト」と名のついたカード1枚を手札に加える事ができる。

今度は鉄球のようなものを持った赤と白の縞瑠璃の宝玉騎士が姿を現した。

「……………」

あたしがジェムナイトと共に戦うようになってからも何一つ喋らない寡黙な戦士、だけど明らかにあたし達と共に進むことを決意した眼でクライスを見据える……攻撃しろってこと？

「いいわよ、サニクスでクライスを攻撃！！ サードニクスフレイル！！」

フレイルでクライスに襲い掛かる、でもクライスはそれを光で受け止める。そしてアイツはたかが下級モンスターに何が出来ると笑っている。

でもね……その油断が命取りよ！！ 絶対的な上位者だろうがなんだろうが、あいつらはSEED事変でもウォザールブルグ動乱でも圧倒的な存在を打ち破ってきた！！

この程度の壁なんて、あたしだけでも……あたし達だけでも超えられる！！

「ダメージステップ時に手札のジェム・マーチャントの効果発動！！」

ジェム・マーチャント

効果モンスター

星3/地属性/魔法使い族/攻1000/守1000

自分フィールド上に表側表示で存在する

地属性の通常モンスターが戦闘を行うダメージステップ時に

このカードを手札から墓地へ送る事で、

そのモンスターの攻撃力・守備力は

このターンのエンドフェイズ時まで1000ポイントアップする。

あたしがサニクスと一緒に手札に加えたモンスターの効果を発動させる！！

1体の帽子を被った両手だけがついたモンスターが纏っていた宝玉が、サニクスの鉄球に纏わりつく。そして輝きを増した鉄球が遂に光の壁を砕き、それを操っていた光帝クライスをも打ち砕いた！！

忠志

LP：1450 1050

「更に1枚セットしてターンエンドよ。帝なんて前座出してないでさっさとあのカードを出しなさいよ！！」

「おねえちゃんがまつてるカードってあれのこと？ リイナこなくてもいいとおもうけど……」

リイナが尤もな台詞を言う。まあ、あればかりはあたしのわがままだからねえ……

「で、お話は終わり？ 僕のターンだよ？」

そしてアイツのターン……ドローしたカードを見据えた瞬間、奴は仕方がないといわんばかりに声を上げた。

「まずは黄泉ガエルを特殊召喚！！」

またカエルが蘇ってきた時、あたしは表情を強張らせた。その顔にはある種の確信……自分の勝利を疑っていない、見下したような顔が張り付いていた！！

「そいつをリリースして風帝ライザーを召喚!!」

カエルを巨大な竜巻が覆い、その中から1体の緑色の魔物が姿を現す……!!

風帝ライザー

効果モンスター

星6 / 風属性 / 鳥獣族 / 攻2400 / 守1000

このカードがアドバンス召喚に成功した時、

フィールド上に存在するカード1枚を持ち主のデッキの一番上に戻す。

姿を現したとき、サニクスの体が浮かび上がる。ジルコニアほどじゃないにしても重量級のジェムナイトであるコイツが浮かび上がるほどなんてどんだけよ……!!

「ライザーのアドバンス召喚に成功した時、フィールド上のカードを1枚デッキトップに戻す!! 吹き飛ばサニクス、ハリケーンバースト!!」

その叫びと同時にサニクスが風であたしの左腕目掛けて吹き飛ばされてきた。するとアイツは嫌な笑みを浮かべて笑ってきた。

「さてと、あいつと戦いたがつてたよな。だったらお望みどおりアイツを出してやる!!」

その発言を聞き、あたしの表情が強く強張る。当然だ、あのカードはある意味あたし達の運命を狂わせた……この世界で一番あたしが憎いカード……!!

「デッキから1枚墓地へ落す事で墓地からグローアップ・バルブを特殊召喚する！！ 出る、グローアップ・バルブ！！」

グローアップ・バルブ

チューナー（効果モンスター）

星1/地属性/植物族/攻 100/守 100

自分のデッキの一番上のカードを墓地へ送り、

墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

「グローアップ・バルブ」の効果はデュエル中に1度しか使用できない。

そう言つて地面から姿を現す球根の様なモンスター……それを見た瞬間、リイナが疑問を声にした。

「でもそのカード……いつかいまだしてないのに、どうして……？」

「一回だけあるわよリイナ……アイツがそのカードを墓地に落す事が出来た状況が……！！」

リイナの疑問にあたしが答える。そう、あのカードは……アイツの最初のターンで使った調律で墓地へ送られたカードだ！！

「そしてバルブの効果でデッキから1枚墓地に落す……」

そう言つた矢先、アイツの表情が呆然となる。そしてアイツは何かおかしいのか、狂ったかのような大声で笑い出してきた。

「な、何がおかしいのよ！？」

「ヒヤハハハハ！！ おかしくもなるさ！！ まさかさつきドローしたこのカードが召喚できる条件が整うなんて滅茶苦茶面白いギャグだよ！！」

どういう事……デッキトップのカードが墓地へ送られた事で特殊召喚が可能になるモンスターなんて一体何処に……

「光属性のクライスと闇属性の魂を削る死霊を除外してカオス・ソルジャー - 開闢の使者 - を特殊召喚！！」

魂を削る死霊

効果モンスター

星3 / 闇属性 / アンデット族 / 攻 3000 / 守 2000

このカードは戦闘では破壊されない。

このカードが魔法・罠・効果モンスターの効果の対象になった時、このカードを破壊する。

このカードが直接攻撃によって相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、

相手の手札をランダムに1枚捨てる。

カオス・ソルジャー - 開闢の使者 -

効果モンスター（制限カード）

星8 / 光属性 / 戦士族 / 攻 3000 / 守 2500

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の光属性と闇属性モンスターを1体ずつゲームから除外した場合に特殊召喚できる。

1ターンに1度、以下の効果から1つを選択して発動できる。

フィールド上のモンスター1体を選択してゲームから除外する。
この効果を発動するターン、このカードは攻撃できない。

このカードの攻撃によって相手モンスターを破壊した場合、

もう1度だけ続けて攻撃を行う事ができる。

「…………え？」

…………ちよつと待って？　よりによつてそれ！？　最初期に出てきた混沌帝龍と同じプレミア級の、それこそF・G・Dやダーク・ダイブ・ボンバーなんて目じゃない超がいくつ付いてもおかしくないレアカードじゃない！？　しかも閻属性モンスターもあの時墓地へ送る事に成功してたなんて…………！！

「1つの魂は光を導き、1つの魂は闇を誘う！！　光と闇は交じり合い混沌となり、開闢の力は今ココに現れる！！　現れる開闢の使者、カオス・ソルジャー！！」

そう言つて姿を見せたのは蒼い鎧を身に纏つた、伝説になった混沌の力を得た最強の剣士だった…………最悪、ダーク・ダイブ・ボンバーだけじゃなくてそいつもいたなんて…………！！

「まだだぜえ！！　レベル6の風帝ライザーにレベル1のグローアップバルブをチューニングウウー！！」

ライザーが6つの星になり、グローアップバルブが1つの輪になる。その瞬間、あたしは奴の口上に重なる形で“あの男”の声を聞いた…………

『我が身に宿る鉄血の翼！！ 黒き暴風となりて、全ての敵を打ち払わん！！ シンクロ召喚！！』

「禁じられた力、今こそ解放しろ！！ 貴様を解放した愚者に裁きを下せ！！ シンクロ召喚！！」

『「いでよ！！ ダーク・ダイク・ボンバー！！」』

ダーク・ダイク・ボンバー

シンクロ・効果モンスター（禁止カード）

星7/闇属性/機械族/攻2600/守1800

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

自分フィールド上に存在するモンスター1体をリリースして発動する。

リリースしたモンスターのレベル×200ポイントダメージを相手ライフに与える。

あたしはあのモンスターを倒す事を考え行動してきた。戦うことを望んでいた。でも、こんな事になるなんて思いもなかった。

状況はあの時より悪い。恐らくあのカオス・ソルジャーこそがア

イツのデッキの本当のエースモンスター。本来ならあのモンスターだけを相手にしてればよかったのに、あたしがあ言ったからあのようなモンスターまで出てきてしまった。

「バカな女だね君は！！　ダーク・ダイブ・ボンバーなんかを使わせなかったら勝てたって言うのにさあ！！」

分かってる。自分が一番バカな行動を犯したと言う事は……カオス・ソルジャーは１枚だけと言う制限があるけど値段さえ無視したらまだ使えるカード。

だけどダーク・ダイブ・ボンバーは違う。あのカードはあたし達が生まれる前に禁止を受けたカードであり、本来ならデッキに加える事が出来ないカード。それをあたしが破ったため、訴えてもあたしが負けるのは決定的だ。

「俺はカオス・ソルジャーで攻撃イ！！」

カオス・ソルジャーがあたしに向かって襲い掛かる。あのカードは伝説にもなったカード、効果はあたしも知っている。だからセツトしたカードの使い道はココじゃない……！！

「開闢双破斬！！」

カオス・ソルジャーの剣があたしの服を切り裂き、吹き飛ばす。

「きゃああああっ！！」

レイナ

LP：8000　5000

「おねえちゃん!!」

リイナが泣きそうになりながら慌てて近づく。結構痛むわ……今でも斬られた傷が深いせいで意識が朦朧としてる……

でもあいつらはこんな傷をいつも負って帰ってきてた……中には死んだ人もいた……

だから……そんな顔しないでよ、リイナ……

「大丈夫よ……そもそも、モンスターを蘇生させてたらそれこそあたしが負けてたんだから……」

そう。あの時ライザーがサニクスを戻さなかったら、さっきの攻撃がサニクスを破壊して第二刃があたしを切り裂いた。

そしてダーク・ダイブ・ボンバーのダイレクトアタックが決まって、ダーク・ダイブ・ボンバーの効果であたしのライフは0……

だったらカオス・ソルジャーの攻撃は甘んじて受けた方がまだ傷は浅くて済む……

「僕も召喚の手順をミスったよホント……さっさとバルブ使えばよかったんだけどね……まさかこんなカード来るなんて思わなかったからさあ!!」

そう言って高笑いを放つ。その表情は既に自分の勝利を確信し、あたし達でどう遊ぼうか企んでいる人でなしの顔……その顔を見てリイナは怯え、あたしも女としての嫌悪感を露にした。

「ダーク・ダイブ・ボンバーでダイレクトアタックだ!! マックス・ダイブ・ボム!!」

あのモンスターが変形してあたしに向かって襲い掛かる。そう、

あのカードを使うタイミングはココ!!

「リバースカードオープン!! 正統なる血統!! 墓地の通常モンスター・ガネットを攻撃表示で特殊召喚よ!!」

正統なる血統

永続罫

自分の墓地に存在する通常モンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。

このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。

そのモンスターがフィールド上に存在しなくなった時、このカードを破壊する。

姿を現したガネットだったが、ダーク・ダイブ・ボンバーの攻撃であえなく飲まれ、粉々に砕け散る。ゴメン、ガネット……!!

レイナ

LP:5000 3900

「……俺はコレでターンエンドさせてもらうぜ。流石に直接攻撃は怖いからな……」

ライフは3倍近く上回っていてもボードアドバンテージは圧倒的に不利。たとえサニクスを引いても守備表示にしたそいつをカオス・ソルジャーで除外してダーク・ダイブ・ボンバーで直接攻撃、その後でカオス・ソルジャーをリリースするだけで2600と1600のダメージであたしの負け……!!

「言っておくけどよ、手札には風帝ライザーがいるよ。何もしなくたって黄泉ガエルからライザーを召喚してジ・エンドってわけさ」

そう言って見せびらかすように仕向ける。確かに風帝ライザーのカードだ……攻撃できなくても正真正銘敗北の危機って奴じゃない……！！

「あ……」

その時思い出した。あの時、あの男もまたこの状況下で自分の勝利を確信していた。もう勝てるはずが無い、あいつはそうも言っていた。

でもあの時のあたしは最後の最後で1枚のカードをドローして、その状況を覆した。あの時とはフィールドが違う、手札も違う、デッキすら違う。

それにあの時のアイツは、あたしなんか比べ物にならないような絶対的不利な状況を覆した。まあキーカードはデッキに入れた覚えの無いカードだって言ってたけど、あの時はお互い様だ。

何だ……怖気づく心配なんて無いじゃない。でも横を見るとリイナが今にも泣きそうな顔でこっちを見てくる。

「……大丈夫よりイナ。あたしは負けないから」

そう言っただけ彼女を元氣付ける。でもあの子はやっぱりどこか怯えた表情でダーク・ダイブ・ボンバーとカオス・ソルジャーを見据えている。

「どっちにしてもあたしは退けない状況なのよ……」

上等……見せてやるわよ！！ ウォザールブルグでの最終決戦に比べたらこの程度の敵なんか怖くないわ！！

デッキトップのカードに指をかけて目を瞑る。そこにいたのはモ

トウブに来てから世話になつてゐる2つのグループに、三騎士の……
特に行方不明になつたあの2人の姿……

あたしは意を決して声を張り上げた。あいつらが、三騎士がここぞとばかりに宣言した勝利のための咆哮を！！

「ファイナルターン！！ ドロー！！」

そう言つてあたしはカードを引き抜く。即座にあたしは引き当てたサニクスを召喚する。

「あたしはサニクスを召喚して手札から魔法カード『馬の骨の代価』を発動させるわ！！」

馬の骨の代価

通常魔法

効果モンスター以外の自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を墓地へ送つて発動する。

自分のデッキからカードを2枚ドローする。

サニクスの姿が消えて行き、あたしはデッキに手を伸ばす。恐らくコレが最後のチャンス……ココを逃せばあたしは負ける。

だけど、それがどうした！！ SEED事変を生き抜いた人類舐めるな！！

「ドロー！！」

2枚のカードを見据える……1枚はあの時のデュエルを決めたカードだけど召喚条件を満たしていないのでフィールドには出せない。だけでもう1枚のカード……そして手札に残った2枚のうち1枚であたしのデッキ最強のモンスターを召喚する事が出来る！！

「……なんだよ？ 何ドローしたんだよ！？ 何でそんな顔してんだよぉー！！」

狼狽するのも当然よね、あの男はこのターンを凌いだら勝てる状況だから。でも残念でした、あんたの『次のターン』は永遠に訪れない！！

「手札から魔法カード融合を発動！！」

融合

通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた

融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「融合！？ バカな、何で『融合』なんだよ！？ お前の手札にはジェムナイト・フュージョンがあるだろうがぁぁぁ！！」

アイツはうるたえる。そう、既にあたしの手札にはジェムナイト・フュージョンのカードは存在する。でもこれから呼び出すのは少しばかり特別なカード……

「おおいにく様、あたしの最強モンスターはそれじゃ呼び出せないのよね。さあ出番よー！！」

あの男に引導を降した“母さんの形見”と、あたしのデッキのエースを交わらせる……！！

「七色の虹よ、水晶の宝玉騎士よ！！　今こそ交わり、その輝きを持って闇を打ち払え！！」

そして2体のあたしのデッキのエースは交じり合い、1体の虹の名を有するエースが姿を現す！！

「ジェムナイト・クリスタと……究極宝玉神レインボードラゴン
を融合素材にしてレインボー・クリスタを特殊召喚！！」

今ココに虹色の宝玉と白銀の翼を持ったクリスタが姿を現した。

レインボー・クリスタ（オリジナルカード）
融合・効果モンスター

星10 / 地属性 / 岩石族 / 攻4450 / 守2950

「ジェムナイト・クリスタ」+「究極宝玉神」と名のついたモンスター1体

このモンスターの融合召喚は、上記のカードで行えず、融合召喚でしか特殊召喚できない。

手札の「ジェムナイト・フュージョン」を除外する事で1ターンの1度だけ以下の効果から1つを発動できる。

このカードの効果はそれぞれデュエル中1回しか使用できない。

相手フィールド上のモンスターを全てデッキに戻す。

相手フィールド上の魔法・罨カードを全てデッキに戻す。

相手の墓地のカードを全てデッキに戻す。

「レインボー、クリスタだって！？　そんなカードなんて無いぞ！！　なんだそりゃ！！」

効果はあるけど使わないで置くわ。何せ今回のデュエルの勝利条件は“アイツ”を倒す事。生かしておく理由は無い！！

「行くわよレインボー・クリスタ！！　ダーク・ダイブ・ボンバーを攻撃！！」

『了解したぞレイナ！！　ハアアアア！！』

クリスタの腕から七色の輝きが増していく。そしてその拳でダーク・ダイブ・ボンバー目掛けて打ち進む！！

どうだ、あたしは絶望的な壁をまた越えてやったぞ。

あの時とは違えど、父親だった男を倒した時と同じ台詞をあたしはココで言い放った。

「進む道を塞ぐヤツがいたら、何者だろうと乗り越えて進むまでよ！！　オーバー・ザ・レインボー！！」

レインボー・クリスタの拳がダーク・ダイブ・ボンバーを打ち碎き、カオス・ソルジャーを巻き込んで盛大に爆発し、その拳はアイツを見事に捕らえた。

「ぐああああああ！！」

忠志

LP：10500

あいつは倒れ、あたしが従えていたモンスターも用が終わったといわんばかりに姿を消す。そのデュエルディスクから1枚のカードが零れ落ちた。

そのカードはダーク・ダイブ・ボンバー……あたしにとって最も憎むべきカード……どんなに呪われたカードでも、“これ”以上に怒りも憎しみも湧き上がってこないだろう事は明らかだった。

そいつのお陰であたし達の絆は滅茶苦茶になって、あのような結

末を迎えた。

「このカードのせいで……あたし達は……!!」

そう。コレは決定付けられた結末。高値で取引されてるレアカードだろうがなんだろうが知った事じゃない。

あたしは何の躊躇いも躊躇も後悔もなく……

「……!!」

元が何だったのか分からなくなるまでズタズタに引きちぎってやった。

姉としての戦い（後書き）

少しオリカの効果が強すぎましたか……？

ただ、レインボー・ドラゴンを含めた攻撃＋ダーク・ダイブ・ボンバーを破壊してのフィニッシュをしたかったので調整までしてこの有様……

まだ中二病患者末期が出ない……ネタはあるが、今度は敵対敵の決闘があるんです……まあ、そっちはテキパキと終わらせたいです……ホントに切実に今年中に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3100x/>

傭兵と決闘者の協奏曲

2011年11月30日09時48分発行